
その名も嘘つき勇者様

瀬田一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その名も嘘つき勇者様

【Nコード】

N7863X

【作者名】

瀬田一郎

【あらすじ】

物心がついた時から塔に閉じ込められていたお姫様は本でしか見たことのない外の世界に憧れ、いつしか外の世界に出たいと願った。そして物語が始まるあの日、外の世界に連れていってくれる勇者様が願いを叶えてくれた。二人を繋ぐのは「嘘」と「秘密」。それが破られた時、二人の運命は―。ハートウォーミングなお話。一応、中盤からハーレムになる予定。本格異世界ファンタジー。

プロローグ（前書き）

――エレン領にある小国。王女は塔にとらわれて遠くに見える自分の生誕祭を窓から覗いていた。すると近くにある時計台の屋上に人影が王女に手を振っている姿が見えたところから物語は始まる。

プロローグ

「高い塔に閉じ込められたお姫様を助けるのは勇者様って決まってるんです」

「あのな……俺はお前に頼まれてここへ来たんだぞ？」

「はい。知っています」

キラキラとした瞳で塔より少し低い時計台の屋上にいるレオンに視線を送るお姫様。

困り顔の推定、勇者様は仕事の依頼書を胸のポケットから出してお姫様に見せるために広げて持ち上げる。

「ほらッ。お前のサインだろう？」

「はい。それでも勇者様でしょう？　だってその格好はどう見ても勇者様ッ」

「あのな……遠くに見える演劇に紛れて城へ潜入したんだ。カナリアの巫女っていう演目知っているか？」

「知っています。本で読んだことがありますが、その格好はアルドリア様の格好じゃありませんか？」

「そうだけとお前を助けるために脚本を変更して勇者の出番は頭とラストの約束の地へ連れて行く部分だけなの」

レオンは依頼書をポケットに乱暴に押し込みながら遠くに見える舞台を指差した。

移動演劇団「シアテイル」が姫様の生誕16周年を祝う感謝祭のメインイベントの劇を行っている最中で観客はその劇に夢中だった。

舞台ではレオンの兄のテッドが扮する仮面の騎士が勇者と巫女を守る為に敵軍へ単騎で突っ込む前の長台詞のシーン。

「クライマックスまで時間が無い。終わりの戦闘シーンの演出で火花が夜を彩るからそれに紛れてお姫様を抱きかかえて走ってアルファレスへ乗り込むんだ」

「アルファレス？」

「そう。俺らの移動飛行挺だぜ。中はちょっと狭いのが難点だが塔の中よりは広いと思うぜ」

「はい。この塔は狭くて苦しくて自由がありません。何をするにも執事を通さなければなりません」

「……あのさ、だったらこの依頼書も執事を通したのか？」

「はい」

「何だろうな……一気にやる気を失くしちまうぜ。セキュリティの甘いのか、執事がお前を自由にさせたいって思っているのか」

大げさにため息を吐いて肩をすくませるレオン。

舞台下の奈落から中庭の真下を通る水路を抜けて時計台の複雑な内部のからくりを通ったのがバカらしく思えるとやはりため息は深くなる。

その様子を見て具合でも悪いのですか？と訊ねる純粋な瞳のお姫様にレオンはゆっくりと首を横に振った。

「まあ仕事だからなッ。嘆いている場合じゃない」

「はい。では私はお待ちしております」

「待つ？ お前が来るんだ。時間が無い。ほらッ」

「ほらって！！ こんなにも高い塔から飛び降りろとおっしゃるのですかッ？！」

「仕方ないだろう？ 魔法を破る時間も無い」

レオンは両手を広げて受け止めるジェスチャーをする。

塔と時計台は隣接しているとは言っても数メートルの距離はある。

そして高い位置にあるせいで風が強い。レオンの金髪も風にあおられて逆巻いていた。

ためらっているお姫様に早くしろ、とも言えずに時間だけが過ぎていく。長台詞が終わる合図の長剣を頭上に掲げる姿に歓声が沸いていた。

「だったら……あの台詞を言ってください！！」

「はあ？」

「あの……アルドリア様が幽閉されていた巫女を救いだす時に言ったあの台詞をッ」

（何だ……こいつは……）

「お願いします！！　そう言われたら私も勇気が出そうなんです」

「だって俺は勇者じゃねえし俺が言っても嘘なんだぜ。劇で涙を流す奴らの気がしれないぜ」

「嘘？違います！！　あなたは勇者様です」

「だから……これは衣装だったの……ああ！！　もうっ」

レオンは進まない話に苛立ちを募らせる。強風にあおられるうっとおしい長い髪も無駄に装飾してある重たいだけの鎧も聞きわけのない女も大嫌いだった。

だがどれもやらなきゃ生きていけない。親方のマウルには世話になってるしここは居心地が悪くない。仲間との関係もまあまあだ。そうレオンは自分に言い聞かす時間を挟んでようやく言う気になった。

跪くレオン。肩腕を斜めに下げて自分を紹介しながら共に来てくれませんか？と言うたったそれだけの台詞。

「ダメッ！！　もっとちゃんとやって下さい」

「あのなッ……」

何か言い返そうとしたレオンに注がれる期待する視線。立ち上がろうとする足を止めてもう一度、きちんと跪いた。

「怖がらないでください。私の名前はアルドリア。かの国から精霊の力を借りてここまで旅を続けております」

「精霊の力……？」

「はい。この火の精霊クーパーに水の精霊セイラム。土の妖精ハイドに風の精霊シーアテイルに導かれてあなたを助けに参りました」

本来の舞台ならば魔術師がそれぞれの精霊の名前を呼び時に魔法を詠唱し、勇者の背中越しに精霊がほほ笑むという演出がある。

その間をたっぷりと費やしてレオンは立ち上がり、塔にいるお姫様へ手を伸ばした。

「行けません……私は外の世界が怖い……」

「怖い？ 精霊の加護があればどんな場所にいたとしても恐れることはありません」

「無理です。外の世界はとても怖い場所だと聞いております」

「恐れることはありません。ここへいる精霊をご覧ください。彼らは怖いでしょうか？」

「……いいえ。とても優しくほほ笑んでおりますわ」

「そう。世界は彼ら四つの精霊からなる素質で作られています。いわば彼ら自身なのです」

「理屈はわかります。でも怖いものは怖い……。私は産まれてからずっとここで暮らしてきました。今更ここを出るのは怖くてなりません」

「知ることを恐れてはいけません。ここにいれば何も変わることはありませんが何かを手に入れることは出来ません」

「失うことはありません」

「確かに失うことは何もありません。それは何も持っていないからではございませんか？」

「何も……持っていない？」

「そう。あなたは何も持っていない。だからこそ何かを手に入れることを恐れるのです。あなたはあの花の匂い？ あなたは風に触れたことがありますか？ あなたは恋をしたことがありますか？」

「恋……？」

「あなたは美しい。この私の胸に宿るこの気持ちをあなたはまだ知らない。この心は世界をより美しくしてくれます」

「美し……く？」

「そう。あなたの瞳には世界は平凡で退屈で窮屈に見えているはず。私の手をとってくれるのでしたら私が見せましょう」

「美しい世界を？」

「はい。怖がらないでください。あなたはそっと私の手を握るだけでいいのです。そうしてくれば私があなたを守り続けると約束をしましょう」

「守ってくれる？」

「さあ手を伸ばしてください。もしも世界があなたを不安にさせるならば私はその全てと戦いましょう。そして必ず勝利をおさえめて見せましょう」

「……アルドリア」

「カナリア様。私はずっとあなたの傍におります。あなたを守る為に私はいる」

台詞はここまでで終わる。

最後は巫女が自らの手でアルドリアの手をとって旅が始まるというシーン。共に行きましようって言えばいいじゃないか、と激昂した稽古を思い出すレオン。もうずっと前の話だ。

何度も行っている演目で一番の人気を誇る物語。特に女性からの

人気が高くこのシーンをする度にうつとりと恍惚した表情を浮かべるのがレオンには不思議だった。

「アルドリア様ッ!!」

「——ッ!! もっとゆっくりと落ちろってんだよ」

窓枠に足を乗せて勢いよく飛び降りてくるお姫様を慌てて受け止めるレオン。

勢いを殺す為にお姫様を抱いてからグルッと身体を回して時計台に立たせて手を離すと腰が抜けたお姫様がゆっくりと崩れていく。

「怖かった……」

涙顔になり呆然と塔を見上げるお姫様。窓には魔法人形がいてお姫様にお別れを言うように手を振っていた。

「魔法人形か……」

「シルクくんです」

「シルクくん？」

「名前です。人形じゃありません」

「はぁ……お姫様ってのも大変なんだなッ」

レオンは苦笑いで視線を魔法人形から震えるお姫様に戻した。

「ほら、首に手を回してジッとしていろよ」

「はい。アルドリア様」

「アルドリアじゃねえんだよな…俺の名前はレオンってんだ」

「レオン？ 素敵な名前ですね。私はアスハ・レイチェル・フラン・フィールランド・オルト——」

「なげえよ。どれが名前かわからなねえけどフランでいいか？」

「フラニーって呼んでください。カナリアもリアって呼ばれております。愛称っていうのでしょうか？」

「まあ……お前がそれでいいならフラニーって呼ぶぜ。俺はレオンでいい。他の仲間は後々説明するからな」

「はい」

フランの細いウェストに手を回すと震えていることが指先に伝わってくる。しっかりと抱きしめて耳元で首に手を回せ、と離すなよと釘をさした。

レオンの言った言葉を何度も繰り返しているフランに不安を覚えながらも抱きかかえて立ち上がる。やけに軽くて言いようのない気持ちになった。

見上げる塔。一部分しか見えていないがロクに運動が出来るスペースなんてあるとは思えなかった。円形の塔で幅も十メートルも無いだろうと思っていると魔法人形が力を失って倒れた影が見えた。

「もう演目も最後のシーンに入りますよ」

「そうだな。急がないといけないぜ。走るからただ黙っているよ」

「はい。レオンが守ってくれますもんね」

「ああ。何があろうと守ってやるよ」

レオンは半ばあきれながらそう言って時計台の屋上から複雑なからくりがある内部へと続く階段を降り始めた。

時計台内部

時計台を降り終えて水路に入る。下水道ではなく庭にある池を管理する水路なのでニオイはあまり無いと思ったがフランには厳しいみたいだった。

「大丈夫か？」

「……はい」

「ニオイはキツイよな。慣れちまった俺でも嫌な気持ちになるぜ」

「いえ……ニオイじゃなくて」

言葉を言い終わる前にレオンの首に巻き付く腕が力づよくなった。水路の低い天井には妙な圧迫感がある。声が反響するのも慣れなければ怖いと感じる奴もいる。衣装を担当するヤーミンも暗くて狭いところは嫌だって泣いていた。

レオンは少し速足で水路を抜けようとするが、足音が反響し気付かれるとまずいので気持ちだけ速く歩くようにした。

「水路ってのは舞台裏と繋がっているんだ。そこから船に乗るには舞台を通らなければならないんだ」

「オルト平原ですね。エレン領とノアール領のちょうど真ん中に広がる広大な草原で魔術師と兵士が戦います」

「そう。兵士達が精霊を閉じ込めていたのを姫と勇者で解放するんだ。その最後の封印を解く遺跡を守る為に魔術師達は兵士と戦うんだ」

「知っています。魔法を使えなくて剣と楯で戦うんですね？」

「魔術師が見よう見まねで戦って兵士と互角ってのが気になるんだよねーって思わねえ？」

「大切なものを守るためには誰もが素晴らしい力を発揮出来るとそ

う書いてありました」

「小説や伝記にはだろう？ 現実には毎日訓練する兵士と魔法で何でもしてしまう魔術師が互角ってのがね：どうしても気になるんだよな」

愚痴っぽく言うレオンにいつしか熱が入るフラン。

本で得た知識や物語のシーンを熱く語ると次第に首に絡まる腕は緩まってきた。作戦は成功ってところかな？とレオンはほほ笑んだ。

「何を笑っているんですかッ！！」

「いや何でもない。本が好きなんだなって思ってたさ」

「本は好きです。私にもらえる者と言えば本だけでしたから」

「そりゃ魔術本と物語なら物語だよな」

「魔術本は一度も読んだことはありません」

「読んだことが無い？ だったらあの魔法人ーじゃなくてシルクくんはどうやって動いているんだ？」

「だからシルクくんはシルクくんですってばッ！！」

誰かが監視目的で人形を置いたのかな？とレオンは推測する。手紙も執事を通したと言っているし莫大な賃金ももらえたと親方は笑っていたことを見てもこれは黙認されているものと考えられた。

塔に閉じ込められている理由も知らないが可哀そうだと思って柄の間の自由を与えてやろうという親心だと解釈するレオン。

「聞いていますかッ？！ 私は大切な話を」

「聞いているよ。悪いな。シルクくんはシルクくんだな。お前をずっと守ってくれていたんだから感謝しなきゃな」

「シルクくんは私の友達です。カナリアで言うところの精霊のマップです」

カナリア姫が幽閉されていた部屋にいた精霊のマップとはネズミやリスなんかをファンシーにして丸くしたような感じの生き物で常にカナリア姫の肩に乗っていた。

塔で見たシルクくんは毒地や鉱山の奥で作業する時に使われる魔法人形。フランよりも大きく単調な命令しか理解できないはずだ。

「大きさは全く違うけどな」

「大切なのは気持ちですよ。マップのようにシルクくんは私にとって大切な友達なのです」

「友達を置いてくるのか……良かったのか？」

「大丈夫です。執事にお手紙を書いておきました。シルクくんを大切に扱うように、と」

「それなら大丈夫だな。まあ一緒に連れていくのも無理だろうしいい判断だ」

レオンが褒めると顔を赤らめて喜ぶフラン。

子供のように無邪気な笑顔で鼻歌でも歌いだしそうだったのが可愛いなって思ったレオンもつられて微笑み返す。

いい雰囲気が続いている。この調子なら水路は何事もなく抜けられる。話している間にもう舞台からの光がもれて見えている。

「舞台の光だ……顔は見せるなよッ。見られると演劇を止められるかもしれないからな」

「はい」

「じっと抱きついていろ。少しゴタゴタした場所を通るからなッ。外の音も気にするな。戦闘する声や音も怖いかもしれないが大丈夫」

「はい。守って……守ってくださいますもんね」

「あ……ああ……」

あまりにも綺麗な瞳で言うものだから調子が狂いそうになるな、

とレオンは心中で言って光を睨みつけた。

頭の中で何度も繰り返し返した戦闘シーンを思い返す。出たすぐに歓声が沸いて親方が扮する兵士に見つかる。ゆっくりと全体を見渡し、て台詞を言って戦いながらゆっくりと袖へはけていく。

袖に隣接してあるシアテイルの楽屋にフランを置いて代役のミレイを抱きかかえてまた舞台へ戻り、約束の地の件をして舞台が終わる。瞼の裏で拍手する観客が見えて胸がトクン、と高鳴った。恥ずかしいが悪い気分じゃない。

酔いしれるほどの演技じゃないが勇者に選ばれた人だけがもらえる歓声と拍手。栄光の光が幕に閉ざされるまでは勇者だけを照らしている。

「……すごい歓声が聞こえる」

「もう少し近づくと歓声も消えて剣がぶつかる音や演者が叫ぶ声の中を通る」

「緊張しますね」

「緊張？」

「初舞台ですもの。ずっと夢だったんですよ」

「夢…か。顔を出せないのが残念だけど舞台は悪くないぜ」

「はい。私はきつといい演技をすると思います」

「自信家だなッ。ハハハ」

レオンが大きく笑うとフランもつられて笑った。

「行くぜ。舞台だ」

表情をふつと戻して厳しい顔に戻るレオンが光を抜けて舞台へと立つのであった。

舞台

「アルドリアッ！！」

舞台の奥に作った遺跡のセットから出てくるレオンに剣をかざして叫ぶ親方扮する兵士長ガザン。遺跡の足元には魔術師の格好をして剣と楯を持つ人間が扇状に広がって遺跡の入口を守っていた。

「封印の解放は終わった」

「何だとッ?! そんな……バカな……」

「もうお前達が戦う理由も無い。剣を収めよ」

「クッ……そんな……」

ガザンは剣を落とし、膝を折って前のめりに倒れる。

それを見て魔術師も戦っていた兵士も剣を落としてレオン扮するアルドリアを複雑な表情で見上げる。それぞれの表情を見渡す。

ほんの数秒だが、舞台の上では数分にも思える沈黙。腕の中にあるフランの小さな胸が高鳴っているのがレオンの身体に伝わってくる。

「引け!! ノアールの兵士よ」

「……巫女様は」

「腕の中にいる。私がこの手で約束の地へと連れていく」

「……」

「引け!! これ以上の争いに何の意味がある」

レオンが叫ぶとガザンは顔をあげて剣を支えにしてゆったりと立ち上がる。

「それは出来んッ」

「何ッ!! もう終わったということがわからないのかッ」

「わかってる。だがッ……だがッそれでも私には兵士長としての誇りがある」

「部下の命と誇りを天秤にかけると言うのかッ。愚かな」

「若い兵士も同じ心でいる。我が国、ノアールのためでなく一人の兵士として引けぬッ」

ガザンがそう言って遺跡へと走り始めると再び戦闘が開始された。それに合わせて照明も音楽も変わり花火も打ちあがり静まり返っていた客席からも歓声が続いた。

(行くぞ。いいか? しっかりつかまっているよ)

腕に抱きつくフランにしか聞こえない声でつぶやいてから舞台へ降りる階段をゆっくりと降りた。

魔術師に守られながらも何故かゆっくりと戦地を歩く演出に涙する客もいた。こういうのがバカらしいんだ、と思ったレオンだが表情は崩さずに真剣な顔で歩みを続ける。

魔術師を倒してレオンへ襲いかかってくる兵士の一太刀をかわして剣で胴を薙ぐ。倒れる兵士が巫女へ手を伸ばそうとして息絶えた。狭い舞台だが襲いかかってくる兵士を払っていくので数分はかかる。

そして最後はガザンが目の前に立ちはだかる。

「退いてくれッ!!」

「退けぬ」

「だったらこの剣でお前を斬る」

「斬れるものならば斬ってみせよ!! ノアール最強の兵士を倒せぬならば巫女様を守り続けることなど出来んわッ!! 覚悟せえ」

ガゼンは幼少期の巫女を守る護衛役としていたこともあり、思い入れが特別にあるという設定だった。

掛け声と共に斬りかかるガゼンのわき腹を斬って、その背後でガゼンが巫女の名前を呼んで倒れてこのシーンは終わりだ。

ガゼンが倒れる派手な音が背中に聞こえて剣を捨てて舞台袖へと入る。

客席の興奮もピークになり、割れんばかりの拍手と声援が鳴り止まなかった。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「終わったぜ。ここはもう楽屋になる」

「……ふう。かなりドキドキしました」

「初舞台なんだ。緊張して当たり前さ」

「ど、どうでしたか？きちんと出来てましたか？」

「ああ。才能あるぜ」

ニコリとほほ笑むフランを楽屋の椅子へ座らせるレオンヘフラシと同じ格好をしたミレイがつかつかと近寄ってくる。

「ずいぶん仲が良さそうねッ！！」

「出番が少ないからって怒るなよ」

「だって！！　せっかくの巫女の役なのにどうして今回だけ違う構成なのよッ！！　これじゃ主役はテッドみたいじゃない」

「確かに兄貴ばかりのシーンが多かったがすねるなよ。今回は作戦が同時進行なんだぜ」

「わかってるわよッ」

表情を強張らせるミレイは横目でフランを睨む。フランは怯えながらも笑みを浮かべたがそれも無視するミレイ。

「八つ当たりだぜ」

「わかつているって言っているでしょう。もうセットの組み替えも終わるから行くわよ」

「あいよ。見せてやろうぜ。最後の名場面ってやつをさ」

「言われなくても」

何とか機嫌をなおそうとするレオンを突っぱねるミレイはレオンを通り過ぎて薄暗い楽屋の隅にある全身鏡で自分の姿をチェックしていた。

鏡の上部には小さなライトがあって顔に影が出来てしわに見えるのが嫌だわ、と嘆くミレイの背後でその背中を見つめるフランの前へ跪くレオン。

「少しだけ離れる。すぐに帰ってくるから心配するなよ」

「はい。大丈夫です」

「ああ。その笑顔を忘れないでくれよ。何処かの誰かさんみたいに怖い顔をしているとしわが出来るぜ」

フランはふっと笑うと鏡越しに聞こえているわよ、とミレイが返事をしてくる。

グッと堪えてレオンを見つめるフラン。レオンは約束だ、と言って立ち上がりミレイの隣へと並んだ。

遠くにいつてしまうようで不安になるフランは手近にあった柔らかな人形を胸に抱き寄せて顔を沈めたのであった。

☆

☆

☆

☆

☆

セツトはアナンの滝をみおろせる展望台に変わる。

実際にあるアナンの滝は足元に広がる穴は直径100メートル。底が見えなくて地球のヘソとも呼ばれていた。

そこでアルドリアと巫女は別れることとなる。全ての封印を解放し終えた精霊がこの場所に集まり、この穴へと吸い込まれることで地球と同化すると言われている。

「アルドリア……精霊が綺麗ですね」

「あなたに解放された喜びで精霊達も輝きを増しているように見えます。私が精霊の加護を受けた時よりも力強い精霊の力を全身で感じます」

「そうですね。これで全ての旅が終わります。あなたともここでお別れですね」

「私がお守り出来るのはここまででございます」

その返答に表情をくもらせる巫女役のミレイ。

本当はずっと一緒にいたい、と言えないでいる巫女と同じ気持ちなのだが離れなければならぬ運命を受け入れたアルドリアの別れのシーン。

旅は精霊の解放すること。それが終われば共にいることは叶わない夢であった。

理由は一つ、巫女には精霊と共にこの世界を守らなければならないということだった。人間でありながら精霊となる巫女が人間である部分（アルドリアと共にいる自分）と決別しようとするシーン。

「本当にあなたに連れられて外の世界へ来て良かった。花の匂いも風の冷たさも……人々の温かさも知りました。決して本ではわからない現実もこの目で見る事が出来ました」

「はい」

「ありがとうございます。あの時にあなたに外へ連れられ無かったのなら私は一生部屋の中が全てだった」

「……そう言ってくださることに感謝いたします。巫女様」

「巫女様……最後まであなたは名前と呼んでくれませんでしたね」

悲しそうに笑うミレイを複雑な表情で見つめ返すレオン。

アルドリアはわからないが、いつもテッドならこう言った表情をするので真似をしていた。

ノアール領では主役をやりがるテッドもエレンでは顔を見せたくないと言って代役をさせられるレオンの演技は常にテッドの真似をしているに過ぎない。

「名前を呼んでももらえませんか？ アルドリア」

「……それは出来ません」

「どうして？ あなたは私の知らない世界を教えてくださいました恩人なのです」

「……理由などいつの間にか忘れてしまいました」

「もうあの日、あなたが外の世界を教えてくださいました日から一カ月も経ちますものね」

「私は何もしておりません。言うなれば運命があなたを導いたのでございます」

「運命……精霊や魔術師と同じ言葉で私とお話するのですね」

レオンはその言葉に隠した感情をかみしめるように沈黙で答えた。精霊の光が強くなって催促をしているように点滅している。それを横目にミレイは目を閉じてください、と言った。

その言葉に目を閉じるレオン。

ゆっくりと近づいてくるミレイの足音がレオンの目の前で止まった。

「あなたとはもっと一緒にいたかった。あなたともっと多くの世界を見たかった。あなたとずっと一緒にいたかった」

レオンがゆっくりと目を開けると目の前にいたミレイが背伸びをしてレオンに口づけを迫っていた。

唇を重ねる二人。身体を抱き締めようと葛藤しているとミレイが一步下がってほほ笑んだ。

「それだけで私は嬉しい。離れても心はずっとあなたと一緒にいます」

精霊の光がミレイの身体へ注がれた。レオンの立ち位置からすれば見えているが、観客席から見ると光の屈折の関係で姿が消えて見える。

一人残されたレオンは光へ触れようと手を伸ばすと光が消えてしまふというシーン。

光で見えなくなっている隙に足元の装置が沈んで舞台裏へ入れるようになっているのだが、急ごしらえで作った舞台にはそんな装置は取りつけられていない。

今回は光へ手を伸ばしている間に幕が下りて演劇は終了となった。拍手や喝さいが鳴り止まない舞台は大盛況の内に幕を閉じたのであった。

シーアテイル船内

全てが終わり楽屋へ戻るレオンとミレイ。

楽屋には全ての舞台関係者が親方を中心に集まってフランも親方の隣でその輪に加わっていた。

「今日もいい演技だった。目的のお姫様も奪還出来た。後は逃げるだけよ」

「逃げるって……何だか嫌な言い方だぜ」

「いいんだよ。もうこの街へ二度と来ることは無いんだからよ」

「はぁ？ 何でそうなるんだ？」

「一国の姫様を誘拐したんだ。それなりの覚悟はしておけよ」

「お姫様を誘拐って相手側も知っているんだろう？ だったら別に……」

「甘いナツ。知っていたとしても黙ってお姫をさらわせると国の面子に関わるだろうがッ。ドタバタと逃げる姿を見せればこの国の面子も守られるってもんだよ」

ガハハ、と大柄の身体を揺らしながら笑う親方に引き気味のフランだった。

周りにいる演者も人種こそバラバラだが特別小さな人間ではない。だが親方は全員の倍以上の大きさがある巨人族の生き残りだった。

このシーアテイルに乗っている全員は何かの生き残りだったり見世物小屋から引き抜かれたいわゆる普通じゃない人間達だった。

見た目もモンスターに近い人間もいるがこの船では普通に暮らしていた。それも親方の人柄のおかげだとテッドは言っていた。

テッドとレオンも特別な人種とやらでテッドがエレン領で顔を出したくないと言う理由もそこにあった。

見た目は人間そのものなのだが、瞳の中に白い輪がありエレン領

では悪魔が宿る肉体と言われて忌み嫌われていた。逆にノール領にいれば精霊が宿る神聖な肉体と呼ばれている。

そんな他人からの感情を気にしないレオンは感受性が違うんだ、という親方の言葉に妙に納得している。テッドは小さな時から人目を気にし過ぎている気がする。

「それで水路を通って隠れて連れだしたわけね」

「堂々と明け渡してどうするッ。小さくとも王位継承権が低くともこの国のお姫様であることに違いはない！！」

「何処の国も面子が大切ってことね。あー嫌だね」

「それがあるおかげでこっちはいい仕事をさせてもらってるんだ。ガハハ」

親方はポツテリと出たお腹をさすって豪快に笑った。

「だったらこんなにダラダラと出ていいのかい？今頃、兵士達は大騒ぎじゃないか？」

「もうそろそろ合図が来る。城下町を回るパレードがいいところに来た時に花火があがる。それがくれば一気にこの船を空へ飛ばすぞ」

「片付けもしてねえのに？あぶねえよ。人だっているんだ」

「安心しろ。パレードを見る為に人はいない。あるのは舞台だけだ。どうせなら派手にぶっ壊して空へ逃げてやろうじゃないか」

派手なことが好きな親方らしいプランだった。目立って悪党に徹しろ、というのが奪還屋稼業での鉄則らしい。

悪党になれば好奇心で客入りが増えて演劇の方も潤うし一石二鳥だと胡散臭い話を耳が痛くなるほどされた。

「それじゃ持ち場へ戻れ。船を動かすぞ」

生返事でいつもの銃座席へ向かうとするレオンの肩に手を乗せ無理やり振り向かせる親方がフランの背中を押した。

「今日はこの子の面倒を見るのがお前の仕事だ。案内をしてやれ」
「あーらレオンにぴったりな仕事ねー頑張っつてね。ゆ・う・しゃ・さまー」

バカにするようにレオンの脇を通り抜けるミレイ。

親方に背中を押されてバランスを崩しかけたフランの身体を抱きとめた姿を見て親方は満足そうに笑って部屋を後にした。

残された劇団員も持ち場へとダラダラと移動していく中、二人はどうすればいいのかわからないままにまごまごとしていた。

「とりあえず……あの大きいのが親方だぜ」

「はい。とっても大きい方ですね」

「そう。それで口が悪いあいつがミレイ。そして今部屋を出ようとした仮面の騎士がテッド」

「さつきあいさつさせてもらいました。優しい人ですね。レオンさんと兄弟なんですよね？」

「そうだよ。背が高くてカッコいいのがテッド。ちんちくりんのライオンヘアーなのがレオンってね。覚えやすくていいだろう？」

「ふふふ。飾らない人なんですね。レオンさんとってもカッコいいです」

「照れるなッ。ハハハ」

テッドはその様子を遠くで見っていた。背が高く黒髪の長髪で顔立ちも似ても似つかない。ただ瞳の中にある白い輪だけが兄弟だということを教えてくれる。

レオンがテッドと目が合うと無表情で部屋を出ていくテッド。女好きで誰にでも優しい兄だが、エレン領の人とは極力接することを

避けている。嫌な思いをしているのは知っているのでレオンも団員も何も言わないでくれている。

見えない何かがそこら中にあるって全てを見えないふりをしていることで保たれている劇団。居心地は良く。フランも慣れるといいな、とレオンは本気で思っていた。

☆

☆

☆

☆

☆

「深く関わり合わない方がいい」

フランから少し離れてフランの着替えを探している耳元でテッドがそう言った。

レオンは衣装を乱雑に保管してある衣装箱から顔をあげてフランがいる部屋の中央を振り返るとフランがニコツと微笑み返してくれた。

「……何で？ エレンの人だから？」

「それもあるが……」

「何だよ。何か言いたいことがあるなら言ってくれよ」

レオンは顔を衣装箱に向きなおしながらテッドと会話をする。テッドは帽子で口元を隠して話を続ける。

「あの子をさらうのが仕事だって言っていただろう」

「依頼書は読んだ。仕事も成功しただろう？」

「成功はまだしていないが……まあいい。だったら次の航路は知っているな」

「次は……ええっとマリスフィームだっけ？ 水の神殿があるとか」

「そう。ノアール領の水の都市。その意味がわかるか？」

「さあ？」

「彼女はエレン領のお姫様であり、マリスフィームには未だにエレン領との確執を嘆く人間も多く残っている土地だ」

「知っているよ。でもこれは狂言誘拐なんだろう？ だったら途中で誰かが回収しに来てかくまってくれるんじゃないの？」

「立ちよる予定は無い」

「じゃあ……ノアールには来れないよな」

真っ赤なドレスを持ち上げて固まるレオンが半身を振り返るとフランは驚いたような顔をして首を横に何度も振った。

派手すぎるよな、とわざと大きな声を出してドレスを衣装箱の奥へ投げて服を探し始めた。

「依頼書には誘拐する、しか書いていなかった。だったらあの子はどうするつもりだったんだ？」

「塔の中にずっといたからな……欲しいものは全て揃えてくれた人がいた。現実を知らないのさ」

「依頼書を執事に渡すくらいだからなって俺らのことどうやって知ったんだろうな？」

「何度も公演しているからな」

「じゃなくて裏の家業なんて普通知らねえだろう？ 誰かから聞くにしても誰に聞くんだ？」

「執事じゃないか？ そんな話をしているんじゃないんだ。話をすりかえるな」

「はいはい。とにかく忠告は聞いておくよ。俺だって子供じゃないんだから大丈夫」

「そう……だといいんだが」

テッドは帽子を取ってニコツとほほ笑んで部屋を出る。

一人にされたレオンを見兼ねたミレイが一枚のワンピースを差しだしてくる。レオンは顔をあげてそれを引っ掴む。

「あんな姿で居られたら気になって仕方ないわ」

「ありがとう。それで着替えも手伝ってくれると助かる」

「優しいのね。あの子には」

「俺は誰にだって優しいぜ」

「あっそ」

レオンの手からワンピースを取り返してズカズカとフランへ近づいていくミレイに怯えるフラン。背中越しに大丈夫だよ、と口パクで言うと同じように口をパクパクさせるものだから変な顔でミレイがフランの手を引いて着替え部屋へ引っ込んでいく。

外からの搬入も多く人通りがある部屋なので騒がしい。大工が舞台をばらす音や音響がスピーカーやモニターを回収している姿にホッと息をつく。

街から街へと移動する船なので舞台関係の荷物はここへまとめられて相変わらずごちゃごちゃしている部屋。大部屋なのに荷物ของのせいで小さく思える。

甲冑を外して衣装箱へ投げ入れてレオンの着替えは終了。女の着替えてのは長すぎるな、と待ち疲れて着替えている個室を覗きに行こうとした時、ちょうど扉が開いた。

「あの……これ」

「いいんじゃないの？」

「でも……かなり薄くてスースーします」

「まああんなゴテゴテしたもん来てたら変な感じだろうな。ミレイありがとうよ」

小さく手をあげてミレイは去っていく。口も態度も悪いが面倒見

が良くて思いやりもある。

「よし。これで移動するまでに船の中を案内してやるよ」

「はい」

ニコツと笑うフランを連れてレオンは楽屋を出た。

長く細いだけの通路にさえ新鮮な驚きを見せるフランに案内してやるのは悪い気分では無かった。

いくつかの部屋であった劇団員ともうまくあいさつ出来ている様子で案内は順調だった。

居住区を適当に案内して船室が並ぶ手前の部屋へ来るところで案内は終わるはずだったが、問題が起こった。

「――ッ!!」

船全体が揺れるほどの衝撃にフランが倒れそうになる身体を支えるレオン。

揺れは断続的にあり、爆発音まで聞こえてくる。悲鳴や応戦する重火器の音まで耳に届いてくる。

「離陸するぞ!!　しっかりつかまっておけ」

親方の船内アナウンスが怒号のように響く通路。

演技にしてはやりすぎなんじゃないのか、と思いながらレオンはフランを部屋の中へと押し込もうとする。

だが、フランはレオンにしがみついて離れようとしなかった。

仕方ないな、と思いながらも外の様子が気になっていた。フランに当てられたゲストルームには窓があり、外の様子もうかがえるはずだと言い聞かし二人で中へ入ろうと提案する運びとなった。

一緒に入ることと約束すると納得してくれてフランも中へと入る。

狭い部屋。ベッドがあるだけの質素な部屋だが通常四人が押し込まれる船員室と同じ規模の部屋だった。

「これは……」

部屋に入るなりレオンは激しい音が気になって窓へと近づいた。フランもレオンに手を引かれて窓際に来る。レオンの手をしっかりと握りながらレオンの肩越しから外の様子をうかがった時、光が破裂して悲鳴をもらしてしまった。

「あの……ッ。何が起こって……いるんですか？」

フランは中腰になったレオンの身体へしがみ付いて顔をうずめた。窓の外にある光景をそのまま言えば大変なことになると思ったレオンは少し考えてからこう言った。

「花火だよ。演目には花火があがるだろう？」

「はい」

「それの中へ突っ込んだ」

「でも演目は終わりましたよ？ 主役はレオンでしょう？」

思ったよりも冷静なツツコミにレオンはとぼけるように笑ってごまかす方法を考えた。

レオンにしがみついている間に城壁の上へ並ぶ大砲は見えない。重火器の音や兵士の怒号や城下町にいる人々の頭上を越えた位置まで来るまで無言でフランの頭を撫でて危ないからジッとしている、と言っていた。

子供のようにうん、とうなずいて言いつけを聞くフラン。

「演目は終わったケド帰る時にまた来てくれっていう花火をあげる

んだ」

「前はそんなの無かった」

「今年から始まったんだ。前に来た時は静か過ぎて祭りっぽく無かったからな」

「……本当？」

「ああ。本当だぜ。花火は今年からだから間違えてシーアテイルにかすったんだろうな」

我ながら無茶苦茶な言い訳だと思う。自覚はあるがそれ以上に思いつく言葉が頭に浮かんでこない。

フランの震えは止まり、動きも止まった。ゆっくりとレオンにうずめた顔を離すと真っ赤な鼻が見えて幼い顔がもっと幼く見えた。

「私のせいじゃありませんか？」

「いいや全然。誰のせいでもない。強いて言うなら親方が空路をもっと海側にすれば良かったかな？　ってくらいかな」

「…良かった」

「そんな暗い顔するなよッ」

「ごめんなさい」

「謝るなってば」

「ごめ……なさい……」

しおらしくなるフランにため息を吐くレオン。

「本当に……ごめんな……」

「どうした？」

「レオン……あれ……私……何だか……」

「おいッ！！　フラン！！」

「フラニー……」

「そんなことはどうでもいい！！　しっかりしろ！！　どうしたんだ？」

！
」

「呼んでももらえませんか？」

「フラニー。これでいいのか？」

「ええ……」

突然倒れたフランを抱きかかえるレオン。浅い息に熱っぽく真っ赤になる顔。髪もびっしりと濡らすほどに流れる汗。

レオンがあだ名を呼ぶと満足した笑みを浮かべて薄く開いていた瞳を閉じてやがて腕の中で眠るようにレオンへ身を預けたのであった。

「すぐにスウィニーを呼んでくる」

フランをベッドへ寝かせた耳元でそう言って部屋を出たレオンだった。

フ란の身体

部屋を出たすぐにミレイが立っていた。手には銃が持っており一つをレオンへ投げ渡した。

「白兵戦になるのか？」

「護身用に一応ね。あなたの大切なお姫様を守りたいでしょう？」

「もう劇は終わったぜ」

「あら？　怒ると思った時には無反応で鈍感なのね」

「なんで？」

「……いいわ。それでどうするつもりなの？」

「いきなり倒れたからスウィニーを呼んでこようかと思っている」

「戦闘中なのに？　よっぽど大切なのね」

「依頼が一番だって親方に教えてもらっただろう？　何があろうと依頼は達成するようにって」

レオンは銃の装填数を確認して腰にかけたホルダーへ銃を押しこもうとした銃をミレイが奪い取ってレオンへ向けてハンマーを親指で押した。

「何をするんだよッ！！　あぶねえぞ」

「小道具よ」

引き金を引くとカチツと空のシリンダーが回る音がした。装填されているように見える小道具。これを客に見せて音に合わせてアクションをするとより臨場感が得られる。

「外のも演出なんでしょう？　現に近くを打っているのに一発も当たっていないし」

「そう……そうだと思うぜ」

「レオンも落ち着きなさい。たぶんあの子のが移ったのよ」

「ああ悪い」

「そういうこと。私は寝るからその小道具も返しておいてね」

「それだけの為に持ってきたのかッ?！」

「いいえ。あんたみたいにパニックになった子から没収したばかりなの」

それじゃあね、とミレイは銃をレオンへ押しつけて通路を歩いていった。

レオンはその銃の引き金を自分で引いてみて小道具だと確認する。何度も使ったことのある小道具。軽くて装飾も派手すぎる。

どうしてこんなのと間違えたのか。フランの焦りが伝染したのか。

「早く行きなさいよ。待っている人がいるんでしょう」

ミレイは二つ隣の船室へ入ろうとしてぼんやりと立っているレオンの背中へそう言った。

振り返ると閉まりかけた扉が見えてミレイの姿は無かった。

「そうだ。スウィニーのところへ行かないと」

スウィニーの医務室は一つ上の階にあり、シーアテイルのエンジンルームとプレイルームラウンジの間にひっそりとあった。

そう広くない船内。レオンの足では二分もかからないで来られるが船が揺れているせいでもっと長くかかった気がする。

半分開いてある扉を内側へ押して中を覗くとスウィニーが振り返った。

犬人族であるスウィニーは耳が長く垂れてあり、毛色は白と黒が混じっていた。

「何があったの？ 白兵戦？」
「いや？」

首を傾げるスウィニーと同じように首を傾げるレオン。
ううん、と悩みながら一つの薬を取り出してレオンへ投げてよこした。

「魔法かけられているよ」

「魔法……？」

「そう。飲んで。ほらッ」

促がされるままにレオンは投げてよこされた小さな瓶に入っている液体薬をグビッと飲みほした。

すう、と頭にあった熱が引いていくような感覚があり目が覚めた気分になった。レオンは薬を見てまた首を傾げた。

「魔法なんてかけられた記憶なんかあったっけな？」

「イタズラなのかな？ 弱い魔法だけど混乱する魔法。誘惑も混じっている複合魔法。エルフが遊びで使う魔法だと思う」

「エルフ？ だったらエルフが近くにいたのかな？ 偶然通りがかって魔法をかける」

「目つきが悪いから怖かったのかもね。エルフは気まぐれだからね」
「なるほど」

レオンは空き瓶を適当な机の上へ置いてうなずいた。

スウィニーも手をあげてもういいよね、と言うように振り返りデスクワークへと戻ろうとしたのを呼びとめる。

「そうじゃなくてフランが大変なんだよ。熱っぽくてちょっと見て

もらいたいんだ」

「フラン？」

「あの例のお姫様さ」

「あーそういえば外の騒動はそういうことだったね」

スウィニーは手元に並ぶ薬を適当に革製のカバンへ入れてやれやれ、というように立ち上がる。

見た目では分かりにくいが老齡の男だと自らは言っている。嘘か本当かわからないような昔話をずっと語るせいで医務室はいつも閑散としていた。

眠り心地がよさそうなベッドが二つ並んでいる。船室のやつよりも充分に広さがある。

レオンはゲストルームにスウィニーを案内する。船内の揺れはズいぶんとマシになっている。

ペタペタと素足で歩くスウィニーの足取りは遅くレオンは角を曲がる度に振り返りスウィニーを待っていた。

ようやく辿りついたゲストルーム。行きとは違う意味で長く感じた。

「さてさて」

スウィニーはベッドの脇に座って横たわるフランをジッと眺めて低い声でうなった。

その背後に立つレオンは退屈そうにそのスウィニーの後頭部を眺めていた。窓の外も落ち着いて巡航モードへ切り替わるアナウンスも流れたこともあり警戒態勢は終わったようだった。

通路にはぞろぞろと戦闘待機していた船員の足音が聞こえている。

「塔に閉じ込められていたって言っていたよね？」

「そう」

「そこには何があった？ 変わったことはある？」

「変わったことね：何と比べてだい？」

「比べる必要はない。たとえば外壁に札が貼ってあったとか」

「札か……」

時計台に登った時には室内の明かりでフランの部屋は見えたとが外壁の細部までは見えていなかった。

外壁はレンガを積み上げられた昔ながらの塔だった。円柱の建物で部屋の部分だけが他の部分より一回り大きく時計台側に大窓があった。おそらく円柱に螺旋階段があって地上へ続いているだろう。細部まで思い出そうとするとどうしても中の部屋ばかりが思い出される。部屋の明かりで奥の壁に本棚やベッドや人形の影が映っているのが見えていた。

「人形……そうだ。魔法人形がいたな」

「魔法人形ってのは魔力を吹き込んで動かすタイプのやつかい？」

「ああ。フランは勝手に動きだしたって言っていたな」

確か名前はシルクくんだった。

時計台に飛び降りたフランに手を振る無表情がなぜか強く印象として残っている。

「……だとすればこの憔悴した状況にも説明がつく」

「どういことだい？ スウィニー」

「彼女は魔法を自然に発してしまう体質なのさ。まれにそういう人がいるって聞く」

「それは病気なのか？」

「それは何とも言えないね。赤ん坊に多いんだ。年齢と共に自然に解決される」

「でもどう見ても赤ん坊には見えないぜ？」

「普通は赤ん坊から大人になる過程で魔法を制御する方法を周りの大人から学ぶんだけけど彼女はずっと一人で制御する方法を知らなかったのかもね」

手元に置いた革製のカバンから一枚の木製の札を取り出してフランの小さく膨らむ胸の上へと置いた。札には見慣れない文字が並んでいた。

「時々、執事が入って来ていたと言っていたのも関係あるか？」
「わからない。でも本か何かで知識を得て成長と共に魔力を培ってきたのが外へ出た興奮とストレスで制御出来なくなったというのも考えられる」

「それは……治るのか？」

「安静にしていれば問題ない。この札は微力に魔力を吸い取ってくれるからそれで大半を発し終えたら落ち着いてくると思うよ」

「俺は近くにいても大丈夫なのか？」

「ああ。何かあれば呼んでもらえるかい？ この札の効力は次の目的地へ着くまでは充分持つから何もないとは思う」

「ありがとう。だったら俺はずっとここで見ていることにするよ」

「……レオン」

「ん？ 何だい？」

スウィニーはカバンを持って立ち上がり、こんなことは言いたくないがと前置きをした。

「あまり深く関わらない方がいい。彼女はお姫様で君はエレンでは良く思われていない」

「スウィニーまでテッドみたいなことを言うんだなッ」

「そりゃそうだよ。僕だって可哀そうだと思ったりするけど君とこのお姫様が仲良くなるほど辛い別れが待っているんだよ」

「みんな重く考えすぎなんだよ。俺はただ…」

「レビーに似ているんだろう？そっくりだ。若い頃を見たこともある奴なら誰でも目を疑いたくなる」

「……」

レビーとは幼い兄弟の母親で白い輪が目に出てきたことを恐れて教会へ兄弟を捨てた有名な踊り子だった。

まだ二歳だった弟の瞳には白い輪が無かったが兄と同じ血が流れているから怖いのも、と言って雨降る街へ消えていった後ろ姿を憶えている。

「まあ……昔は昔。今は今。そんなに思っているほど俺は子供じゃないぜ」

「それならいい。でも――」

「はいはい。話は短く要点をまとめないと医務室のベッドが埃っぽくなるぜ」

話を続けようとするスウィニーの背中を押して通路へ押し出したレオンは振り返る隙も与えずに扉を閉めた。

☆

☆

☆

☆

☆

「あの……」

「何だ？起きていたのか？」

「いいえ、さっき目が覚めました。このお札を置いてから気分が良くなりました」

「そりゃスウィニーを呼んだかいたってmondanna」

へへへ、とイタズラな笑みを浮かべて枕元にちょこんと座るレオン。札を手に持ちながら起き上がろうとするフランの肩を軽く押して寝ていると言った。

抵抗することもなく寝そべるフランは落ち着かない様子で窓の外を眺めるレオンへ視線をやった。

外は真っ暗で星も見えない。竜や大型の鳥がいれば閃光弾を打って追い払うから綺麗なんだぜという説明をしていた時、視線に気づいて立ち上がる。

「邪魔か？ ゆっくり眠りたいなら出て行くぜ」

「ううん……何だか嬉しいの」

「嬉しい？」

「ずっと一人でいるからこうして誰かの話を聞いていることが嬉しい」

「そうか？ まあ普通だぜ。いつか慣れるさ」

レオンは座る場所を探すように室内を見渡して話を続けた。本棚やサイドテーブルはあるがどれも座る場所とは言えない。

ゲストルームは本来一人で泊るように作られていることもありそれなりにモノは揃っているな、と自分の狭い船員室と見比べてしみじみと思っていた。

本棚の脇には扉がありシャワールームや専用のお手洗いも完備されてあることに感心しているとクスクスとフランが笑った。

「そんなに面白いかな？」

「はい。とっても」

「ううん……良く分からないが悪い気分じゃないぜ」

「レオンさんは不思議な方ですね」

「ここにいるやつは全員特別って言われているよ」

レオンがあまりにもめんどくさそうに話すのでフランも布団の中へ引っ込んでしまった。

それでも黙って待っているとひょっこりと顔を出してレオンを覗いてくる。

ため息を吐いてレオンはフランが眠るベッドの脇のフロアリングへ座って布団を剥がして顔を覗いた。

「もう平気みたいだな。札はずっと持っているよ。目的地まではまだまだ時間がかかりそうだからな」

「目的地？ この船は何処へ向かうのですか？」

「マリスフィーム。水の神殿があつて貿易が盛んな街だ」

「知っています。川がたくさん街中に流れていてレンガの橋の下をカーテルっていう扇形の船で移動しているんですよ？」

「そうだ。補足すると扇形つてのは一人用で主に商人が商品を運ぶ時に使う。観光には楕円形のカーテルが一般的だ」

「面白そうですね。ぜひ乗ってみたい」

「ああ街へ降りたら時間があるし乗せてやるよ。でも結構揺れるぜ？」

「大丈夫です。さっきも揺れましたし」

「ハハハ。あれよりは揺れないのは約束するよ」

フランは知識で得たマリスフィームをレオンは実体験したマリスフィームの話をした。

二人の話は尽きることがなく、最後には必ずその目で確かめに行こうなどと言って約束を増やしていった。

脳裏にはスウィニーやテッドの言葉が過ったが見ないふりで話を続けた。

「貿易が盛んだと人がたくさん集まる。毎日がお祭りみたいなものだ」

「あのような賑わいが毎日？ 楽しそう」

「楽しいぜ。そこへも案内してやるよ」

「ありがとうございます。楽しみにしています」

「ハハハ。でも離れるなよ。人が集まる場所には喧嘩がある。特に海賊がいれば厄介だ」

「海賊……？」

「海賊を知らないのか？」

「はい」

「海賊ってのは……」

あんまり怖がらせるのもどうなんだろうな、と思って言葉に詰まるレオンは頬を掻いて悩んだ。

「すごいめんどくさい」

自分で言っただけでバカかって思ったレオンはため息を吐いて忘れてくれ、と言った。

「とにかく街にいる時は俺から離れるな。そうしていれば俺が何とかしてやるよ」

「はい。勇者様ですものね」

「それは……だから劇の衣装だってば」

聞く耳も持たないフランは演劇好きなのが伝わってくる。本だけが全てで外に見えるものと言えば一年に数回の演劇と兵士の訓練だけだろう。

それだけに演劇は輝いて見えるに違いない。華やかな世界は人を惹きつける。観客の瞳の輝きを見れば誰もが夢を見る乙女になるとテッドが言った言葉をふいに思いだした。

キザな言葉。甘ったるい声でささやくと頬を染める客を幾度とな

く見てきた。

「竜が近づいてきているぞ」

管を通ってアナウンスが船内に流れる。

レオンは窓の外を見て確認するが竜はシーアテイルを仲間だと思
って寄り添おうとしていた。

「今から光るぜ。眩しいから目を細めてみるよ」

フランは上半身だけを起こして窓の外をレオンの視線を追って竜
を探した。

夜の空は真っ暗で月も無い。それでも必死にレオンの目線を追っ
た。

「閃光弾射出！！」

アナウンスがそう言うのと少し遅れて閃光弾がよれよれと竜へ向か
って降りていく閃光弾の尾から漏れる煙が見える。

やがてまたたく間に光が暗闇と竜を追い払った。美しい楕円形の
光にレオンも目を細める。上下に長く伸びる十字架となって最後は
闇に消えた。

竜は驚いて彼方へと消えて行った。

「綺麗……」

ぽつりとつぶやいたフランの言葉。目を細めている横顔に綺麗だ
ろう、と言った言葉も聞こえていない様子で恍惚とした表情を浮か
べていた。

光が消えた後も余韻に浸っていたフランをレオンは見つめる。い

つか兄弟を捨てた母親の記憶はかすかにしか無いが似ているのはわかる。だから、ではないと自分に言い聞かしながらもう少しだけその横顔を見ていたいとレオンは思った。

マリスフィーム

フランは話疲れたようでいつの間にか疲れて眠ってしまった。レオンは彼女を残して部屋を出てすぐに親方がいるはずのブリッジへ向かうことにした。

これからどうするのかを訊ねるつもりだったがうまく話を切りだす言葉が思い浮かばない。頭を悩ませて何て聞くのかを考えていたが結局何も浮かばないまままでブリッジに辿りついた。

扉をノックすると中からは入れ、というしゃがれた声が返ってくる。

「レオンかッあの子はどうしている？」

「すっかり眠っているよ。まあスウィニーが言うとは色々あって疲れが溜まっているそうだ」

曖昧な説明をするレオンは親方が座る座席へと続く階段を登りながらそう答えた。

操舵するレバーやレーダーモニターやアナウンスのマイクがずらりと壁際に並んであり親方の席はそれらと前方一面に広がるガラスと全てのモニターが見れる位置に陣取ってある。

ブリッジの後方を占拠するほどの大きな椅子は親方でさえ小さく見える。通常運航になるとそのまま横になって眠れるようにと作ったという話を聞いた。

親方は右肘をサイドテーブルに乗つけて頬杖をついてゆっくりと歩いてくるレオンを目で追っていた。

やがて一段低い位置で立ち止まると左のサイドテーブルに乗ってあったブランデーを瓶ごとひっくり返し大きな口に流し込む。

「被弾はどうだったんだい？」

「最小限かすただけで巡航には問題ない。そんな心配をしに来たわけではあるまい」

「まあ……フランのことをちよつと話に」

親方は空になった瓶を足元に置くと世話役のゴーがさっさと瓶を回収して椅子の裏側に隠れている部屋に引っ込んだ。

あの部屋は世話役ゴーの部屋というより倉庫と言った方がいい。

ゴーは常に頭まですっぽりとボロをはおっているネズミ族の女。

長く突き出た鼻だけが見えて表情は隠し続けている。親方以外とは一切話さえもしないので謎が深い人物だった。

「お前が心配するようなことはない」

「まあそれならいいんだぜ。ただ街へ行った後にフランはどうなるのかな？　って思ったりしてさ」

「依頼書には何も書いていない」

「そう。塔から連れだした後が何も書かれていないから……ほら仕事は最後まで責任持てっていつも言っているだろう？」

そうだ、と深くうなずいてちつとはそれらしい顔になってきやがって、と言った後にサイドテーブルにあるはずの瓶を探して宙を掴もうとする親方。

完全に酔っぱらっているな。大丈夫なのか、とレオンは思いながらも親方の機嫌を損ねないように話を続ける。親方は面倒になると会話もロクにしようにしなくなる。特に酒が入っている時はそうだった。

椅子の裏側の部屋からゴーが出てサイドテーブルに新しい酒瓶を置くと親方はグイッと持ち上げて一口で半分も飲んだ。

「あの子のことは問題ない。街へ着けば向こうの国の人間に手渡すこととなっている」

「本当なのか……」

「何だ残念そうだなッ。惚れたか？　グヒヒヒッ」

「あんた飲み過ぎなんだよ。俺はただ……」

「ただ気になるだけか？　だからお前にあの子を任せたんだけ」

「どういう意味だ？」

「恋くらいさせてやろうと思ってなッ。こりゃレオンの方がするとはなッ　ガハハハ」

「違うぜ！！　何を勘違い……してるんだ。酒を飲み過ぎだぜ少しは身体を気遣えってんだ」

「ううん……そうだ……そうすることにしよう。俺はちよつと寝るぞ」

酒瓶を逆さにして全てを飲みほしてから空になった瓶を足元へ置いて後ろへ倒れるように寝ころんだ数秒後には寝息を立ててやがる。

ゴ―は慣れた様子で瓶を片付けて器用に両手で足を持ち上げて椅子の上に寝かせていた。

ブリッジの人間もいつもの光景だと言わないばかりに持ち場の仕事に集中している。途端に居心地が悪くなったレオンは頭を撫でながらため息を吐いて階段を降りる。

平らなフロアへ降りた時には寝息はいびきに変わり、とつと退散するのがいいって思えるような爆音がブリッジ中に響いた。

扉を開き通路へ出たレオンは親方の話を思い出しながら歩いていた。

「何だ……もう心配ないんだな」

小さな声でもらすとさらに胸の中にある感情が窮屈だってギユウギユウと音を立ててくる。

フランには執事がいて国があってシルクくんだっているしな、と言葉を吐く度に感情が抜けおちていく脱力感とすっぽりと抜けた虚

脱感が同時に襲ってくる。

何を考えているんだかな、と自分自身を自嘲して歩く。

足取りが重くて数秒後には立ち止まってしまった。このままフランの部屋へ帰る気にもなれずにふらふらと人の気配を避けていたらいつの間にか甲板へ出た。

夜の風が気持ちよくてしばらくボーっと突っ立っていた。

「もう会うことも……でもまた公演をする時に会いに行けばいいか。うん。そんなときも勇者の衣装で——」

「何を独り言しているの？ 芝居の練習なら付き合うケド」

「ミレイ……か？ どうしてこんなところにいるんだ？」

「いたら悪いかしら？」

「そうじゃないけど」

甲板の柱の裏からミレイが出てきてレオンに話しかけてくる。とっさに現れるもんだからビックリしたぜ、と言ったが冷ややかな視線に黙ってしまった。

「テッドの言う通りね」

「何が？」

「あんたは子供で別れる辛さを知らないってこと。私達みたいな流れ屋稼業をしているとこれからも別れることばかりよ」

「俺だって知っているさ。ただ……」

「ただ？ 言い訳ばかりね。そんなんだから子供だって言われるのよ」

「誰に？」

「……はあ……言ってて悲しくならない？」

ミレイは本当に情けないと嘆いて手に持っていた水を一口飲む。

「彼女は特別だってテッドだってわかっているわよ。母親に似ているでしょ？」

「ああ……スウィニーも言っていた」

「だから気になるだけよ。ただ懐かしがっているだけなの」

「そんな言い方しなくてもいいだろう？」

「それよッ！！　それがダメだって言うの。いつものあんたならそうかもなって言って他の話をしようとする」

そう言われて何も言い返せなかったレオンも自覚はある。自分の胸にあったのは懐かしさなのか、と思うと楽になった気がする。

「テッドもああ見えてすごい繊細だから気にしているわ。あんたのこともあるのよ」

「テッドが？　母親に捨てられてうらんでいると思っていた」

「バカね。事情があることくらいテッドにもわかるわ。ただ納得するのに時間がかかったのよ」

「……」

「ああどうしてあんた達兄弟はダメダメなのかしらね。あきれて何も言えないわ」

ミレイは髪をくしゃくしゃと触ってオーバーリアクションでそう言った。

「これで少しは大人になりなさいよ。それと小道具を戻すことを忘れないでね」

石像のように固まったレオンを通り過ぎて船内へ戻るミレイはすれ違い様にそう言った。

ようやく振り返った時には後ろ姿も見えなかった。残されたレオンは小道具の銃を取り出して返しに行かないとな、と呟いて船内へ

戻った。

☆

――マリスフイーム

水の街と呼ばれるにふさわしく街中には路地よりも多くの水路が流れていた。

名物は二つある。一つはカーテルの上に商売品を積んでカーテルで観光する客相手に商売している光景。もう一つは――

「この格好は？」

「名物だよ。同じ格好をしている奴が多くいるだろう？」

精霊術式が縁に書かれた巡礼服を頭まで被らされたフランは膝丈のスパッツを履いて動きやすい革の鎧を着たレオンに訊ねる。

街を見渡すと神殿へと向かう巡礼者が多くいて女性はほとんどがこの服、カムイと呼ばれている服を着ていた。

名物のもう一つは宗教。水の神として精霊セイラムを崇める宗教が盛んな街。一日に一回は巡礼として神殿へ祈りを捧げる列が見られる。

「それはわかりますがどうしてこの服を私に？」

「普通の服を着ている方が目立つだろう？ ミレイだってこの街にいる間はあの服を着ているぜ」

「本当ですね。ミレイさんは何を着ても似合います」

目をキラキラとさせて少し前を歩くミレイを見る。細身の身体に

はサイズが合わないカムイしか無くて不満をもらしていたのは黙っておこう。

「フランだって似合うぜ」

「はい。サイズもピッタリです」

「それは子供用だけどなッ」

「え……？」

「ハハハやっぱり似合っているぜ」

「もうッ！！ 辞めてくださいよ」

「悪かったって脱ぐなよ」

脱ごうと手をかけたフランの腕を掴んで謝るレオン。少しだけ振り返るテッドは何も言わずにまた歩き始める。

わかつているよ、と心の中で答えるレオン。まだ時間はある。せめて日が落ちるまでは楽しくいさせてくれよ、と続けてテッドの背中へ言った。

「悪いな。もう機嫌治してくれよ。ほら…仕事が終わったら観光しようぜ。何でもおごってやるよ」

「何でも……ですか？」

「おう。好きな場所へ連れて行ってやる。名物の水饅頭なんか柔らかな歯ごたえに甘いタレがかかってそれを食べながら街を歩こうぜ」
「そう言うのなら許してあげますよ」

フランはようやくニコリとほほ笑んだ。急に上機嫌になり鼻歌交じりに何を食べようかなと内側のポケットから取り出した街案内のパンフレットを広げた。

一行が向かうのはギルド【メロウスリープ】。倉庫街の手前にあり、そこでフランを引き渡す手筈を整えると言っていた。

すれ違う人は先頭を歩く親方を見るなり怯えたり道を開けたり様

々だった。が女性に関してはその隣にいるテッドへばかり視線を送っていた。

カムイを着せなくとも目立たなかったのかもしれないな、とレオンは思いながら退屈そうに街を歩いた。ギルドへ入っても話は親方とテッドとミレイが行う。

いつもレオンはロビーで待たされて指名手配写真やすぐに解決出来る小銭稼ぎの仕事がないかをチェックするだけだった。

「これとこれとここへ行って」

「そこは退屈だぜ？ 何もない」

「何を言っているんですかッ？！アスカラミューズの舞台となった神殿ですよ。円柱がたくさんあってその一つ一つには神様が彫ってあるとか」

「神様だったんだ。立ち入りも可能な場所だから見れるぜ。ただちよっと思っただけより小さいケドな」

「小さい？」

「親方と同じくらいかな？」

「充分大きいと思いますよ。約束ですね。絶対に連れていってくださいな」

「わかった。あんなので良ければいくらでも見せてやるよ」

レオンが約束するとフランはやった、と子供のように喜び次に見るモノを探していた。演劇の舞台になった建物や場所をめぐる旅になりそうだな、と今まで行った演劇を思い出そうとして五秒後には辞めた。

とにかく日差しがキツイ。水路にいと涼しいくらいなのだが倉庫街には水路は無く風を遮断するように隙間なく建物が連なっていた。

倉庫街にもカムイを着た人間も商人も多くいるが、それ以上に屈強な男の数が増えている異様な光景だった。

リゾート地には似合わない物騒な装備を抱えて互いをけん制するようにならみ合っているが親方を見るなり視線を外そうとする姿も見慣れたものだった。

巨人族は気性が荒く、好戦的で野蛮だと決めつける多くの伝説が間違った形で広がっている。

親方は特別に気にする風でもなくマイペースに歩みを続けている。その足がメロウスリープの前で止まった。

外観は街に溶け込める工夫がしており、綺麗な色のレンガが積み上げられて二階のテラスにはカフェスペースも設置されている。これはマリスフィーム政府の要請があり景観を損ねる建物を全面禁止にしてあるからだ。

だが、入るのは屈強な男がほとんどだ。

「レオンッ！！ 合流は夕暮れ時で後は自由行動させてやる」

「いいのか？」

「お前がいても退屈そうにしているだけだからなッ！！ お姫様も連れていけ」

「そういうことなら夕暮れまで街を歩かせてもらうぜ。さあ行こうぜフラン」

親方は首を鳴らしながらメロウスリープの扉を開いた。

テッドやミレイもその背中へついて中へ入る時にレオンの顔をちらりと覗いてきたが心配ないぜと言うように微笑み返しておいた。伝わっているのかどうなのかわからないままに二人は扉をくぐって中へと消えていく。

「あの……」

「いいんだよ。いつもこうだ。俺は交渉や話しあいってのがとことん似合わないらしい」

やれやれと肩をすくめるレオンを見つめるフランの手を無理やりに引いてさあ行こうと歩き始める。

親方がくれた最後の時間を一秒でも無駄にしたくないから少々かけ足になったかもしれない。はじめは戸惑っていたフランも次第に自分からレオンの手を引いてあれやこれを見たいとか食べたいとか言うようになっていた。

中でも気に入ったのはカーテルの弾力性ある乗り心地と水饅頭のタレだった。その二つを堪能しているカーテルの数メートル先に見えるレンガの短い橋があつて子供達が風船を片手にこちらへ手を振っている。

「振り返してやれよ」

「え？ 私が？」

「子供はそれが無性に嬉しかったりするんだぜ」

フランは橋をくぐり終えた後に振り返り手を振ると子供はすでに路地へと走り去っていく背中が見えていた。

ほんの少し寂しげに残るあげただけの手をゆっくりと自分の元へ戻して慰めるようにもう片方の手で握った。

「遅かったか。タイミングってのは難しいぜ」

「ええ」

「次はすぐに振り返せばいいんだ。水路はまだ充分ある」

「はい。次はきつと振ります」

「ハハハ。その調子だと怖くて逃げちまうかもなッ」

グツと拳を握り頑張ると言ったフランの顔が徐々に笑顔になった。カーテルは市街地の水路をゆったりと一周して元に乗った場所に戻った。船着き場から手を伸ばしてゆらゆらと揺れ足場の悪いカーテルからフランを引き上げる。

細くて軽すぎる身体。ふいに見せる儂い笑顔が胸を痛める。この数時間すればまた塔に戻るのか、と考えると時間が止まればいいのになって本当に思った。

「次……はありませんでしたね」

「ああ……ああ。でも次はまたある。今日じゃなくともまたいつかくればいいんだから」

「その時は一緒にいてくださいますか？」

「もちろんさ。次は俺も手を振ろうかな？」

「いいですね。約束……ですよ」

「ああ」

二人をおろしたカーテルが次の観光客を乗せて水路へ流れていく。すぐ目の前に見える露店で水饅頭を買って頬張る姿が曲がり角で消えると二人は次の目的地、神殿へと向かった。

カーテルが停泊していたのは港の隅。広場へと続く道があつて時計台を中心に左手に伸びる長い橋が神殿へと続く橋だ、と説明していると背後から声をかけられた。

「おやおや……リウムの方ではございませんか？」

「ん？ ああセイファーか」

「うふふ……お名前を覚えていただいて光栄です」

背の低くぶかぶかで装飾品だらけの海賊衣装を身にまとった髪の長い男が 【セイファー海賊団】 の若頭。その背後には露出が高い服を着ている魔術師アリーデと巨人族のゴルザレムがいた。

手には衣装と同じく装飾品で飾ったキセルがあり、長くて杖のように見えた。

ついでにリウムとは白い輪がある人間の呼称だ。古文書の一節にそう書かれていたことに由来する。

「お連れの方は例の人ですね」

「……」

「申し遅れました。私はセイファー。海賊の父を持っておりますが
私自身は貿易商人と自負しております。エレンとも取引がございます
のでぜひご贔屓に」

「……」

「怖がらないでください。うふふふっ」

フランはレオンの背後へと一歩下がって腰辺りをギュッと握った。
セイファーからフランを隠すように前で出るレオン。

「フランって言うんだ。もう知っているだろうが色々あるんだよ。
察してくれよ」

「色々とは淫靡いんぴな響きですね。うふふふ」

「まあ……そうかどうかは知らないがほら海賊は誰だって怖いだろ
う？だから用事がないのなら去ってくれるか？今は案内をして楽
しい思い出ばかりを作りたいんだ」

「そうです。観光とはそういうもの。ではお話を少しだけ」

「何か用事なのか？」

「ええ。神殿へ行かれるように見えましたのでご忠告を一つ」

「ご忠告？」

「はい……うふふふ。ここ数日、神殿の地下へ降りる階段が開かれ
ており多くのハンターや傭兵や海賊が押し寄せております」

「だから気をつけてってことか？いつからそんなに親切になった
んだ。気味が悪いぜ」

「うふふふ私はいつだって親切です」

「そうかい。だったらありがたく聞いているよ。話は終わりだな？
それじゃあな」

「ええ。またお会いしましょうか」

レオンはそれ以上答えずにフランの手を引いて神殿へ続く長い橋へと歩いて行った。セイファーは追いかけてくることもなくやけにあっさりと手を振って引き下がったのが気になった。

いつもならば長く内容のない話を難しい言葉で繰り返してくるものだが、と考えたがすぐに頭の外へ押しやった。

長い橋は真っ白なタイルで作られてあり、足元を支える細い二本の支柱が等間隔で並んでいる。

「気にするなよッ。セイファーはいつもあんな感じだからさ」

「はい。でも地下へ降りる階段って言っていましたでしたがそれは水の精霊が眠る本当の神殿への道が開かれたっていう話なんですか？」

「よく知っているなって舞台でもやっていたよな。そうだ。神殿の中へ入る学者や信者が雇った傭兵や海賊がうろうろしているってだけの話」

「神殿の中に入るだけなのに……中には魔物がいるのですか？」

「魔物がいたとしても扉が開いたのは数十年ぶりだから食料がなくて死んでしまっているぜ」

「そうですか。それなら怖くありませんのに」

本当に怖いのは互いのことさ、と言いかけて辞めた。心配症なんだよ、とだけ言ってこの話を辞めようとした。

「私も行ってみたいです。何もないのでしたら舞台になった場所は全てこの目でみてみたいです」

「ああ……まあ……ううん……」

「レオンさん？　どうかしました？」

「いいや。奥へ入ると親方との合流時間に間に合うか……長い道中の神殿だって聞くからな」

「長い？」

「ああこの橋よりも長い洞窟がある。だから入口の扉までだったらダメか？」

「……」

かたくなに口を閉ざすことで抗議しているわがままな一面は心を許し始めたってことか？とレオンはため息を吐いてそう胸中で思う。もちろん長い洞窟なんてものはない。だが神殿へ入るのは危険すぎる。セイファーが知っていたということは誰かがフランをさらおうとすることも考えられる。

杞憂なら見れなかったで済むがさらわれたら何をされるかわからない。そもそも何もなければ誰も護衛を雇うことはない。

そんな真実を言うより綺麗な思い出を残してやりたいと願うほどに嘘は増えていく。

「大きいですね」

神殿の前で入口を見上げるフランがようやく口を開いた。さきほどまでの不機嫌が嘘のように笑顔を見せている。

「水没している本当の入口はもっと大きいんだぜ。これは二階でお披露目の時に使われていた場所なんだ」

「すごいッ。すごいです。レオンさん」

「ハハハ。喜んでもらえて嬉しいよ。中はもっとすごいです」

すっかり元気を取り戻したフランは橋を歩くのに疲れていただけなのかもって思える。横に広く小さな段差が七つある階段を走って登るフランの背中を追いかけるレオンもつられて笑った。

入口には二本の大きな柱があり、圧倒的な存在感の半裸の髭を蓄えた男が柱の中間を支えている。これもオルトの剣っている劇で負傷した主人公がもたれかかるシーンで有名だった。

フランは男の彫刻のふとも手を手で触れてその場で座り込む。ちようどオルトと同じ格好で背中を預けたところで階段を登り終えたレオンが目の前に立った。

「満足かな？」

「はい」

レオンは手を伸ばしてフランを立たせた。

背後には吹き抜けの礼拝堂があつて12の半裸の男の彫刻がある柱が壁際に内向きで並んでいた。

変わったものと言えば銅像の代わりに一段高い段差の上に壺が置いてあり、天窓から差し込む光がちようど当てられていることだった。

神の水、と呼ばれてコインを投げ込むと幸運が訪れるという壺。

フランへコインを一つあげて壺へ投げさせる。壺の五分の一がコインで埋まって足元には水がこぼれたシミが出来ている。

定期的に集めて神殿の補修に使われていることを知れば誰だつてありがたみが無くなるので黙って両手を合わせていることにしよう。

「何か願いごとを言えば叶うかもしれないぜ」

「……願いごとは誰にも言っちゃいけないんですよ」

「幸運つてのは恥ずかしがり屋なのかな？」

「ふふっどうなんでしょうね」

フランはそう言ってまた願いに戻った。レオンは願い事か、と考える。

ふいに過つたのはもう少しだけ一緒にいたいってこと。親方は二度と戻らないと言つたが気が変わることも祈っておこうか。そうではないと会えないもんな。

待てよ、それよりも塔から出られるように体質の改善を願つた方

が いいのか？

……まあいいか。とりあえずまた会えるようになって祈っておこう
と思った時、ゴゴゴゴゴ、と地鳴りが足元から迫ってくる。

「何だッ?!」

レオンは目を開いて周囲を見渡すが特に変わった様子もなく気の
せいか、と思った。

だが――

「大変ですッ!! みなさん、落ち着いて外へ出てもらえますかッ
!!」

神殿の奥に見える階段から一人のカムイを身にまとった女がそう
叫びながら走ってくる。その背後の闇から地鳴りの正体が見えた。

人だ。人の足音がこの音だった。

海賊やハンターや学者や信者。様々な装いから開かれた扉から逃
げてきているのだと確信する。

「俺達も逃げるぜ」

レオンはフランの手をとって走ろうとした時、人ではない大きな存
在が闇を引き千切り姿を現した。

神殿

全身を青色の炎で包んだウォーラムという鹿に似た召喚獣。水の精霊の使いと呼ばれその存在も幻とされている。

ウォーラムは辺りを見渡して何かを探している様子でゆったりとした足取りで歩いてくる。中央にあった壺を蹴飛ばして割れる音が響いたが誰も聞いていなかった。

それ以上に男達の悲鳴がうるさい。レオンはフランの手を引こうとしたが、鉛みたいに重くて動かない。

「おい……フラン？」

ウォーラムと似た青色の炎が全身を包んであり、その瞳は虚ろなものだった。

共鳴と呼ばれる現象。精霊同士が何かを伝えあう時に起こるテレパシーのようなものだと言われているがどうしてフランが？ウォーラムもどうしてここへ？幻獣扱いされて使役するのも難しいはずだが。

疑問は次々と浮かんだがその答えを求める時間は無い。レオンはフランを抱きかかえようとするがビクともしない。

「何だってんだッ！！」

「よ……よんでいるの？ 私を呼んで……何ッ？ 聞こえない」

「おいッ！！ フランッ！！」

魔法を発する体質がウォーラムを無意識に召喚した？そんなことも思っではありえないと否定した。

だがフランが何らかの魔法を使っている、あるいは使用者とコンタクトをかわしているのは間違いない。嫌な予感は当たった、と辺

りを見渡す。術者を探したが人が多すぎてわからない。

「待ってッ！！　まだ何もッ」

フランはウォーラムへ向かって手を伸ばしたがその姿を保てなくなったウォーラムはわずかな炎だけを宙に残して消えてしまった。同時にフランを包む炎も消えた。騒ぎが終息していく神殿内。まばらに足音も止み始めてついに誰もが立ち止まり狐につままれたような顔をして互いに顔を見合わせる。

夢なのか、イタズラか、という言葉が飛び交う中でフランは手をおろした。

「行かなきゃ……」

「何だって？　フラン？」

小さな声で何かをつぶやくフランが下ろした手の甲を擦り不安げな顔で奥の暗闇を見つめた。

レオンは視線を遮るように立ってフランの顔を覗きこむが虚ろな瞳でレオンさえ映っていない。

「呼んでいる……私を呼ぶ声が聞こえた……」

「おいッ！！　フラン？」

「レオンさん、行かないとダメなの」

「行かないとダメって言われてもな。何処へ誰に会いに行くんだ？
下の神殿に誰かがいるっていうのか？」

「ううん……それはわかりません」

レオンは首を振るフランに頭を悩ませる。その虚ろな瞳を見てい
るとダメだ、とは言えなくなる。

呼んでいるとなればウォーラムを召喚した人間もいるということ。

それは危険なことなのだろうか。短い間で思考を巡らせるがその全
てはフランの丸く大きな瞳に吸い込まれていった。

「私は一人でも行きます。レオンさんはここで待っていてください」
「どうしたんだ？　いったん落ち着いて考えてみようぜ」

「冷静です。理由は説明出来ません。それでも何か私が私を待ってい
る」

「ううん……困ったもんだな」

レオンは説得する言葉を探したが見つからなかったのは自分もあ
れが何なのかが気になっていいることにあると思った。

止めるべきなのに自身も行きたいと思っっているという矛盾が胸に
あって困っているレオンは自分が守れば大丈夫かと諦め口調で護衛
としての責任を持つ自分の心を慰めて奥の部屋へ振り返る。

騒ぎがおさまってぞろぞろとまた人が中へ入っていく姿があった。
人の列が消えるまで背中を見送ってフランへと向き直る。

「一つだけ約束できるか？」

「……？」

「俺から離れないこと。それが出来れば奥へ行くくらいなんてこと
ないさ。ついて行くぜ」

「はい。お願いします」

フランがようやく表情を見せたのは笑顔でなく不安に満ちた、ま
るで怪我をした動物を心配しているみたいな悲しみがある表情だっ
た。

何も気付かないふりでつとめて明るく行こうぜとフランの先頭に
立って奥の部屋へと歩き始めるレオン。

階段を降りると最近に舗装された場所も終わり、むき出しの岩肌
が迫ってくるように見える道へ足を踏み入れる。

天井や左右の壁に埋め込まれた魔法の光で多少の明るさはあったが不気味な静けさがあった。肌でそれを感じた誰もが表情を引き締めて知らずに無言になっている。

「大丈夫か？」

背後にいるフランに気遣ってレオンはそう訊ねたが返事はない。もう一度だけ呼びかけて大丈夫かと訊ねたが上の空だった。

レオンはしっかりと手を握ることで自分が守る意思表示をしなれば儚く消えてしまいうようなほどに思えた。杞憂ならいいが、脳裏にはウオーラムの姿が過る。

「痛いすッ！！」

「あ、ごめんな。考え事をしていた」

「いいえ。すいません」

「どうして謝るんだよ？俺が悪かったんだぜ」

「いいえ……あの……」

フランは振り返るレオンからも目をそらせてまた無言でうつむいた。レオンは強く握った感覚は無かったが知らずに自分も緊張していることに気づかされる。

道は親方でも通れるほどの広さはあったが体感するに半分ほどに思える圧迫感があった。それは魔法の光のせいだと光を睨みながら歩みが続けていると徐々に道は広がって一つの大きな部屋に出た。

人が立ち止まり、人だかりが出来ていた。

「行き止まりか？」

「扉があります。あれが神殿への入口？」

「そうみたいだな。だが魔法士が魔法を唱えているのも無駄だな。こりゃ扉が開かれたってのは何だったんだ？」

人だかりの隙間からは鍵を解除する魔法の光が漏れて見える。一人ずつ腕に覚えがある魔法士が詠唱を続けるが青白い装飾をされた青銅らしき扉はピクリとも動かなかった。

一人、また一人魔法を辞めてすぐすぐと戻っていき、ついにレオンは先頭になった。

天井すれすれまである背が高い扉は横幅も数メートル以上ある。とりあえず触れて壊せそうな脆い部分がないかを確認したが見つからない。

「扉が開いたって話だが、これは？」

「開いたのは階段の先にあった第一の扉。これは第二の扉になります」

扉を監視する神殿に仕えるカムイを着る信者がレオンの疑問にそう答えた。

「扉ってのはたくさんあるのか？」

「神殿へ続く扉は三つ。これを抜けると神殿の内部には入りますが祭壇へ行くにはもう一つの扉が開かないとなります」

「扉がまだあるのか。だったら奥には誰もいないのか？」

「はい。扉が開いたのはもう何十年何百年も前の話になります。生きた人間がいればとくに死んでしまっている」

「だったらさっきのウォーラムはどっから来たんだ？　ここで召喚した奴がいたのかな？」

信者へ素朴な疑問を口に出してフランを横目に見る。レオンと同じように扉に触れていた。

「あの召喚獣はこの扉の奥からヌツと姿を現しました。半透明な身

体だったので扉の傍で召喚され、具現化される前に扉をすり抜けた
と思いますが……」

「思いますが？」

「さきほどの話の通り、生きた人間がいればとくに死んでしまっ
ています」

「別の道があつてそっから神殿へ入ったんじゃないのか？」

「あり得ません。神殿への道は一つしかありません。海の外からも
別の入口を探した歴史はありますがどれも見つからなかったと一致
しております」

信者はそう言ってイタズラか何かだと思っていますので心配しないで
くださいと付け加えた。

「もちろん我々の仕業でもございません。ウォーラムが出たという
前例は聞いたこともありませんのでやはりイタズラではと思います」

「扉の奥から出てきたように見せる方法はいくつもあります」

「それに魔術師が騙だまされるって考えるのも何だと思うぜ。なあフラ
ンッもういいだろう？」

信者からフランへ向き直り諦めようと言おうとした時、フランの
身体からまたあの青い炎が発しているのが見えた。

小さな炎で目の錯覚かと思つたほどにうつすらと燃えている。レ
オンはフランの視線を追って扉の上部を見上げると扉の縁も同じ青
色に輝いているのが見えて訝しげに目を細めた。

反応しているのは間違いない。やはりフランと関係があるのだろ
うかとレオンは不安に思つた。

「……この奥にいるの？」

フランの声。

誰かと話しているように相手を思わせる妙な間があった。うん、
とうなずいて扉の端へと扉へ沿って移動し始める。

レオンと離れていくフランが縁際で立ち止まる。

その細く白い腕がカミイの裾からすうーっと現れて縁の青い炎に
触れる。

「レオンさん。開きます」

レオンはその声に従って数歩下がると遅れて足元が揺れ始めた。
周囲を見回すざわめく人々がまた来るのか、と呟いた。

扉の炎は静かに消えてフランを包む炎も共に消えた。ゆっくりと
終息する揺れを吸収するように扉がうつすらと開いてその奥の景色
が見えた。

手入れされていないのに美しい光沢を放つフロアがあり、宝石に
似て人々を魅了する。誰もが悦に浸りながらも我先にと中へ雪崩れ
込んだ。

「どうやって開いたのでしょうか？」

信者は興奮した様子でフランに訊ねる。

「たまたまタイミングが合っただけさ。中へ入ってもいいかい？」

「ええ……あ、あの……あつと……」

「さあフラン行こう」

それ以上詮索されることも嫌だと思ったレオンがそう答えてフラ
ンを中へと連れて行った。

光沢が放たれたフロアは歴史以上の価値がある量で埋められて足
で踏むのももったいないと感じて素足になる人々も大勢いた。

掘り返して一部を盗もうとする人間もいたがフランにどうやって

開けたか、と訊ねてくる人間がいなかったことに安堵するレオンがフランの手をぎゅっと握った。

「絶対に何があっても守ってやるからなッ」

「……レオンさん」

不安を感じているのは自分の方かもしれない、と自嘲めいた言葉を胸中で吐いたレオンは手を離して先を急ごうと言った。

だっ広いフロアは壁も天井も同じ素材でできている。光沢を放つ青が入った白色のブロックを詰めこまれてあり、濁って鏡のような反射はない。大理石に似ている素材だった。

神殿と言うよりは墓場のように見えるのはあまりにも殺風景だったからだろうか。

レオンは歩みを進めて神殿の奥の三つ目の扉とやらを探すことにした。

「扉が開いたことをどうしてわかったんだい？」

「また声が聞こえました。縁に触れて開いて欲しいって願えばいいって」

「願ったのか？」

「……はい」

「どんな声だった？」

「可愛い声でした」

「可愛いね。まあ嫌な気がしなかったのなら相手も攻撃を仕掛けてくることは無いと思うんだが……ううん……」

「レオンさん……？」

「うん？ ああ俺の考えすぎならいいけど警戒はしておくぜ」

レオンはそう言うのとフランは浮かない顔をしていた。

その理由も知らないふりをして歩き続けて五分してようやく三つ

目の扉が見えた。

外見はさきほどの扉に似た青銅の扉だが、中央に窪みがあり円形の何かが埋まっていたと思われる。

「声は聞こえるか？」

「いいえ」

「何か感じるか？」

「いいえ」

扉の前で短いやり取りをする二人。

レオンは手で触れた。門扉にはひんやりとして滑らかな手触りがあつたが中央の窪みだけが熱を持っていた。

あの青い炎が填まっているのを想像して頭を振った。

「何か見えるか？」

「見える？」

「たとえば炎とか青い炎」

「青い……炎ですか……？」

フランは考え込むが全然憶えていない様子にレオンは何でもないと答えた。

「俺にも普通の扉にしか見えないぜ。これを開く鍵も見当たらないれば……諦めるしかねえかな？」

「……」

「奥にいるとも限らない。声つてのも……ってフラン？ 聞こえているか？」

「……え？」

「だから——」

「聞こえないッ！！ もっと大きな声でッ！！」

レオンの返事ではないと気づいたのはフランの視線だった。
明らかに扉の奥の何かに向かって叫んでいる。レオンには聞こえない声がフランを呼んでいる。

「——ッ！！ 危ないッ！！」

扉の奥から迫る音の波に反応したレオンはとっさにフランを抱いて扉の前から逃げた。

次の瞬間、扉の中央の窪みに青白い光の玉が現れて光を放射線状に放ち始める。その光の球体にヒビが入る音がした数秒後、光は割れて扉が開いた。

中から人ならざる何かが青い炎に押されて後方へ吹き飛ばされていく姿が横切った。

レオンは炎からフランを守るように丸まった。背中が燃えるように熱くて振り返ることさえ出来ない。

熱風に抱かれた悲鳴も神殿の入口辺りから聞こえて炎の大きさを知る。

「何があった？」

扉の中にあった全てが放出されてようやく振り返ることが出来たレオン。

周囲の宝石に似たブロックには焼け焦げる跡もなく、奥にいた腰を抜かした学者達も魔術師が展開する多重層結界に守られていた。

不自然に開いた神殿中央のスペースには吹き飛ばされて現れた人ならざる何かが立ち上がりとしているのが見えた。

「何だ……あれは……」

灰褐色の皮膚で覆われた背の高く細い人間がドロドロと溶けて足元に灰色の水たまりとなる。

魔術師はその光景に警戒しながらも結界を解いてその何かの動向を探った。灰の水たまりはぶくぶくと気泡を表面に浮かばせて形状を変えようとしたが、うまく整えられずにまた水たまりとなる。

やがて動きが止まり、表面から黒煙と白煙が別々の方角へと流れている。

「これを吸い込むなッ！！　これが本体だッ！！」

誰かが叫んだ。

煙はその声に反応し逃げようとする人々よりも速く、その四肢に巻き付いて絞めあげる。

運よく逃げ切れた人間達は助けようともせず、我先にと入口へと走り続け、広い室内には煙に抱かれた人間とレオンとフランだけが残された。

「フラン……俺達も逃げるぜ」

「ダメッ！！　私を呼んでいる声がします」

「そんなことを言ってもッ」

煙に抱かれた人間はやがてずるずると煙を発する灰色の水たまりに引きづり込まれ始めた。

「行かないと……私は行きます。レオンさんは助けてあげて」

「助けるったって……一体何をすりゃッ」

「お願いします」

フランはレオンの手を解いて開いた三つ目の扉へと走っていく。その後ろ姿を追いかけてしようとしたレオンを呼びとめる煙に抱かれた

男達の救いを求める声。

迷いながらも剣を抜いて灰色の水たまりへ走った。逆さに構えた剣を突き刺して自身はさっと後方へ逃げる。刺さった剣先を表面の泥が溶かしていく。ジュツと煙をあげて折れていく剣の柄がころんと転んだ。

「何だってんだッ!!」

レオンはゆっくりと中央へと縮小していく黒煙と白煙を腕を頭の前で交差しながら突き破っていく、二つに離すことに成功した。

先端しか残っていない黒煙や白煙を自らの魔法で引き剥がす魔術師がレオンへ礼を言って結界を展開しながら逃げ出した。

「はあはあ……重くなる……」

身体に付着した煙がレオンの動きを制御してくる。それに抗うが重たくて耐えているだけでやっとだった。

グググつと水たまりへ引きずり込もうとする力に足を踏ん張って耐えるレオンに水たまりから白煙と黒煙が同時に襲いかかってくる。避ける力も残っていない、と観念したレオンの全身を煙がすっぽりと覆いかぶさった。

「クソッ!! 離れやがれッ!!」

身体を包もうとする煙を千切って投げて抵抗するが、投げられた煙はふわりと浮かんで戻ってくる。

ぎゅうぎゅうと押し込んでくる煙を押しつけようとした時、背中にもあった煙に押されてバランスを崩して傾いたレオンの身体を一気に水たまりへ引きずり込もうとする。

フロアに水平に滑る身体がぐんぐん、と頭上にある水たまりへと

進んでいく目の前に剣の柄が見えた。

「次は折れるなよッ」

煙から手を出して剣の柄を掴んでフロアのブロックの隙間へと挟んだ。手がしびれるほどの衝撃があったが決して離さなかった。

しびれがレオンの全身を抜けて煙へ流れたのか、煙はふわっと浮かんでレオンの身体はフロアへと投げだされた。

「何とかなったか……はぁ……はぁ……」

折れた剣の柄を支えにして身体を起こすレオン。煙は水たまりへと吸い込まれていくのが見えた。

「今の内に……はぁはぁ……フランを……」

レオンは折れた剣を構えながら後ずさりしながら背後にあった三つ目の扉へ向かった。

追いかけてくる様子もなく表面に気泡を浮かべて佇む灰色の液体。レオンの身体は三つ目の扉をくぐり終えると扉はバンと勢いよく閉まった。

「一安心ってか……それとも罠にはまったか……？」

鞘に折れた剣を押しこんで踵を返したレオンはフランを追いかけて走り始める。

長い一本道。長方形の整えられたブロックに囲まれた道をひたすらに走り続けた先に祭壇の間と思われる広場があった。ドーム状の建物で天井の立派な金色の装飾が施された縁にそって水が流れて壁を濡らしている。足元にある小さな穴に水は吸い込まれて床の下へ

と流されているのが音でわかった。

祭壇は中央にあってそこにはフランが何かを仰ぐように立っていた。その視線の先には青白い光があってゆらゆらと浮き沈みを繰り返している。

「レオンさんッ」

「安心してくれ。全員逃げられたぜ。後は俺達だけだ。出口は他にないのか？」

足音に気付いたフランがレオンに振り返る。レオンは振り返ったフランにこう訊ねながら近づこうと歩くと青白い光がすごい速さで振動し始めた。

とっさに剣を構えようとして柄に触れたが折れていることを思い出して手を離れた。その場で光はくるり、と回り泣きつくかのようにはフランの掌へと舞い降りた。

「怖がらせないでください」

「怖がら……怖がる？」

「はい。この子が怖がってしまいます」

フランは指の腹で光を擦って大丈夫だからね、とほほ笑んだ。レオンは首を傾げながら近づいてフランの背後から青白い光を見おろした。

光の中には全身青色の羽根付きの妖精がいて泣いている。

「呼んだ声の正体はこれ……なのか？」

「はい。フェリアっていう名前にしました」

「しました……って」

「人間の言葉では発音が出来ないのでそう呼ぶことにしました。可愛いでしょ？」

神経が太いのか、マイペースなのか。フランはさきほどの光景を見ても焦る様子もなく掌の中のフェリアを夢中で撫でている。指には青白い粉が付着してあった。

「可愛いのはいいが。さっきのあいづがこっちへ来るかもしれない。そいつも連れていけるならさっさと逃げよう」

「フェリアです」

シルクくんに妙なこだわりを見せたのを思い出した。

「フェリアか……そうだな。よろしくフェリア」

レオンも調子を合わせて掌にいるフェリアへ触れようとした時、扉が壊された音がした。

「もう来たかッ」

「あの灰色の水たまりが狙っているのはこのフェリアです。もつと言えばフェリアに眠る水の精霊の力」

「フェリアってのは精霊なのか？」

「媒体です。フェリアに魔力を与えると水の精霊が召喚出来ると言っています」

「言葉がわかるのか？ そりゃ勉強したかいがあったなッ」

レオンは部屋中を見渡して逃げ場を探したが見つからない。ただ祭壇があるだけの部屋。壁際にある小さな穴はとも入れそうになり。出口は一つだけでそこから迫ってくる灰褐色の水たまり。

おそらく足音から形状を馬や鹿などの四足の動物に変えて走ってきているのがわかった。

「魔力を与えればあの灰色を退けることが出来るのか？そのために力を貸してくれって呼びかけてきたのか？」

「わかりません。言葉の全てを理解出来なくて……ただ魔力を与えてもらいたいって」

「だったら与えてやればいい。時間はあまり無いぜ」

精霊をどうして狙っているのかもわからないが二人は何かに巻き込まれて今ピンチだってことはわかる。

頼りになるのは折れた剣だけは心もとない。せめて時間を稼げば何とかしてくれるって言うなら折れた剣よりかは心強い。

灰褐色の足音がゆっくりと止まり、姿を現した。馬の姿に似た灰褐色の存在。

「あれも何だってのも全くわからねえぜ」

レオンは剣を抜くと不安が増した。改めて近くで見ると圧倒的な迫力があり、身体も数メートルある。こっちの味方は掌サイズ。

ふんッ上等だぜと気合を入れて剣を握る腕に力を込める。いなかかく灰褐色の馬もやる気らしいのが目に見えてわかる。

「レオンさん……私……魔法は使えません……」

「何だってッ?!」

「魔法なんて使ったことありませんッ!!」

魔法を自然に発する力を自覚していなかったのか。スウィニーの時も扉を閉まる音で目が覚めて札が何なのかも気休めだと思っていたに違いない。

これでシルクくんを魔力で動く機械人形だと言ったことを知らないことも説明がつく。

「だったら一度逃げるぞ。祭壇から降りてくれ」

「ダメです。この子は祭壇が魔法陣となっていますのでここからは動けません」

「動けないだってッ?! それでも……」

灰褐色の馬が目を離れたすきに音も無く突っ込んでくる。避けられない。背後には祭壇があつてフランがいる。

「だったらフェリアを掌で包みこんで願ってくれ!!」

「願う……?」

「ああ。願いつてのは叶うもんなんだぜ。魔力つてのは人の意思の強さだぜ」

「人の意思……?」

「フランがその子を思えば願いは届くもんだぜ。それまでは何が聞こえてもジッと目を閉じて願っている!! いいか? 絶対に目を開けるなよ」

「は……はい」

フランは言われた通りに目を閉じてフェリアを掌に包みこんで祈り始めた。微量だが魔力を発する体質がある。時間さえ稼げれば魔力は蓄積されて召喚出来るはずだ。

「上等だぜ!! 守ってやるよ。俺が必ず守ってやる」

そう言って灰褐色の馬へと自らも剣を構えて駆けだした。

トランス

馬の右前足をすくうように斜めに斬りあげる剣が大げさに空振りした。寸前で跳躍した灰褐色の馬はレオンを無視して祭壇へと突進を続けた。

ドン、と祭壇に体当たりをしたが半透明の魔法の壁が攻撃を阻んだ。レオンはその背後から斬りかかり後ろ足を横へ両断したが腕に感触はなく、虚しく空気を薙ぐぶおん、という音が室内に響いた。力任せに振った剣の勢いに身体ごと持っていかれたレオンが体勢を崩した。

「見せかけか？」

すぐに体勢を整えなおして構えるが灰褐色の馬はこちらを見ることもしない。ただ真っ直ぐに半透明の結界に守られた祭壇を見おろしている。

細い瞳が弓なりに歪んで睨みつける視線の先にはレオンの言った通りにフェリアを握ったフランが祈りを続けていた。

「だったらまずは本体を探さないとッ」

レオンは胴体の真下へ潜り込んで闇雲に剣を振り続けたが宙を薙ぐ軽い感触に焦りだけが募る。

馬はいななき、前足をあげてさらに高い位置から祭壇に襲いかかる。半透明の壁と蹄の接着面に魔力で出来た摩擦が生じて青色の火花が散って馬は後方へよろける。

半透明な壁も無事ではなく、小さな亀裂が入っていたのを見上げてレオンは無力を実感する。

馬は小さく右前足で足元を探って身体をグッと沈めた。勢いをつ

けてもう一度体当たりするつもりのようなのだ。

「何だ……剥げた……？」

灰褐色の馬の足から灰色の一部が剥げてパラパラと足元へ落ちた。目を凝らして確認していみると部分的に剥けているのが認識出来る。いずれも中には黒や白い塊が見えてさきほどの煙を思い出させる。おそらく本体だと思われる。

レオンは我慢出来ずに確かめるためにも剥げた一部へと攻撃を仕掛ける。膝の少し下にある黒い塊へと一撃を加えると感触があった。剣先に粘着質の液体がまとわりついて重くて振り抜けそうもないがグツと全力を注いで、足りない分は体重も乗せて剣を押した。

剣先は宙へ投げ出されて自らもその勢いに吹き飛んだ。黒い液体が周囲へ散ってフロアを溶かした。ジュツと煙が立ってやがて消えた。

「はあはあ……気の遠くなる作業になるぜ」

糸口を見つけたレオンは内部が見えている部分を集中的に攻撃し続けたが威力は感じられない。馬は痛みを訴えることも身体を小さくすることもなく、また体当たりを辞めることも無かった。

ふらふらになりながらも剣を振り続けるレオンが放つ一撃がついに止まった。白い液体をすくうほどの臂力も残っていないので突き刺さった剣を押すことも出来なくなり剣から手を離してしまった。

「はあはあ……喰って……喰ってやがるのか……はあはあ……」

手を離れた剣が飲みこまれていき、やがて元々折れて短かった剣さえも体内へ飲みこまれてしまった。

魔法を使えないレオンが持つのは拳だけ。辺りに使えそうな武器

を探したが見当たらない。疲れて視界も悪くなり、情報を整理する思考も停滞してくる。

だが何もしないよりは動け、と自らを鼓舞して走りだす。素手で塊を掴もうとした時、チツと静電気に似た何かが身体を貫通して意識を失った。

「レオンさんッ！！」

フランは目を開けてレオンの名を呼んだ。

掌の中にいるフェリアがレオンの意識が飛んだことを伝えてきたからだ。フェリアは続けて魔力をお願い、とフランへ催促し続けた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

「みゅーみゅー」

「私のせいでレオンさんがッ……」

「みゅーみゅみゅみゅー」

「ごめんなさい……何を言っているの？ねえ教えて！！ 私にある魔力なら全部あげるから」

掌にいるフェリアへと思いを込めて願い続けたが何も起こらない。

ドスン、と祭壇全体が揺れる振動がまた来る。灰褐色の馬が体当たりをしている姿が見えて震える身体。ギュツとスがるようにフェリアを抱いた。

「どうして私なの……？ 何も出来ない私……城でもずっと一人だ

ったから私の名前を呼んでくれて嬉しかった。必要としてもらえたのが嬉しかった」

「みゅみゅ？」

「レオンさんに迷惑をかけてあなたにも何も出来ないのが私なのッ！！ お願いだから教えて……そうじゃないと……」

逃げてしまいそう、と言いかけた言葉を飲みこんだ。ドスン、と体当たりする馬の目がジッと睨みつけてくるのが怖くて目を開けていられなくなった。

この掌にある小さな温もりにすぎる弱い自分を罵る別の自分がいったりして心の中はぐちゃぐちゃだった。

「精霊の血を受け継ぐ者よ…私は水の精霊。魔力を解放すれば……を……」

「ーッ!! 声が……声が聞こえた」
「みゅー?」

鮮明に聞こえた声に掌を開けると首を傾げる小さな少女がいてまたみゅーとしか言わなくなる。

「どうして……どうしてなの……」

フェリアをギュッと掌に押し込んで胸の真ん中へ抱えるフランがそう繰り返した。

何度目かの体当たりの後、ついに半透明な壁の一部が欠落し、破片が目の前へとひらひら舞い降りてくる。落下の最中に透明な滴になり、祭壇へ落ちた時にまた声が聞こえた。

「あなたの力を解放しなければあなたの心は死んでしまう。そしてあなたの心の死は精霊を永遠の眠りへと誘う」

「力の解放……?」

「精霊を繋ぐ血。現世へと召喚し命を謳う者へ」

「何を……何を……ねえもっと教えてッ!!」

声は消えた。

次々と剥がれる欠片が水滴になり、祭壇へ振る度に声が聞こえる。抑制された力の解放、世界の理を紡ぐ、時が満ちる、断片的に聞こえた言葉に疑問符を投げかけても返事は沈黙へと葬られる。

まるで世界に一人だけが不実のようにフランは強い孤独を感じ始めた。あの塔へいた時と同じあらゆる声や音や光が一方的に情報を伝えてくる。

「助けて……お願いだから私を助けてください」

届かない叫びをフランの震える唇からこぼれおちる。

その時、脳裏に過ったのは時計台に立ち手を広げる勇者様の姿。

レオンさん……と小さな声でフランは呼んだ。

「何があろうと守ってやるよ」

ふいに浮かんだレオンの優しい声。

フランはハッと顔をあげてレオンの方を見る。倒れたレオンが震える上半身を起こして立ち上がるようにしていた。

「あなたの血に眠る私の力を……名はセイラム。水の精霊」

「セイラム……？」

その名をふいに口にした時、掌がほんのりと暖かくなった。

フランは視線を掌へ向けると指の隙間から青白い光が見えている。弱い光。数秒すると消えてしまった。

レオンが立ち上がり馬へと駆けだした。足首にある黒い塊を掴んでグッと引っ張っている。長い金色の髪の毛が逆立ってレオンの全身にわずかな青い火花が散っていた。

「離れろってんだ」

レオンは強い口調で灰褐色の馬へ言った。

肩につけてあった革の鎧がパンと弾けて壊れたのも気にせず、力を込める腕に巻き付き始めた黒い煙。ギュッと腕を締め上げる音が耳に聞こえたのが逆に反骨心を蘇らせた。

痛みを忘却の彼方へ投げ捨てて意識を黒い塊へと注ぎ続ける。レオンはただフランを守りたいと思っていた。

「――ッ」

灰褐色の馬が動く、とレオンの身体が宙へ投げ出された。巻き付いた黒い煙も塊へと戻っていく。

願いが通じたのか、そうではなく助走をつけるために後方へ戻ったのだ。レオンの投げ出された身体も背中から地面へ落ちて息が出来なくなる。

それでもよろよろと立ち上がった視線の先にあったのは灰褐色の馬のお尻。四本の足の隙間から見える祭壇との距離はズいぶんと離れた。

「よしッ」

と口に出した時に視界が歪む。気が緩んだせいで痛みが全身に戻ってくる。特に絡みつかれた腕が千切れそうに痛い。

ダラリと垂れた腕をもう片方の手で擦って感覚を取り戻しながら灰褐色の馬の前へと躍り出る。

「もう一度、止められるのか……」

前足でフロアを蹴り勇む足取りを見てタイミングを合わせようとしたレオンの頭上を無情にも飛び越える灰褐色の馬。

全身のバネを伸ばして半透明の壁にぶつかると部屋全体が揺れて天井を支える支柱の一部にも亀裂が入り始めた。崩壊を彩る音色は鈍く重たい。

ドン、と額を強く押し当てる灰褐色の馬へとレオンが追いついて触れようとしたが軽い跳躍で後方へかわされる。

レオンは遠くへ離れた灰褐色の馬を追わずに祭壇の手前で立ち止まった。

「大丈夫か？」

「はい。それよりもレオンさんが怪我をしています」

「心配ない。だが止められるのは難しい。それに柱を見ると建物ごと壊れるかもしれない」

背後にいるフランへ声をかけるレオン。視線を壁際にある柱の方へ見上げて深く息を吸った。

「まだ何か聞こえるのか？ それと話せるなら今の状況を伝えて祭壇からいったん逃げないかって相談してくれないか？」

「一方的に声が聞こえるだけで話は出来ません。ただ……ただ……」

離れないと危ないことはフランにも理解出来るがこの掌の温もりを肌で感じ、この声を耳で聞いているとどうしても離れられなくなる。

そのせいでレオンを傷だらけにさせていることも充分と理解している。

「レオンさんは逃げてください。私は残って何とかしてみます」

「フランが逃げないのなら俺もここへいるぜ」

「どうして？ 私達は知り合ったばかりです」

「約束したろう？ 何があろうと俺が守ってやるって」

半分だけ振り返りレオンは弱い笑みを浮かべてフランへ言った。
だが不安はある。手には剣さえもなく頼りの妖精も黙ったままで
おまけに目の前に見える灰褐色の馬は未だに闘志をむき出しの瞳を
している。

「……はい」

「ハハハ。不安そうな顔をするなよ。必ず俺が守るからその小さな
……えっと……名前なんだっけ？」

「フェリア……違う。セイラムって名乗っていました」

「セイラム……水の精霊セイラムか——」

レオンがその名を口にした瞬間、フランの掌から光が溢れる。あ
まりの光の勢いに包みこんでいた掌を開くと光は天井すれすれまで
伸びた。

「待ってはくれないかッ」

灰褐色の馬は跳躍し祭壇へと襲いかかってくると思ったが狙いは
さらに上だった。頭上に輝くあの青白い光が形状を変えて掌の中の
妖精に似た姿になった時、灰褐色の表面を覆う何かが剥がれ落ち、
白と黒の塊は入口付近へと弾き飛ばされた。

ゴロゴロと転がる塊はその道中で一つの塊へと重なり合う。まだ
ら模様の塊も形状を変えて人の形になった。肩の位置に馬の頭部が
現れて模様の白色だけが吸い込まれていく。全身黒の人間に白い馬
が肩に乗っかっている姿が定着すると身体に線が入り次第に輪郭や
衣服を形成し人らしくなった。

最終的に黒いスーツを着た若い男となった塊が笑った。

「召喚か……ふははははは」

「何を言ってやがるんだ？ 人間なのか？」

「いいぞ。精霊の血を引く女もセイラムも同時に頂くとするか」

男はそう言ったが動きは見せなかった。レオンは注意深く見ているとまだ変化しきれていない部分が足にあった。

「リアムの少年と精霊の血を引く少女。召喚を感謝いたします」

「ではあなたが私を呼んだ人……？ 精霊の血を引くなんて私がですか？」

「ええ。あなたには我々の血を解放する力があります」

「解放する力？」

「そう解放する力。この世界を再び混沌へ落とそうとする闇の手から救うための力を得るのです」

「闇の手……？」

「そうあの目の前にいる男も闇の一族のひとり。精霊の力を得て世界を崩壊へ導こうとしております」

精霊の言葉で男へと視線を向けるフラン。男は不気味に笑みを浮かべて精霊に待っていると指差して狂ったように叫んでいる。

「話は後にしてくれッ。あの男はもうすぐ動くぜ」

「レオンさん？」

「フランどうした？」

「あの……レオンさんの身体が……」

「身体が？ 何だこりゃッ？！」

レオンは全身を包む青白い光に気づいた。頭上で輝くセイラムと同じ光が全身の傷を癒してくれている。

「リアムは精霊を守る戦士でした。その身に精霊の力を宿し異形の

闇と戦う力があります」

「ただの噂や迷信だと思っていたぜ」

「その瞳にある白い輪が戦士の証。精霊の加護を受けた肉体はやがて大いなる力の器となる」

「やがてって言うのが困るぜ。俺は今欲しいんだ。出来れば目の前の男を倒してここから出られるくらいにな」

「願えば戦う力を与えましょう。その身に精霊を宿すトランス状態へとなる素質があなたにはあります」

「トランスか……精霊が俺に力をくれるなら俺は願うぜ。フランを守る力を俺にくれ」

レオンはそう言って天高く掌を掲げた。

頭上にいるセイラムは目を閉じて何かを呟き始めると膨大な魔力が身体に流れ込んでくるのを感じる。何層もある意識を破ってレオンの心の最も深い部分へと精霊の力がそそがれていく感覚が全身をめぐる。

通常感覚がごっそりと削げ落ちて代わりに夢の中にいるような錯覚があった。自分の身体が自分ではないような感覚があつて同時に誰かが存在する温もりも感じる。

「これがトランスか……すごい」

レオンは自らの両手を見て力を感じる。身体の表面が白い光で包まれて全身を波打つ青色が掌へ集まってくる。

掌を上へ向けると青色の波がそこで溜まって形状を剣へと変化させた。グッと剣を握って斜めに払ったのに反応するかのように外側の水の流れが増した。

「トランスか……厄介な。だがその力はまだ未熟」

「そのわりには焦っているのが見えるぜ」

「ふんっ。頭に乗るなよ小僧」

男は低い体勢で駆けてくるがレオンにとっては何もかもが遅すぎた。数回のステップで男の攻撃をかわしその開いた胴体を剣で難いだ。

苦悶の表情を浮かべて剣で斬られた傷口を手の腹で押さえる男が後方へ跳躍し体勢を整えた。

「強いッだがこれはどうかな？」

男は白い手袋を外して掌を足元へと押し当てた。

足元が波打ち、波紋を広げていく中を闇が侵略していく。やがて真っ暗な円が足元に描かれると土人形のような闇が円の中から生えてくる。

その数は膨大だった。波紋はさらに広がり入口付近から室内の半分へと陣地を広げ闇を拡大させた。

「クククク……数は増えるぞ」

「数だけいたって勝てないぜ。俺にはわかる」

「どうかな？　楽しみだ」

男は足元へ当てた掌を垂直に立たせてレオンへ向けるとそれを合図にうごめく闇が一斉に襲いかかってくる。

軽い跳躍をしたレオンは流れるような剣技で闇を両断していく。それは踊るように優雅に。一筋の青色の線だけを残して闇が悲鳴もなく消失する。

そして大半の闇を切り払った後に円の中へ入り青い光を放つ剣を突き立てた。

「これで終わりだ」

と言って両手で剣を押した。剣先は見る間に闇へと埋まっていく。剣先から流れる波紋が男の足元へと闇を押し返していく。

男は後方へ跳躍したが間に合わずに自らの闇に全身を飲み込まれた。

「バカな……これが精霊の力……こんなにも差があるのか」

「そうこれが精霊の力さ」

「ふはははは。ますます欲しくなった精霊の力。今はお前に預けておくことにしよう」

闇にすっぽりと全身を包まれると男は闇と共に消失した。

レオンは剣から手を離すと同時に力が抜けていくのを感じた。全身の白い光が消えて通常感覚が戻ってくる。心の奥にいた誰かが完全に消えるに入れ替わりに疲労がのしかかってその場にへたりこんでしまう。

「はあはあ……」

「レオンさん」

「大丈夫だったか？ フラン。それにセイラムもって光がない？」

フランが駆けよってくる。レオンは半身を振り返りフランの無事を確認した後、頭に上を見上げたがセイラムの姿は見えない。その代わりにフランの掌にちょこんとフェアアの姿があった。

「消えたのか？ まだ聞きたいことはたくさんあったんだが」

「はい。私も聞きたいことはありますがレオンさんの身体の光が消えたと同時に光はこの子に戻りました」

「そうか……まあ無事で何よりってことだな」

乾いた笑みを浮かべるレオンへフランの掌のフェリアが飛んでいく。

肩や背中や腹の表面に鼻を押しつけるフェリアがレオンの胡坐あぐらをかいた太もの上へ着地する。

「みゅーみゅーみゅー」

「何を言っているんだかもわからないな」

「みゅみゅみゅー」

「ハハハ氣に入られたみたいだぜ」

フェリアはレオンへ向かって両手を仰ぐ姿にほほ笑みかけるレオン。

だが手を動かす力も残っていない。フェリアは太もの上で立ち上がり羽根を広げた。そして小さな光の球体となりレオンの頭の中へと入り込んだ。

「あ？ 何だ？」

みゅーみゅーと頭の中で聞こえる声に驚くレオン。
さっきの感覚に似ていることから心の中に現れた誰かはこいつだってことがわかった。

「精霊は氣に入った人間の心へ住むことができます」

「いいのか？ 神殿を留守にすることになるぜ」

「ふふふ。レオンさんらしいですね。身体に入られても何も言わずに住ませてあげるんですね」

「まあ俺も親方のところへ住みついたからな。氣に入っただんなら歓迎するってのも教わったことの一つさ」

レオンの疲労がいつしか消えていることに気付いた。立ち上がる

と身体の軽くなった気がした。

「はぁ……大変だったが無事でよかった。色々思うことはあるがまずは帰ろうか？」

「はい。ここへ残ってもわからないことだらけです。フェリアがいるので話はまたいつでも聞けますしね」

「出てきてくれりゃな。やっぱりさ……心の中にいるってことは俺の思い出を枕にしてんのかな？」

「ふふふ。さぁどうなんでしょうね」

「まあいいか。さぁ帰ろう」

レオンはそう言って入口へと戻った。

すっかり忘れそうになっていたがもう別れの時間が近づいてきている。フェリアのことを気に入っているならまた会いに行ける口実も出来たと思いつながら三つ目の扉をくぐると背後で扉がゆっくりと閉まった。

第二の扉も同様にレオン達にくぐると閉まった。そして階段を登ろうとしたら避難していた人々が大勢いて話を聞かれたが適当にはぐらかして急いでいるからとフランの手を引いて親方との合流地点へと急いだ。

外は夕暮れ。海へ沈むオレンジの光が地平線を焦がしている光景を瞳に焼き付けるように強く瞳を閉じ、たった一日の旅が走馬灯のように流れた。

神殿の手前には海を眺める夫婦や走り回る子供なんかもいてさっきの戦いが夢のように思えた。二人で見た夢をまたいつか話し合おうと決めて広場の方角へ続く長い橋を渡った。

ノアールの姫

まるで似合わない親方と広場に懐かしさを感じてレオンは手を挙げた。その脇にはテッドとミレイとカムイを着た知らない小さな犬族がいた。

合流は広場の中央にある時計台の下。東西南北に向かってベンチが四つあり、その西側、神殿の方向を向いているベンチの前で話を続ける親方と犬族。横目でちらりとレオンを確認しても浮かない顔だった。

太い指で輪郭をさすって眉間にしわを寄せているのはだいたい厄介ごとに巻き込まれた時か、巻き込まれそうな時のどちらかだ。

「フラン様、ご無事で何よりです」

犬族の執事はカムイのフードを外してフランに向かってお辞儀をする。

レオンの背後にいるのに返事をしないフラン。振り返り顔を見ると疲労できちんと目も開けられていない様子だった。

「フラン様……？」

「疲れているんだ。話は目が覚めてから聞いてやってくれないか？
もう宿は手配してあるんだろう？」

「何かございましたか？」

「何かあって？ 思い当たることがあるとか？」

そう訊ね返すと執事は言おうか言うまいかを悩みかねている表情をしたのち、こう切り出した。

「神殿で騒ぎがあったと聞いて、もしもそれがフラン様の体質に関

係があるのならば思い当たることはございます」

「まどろっこしい言い方だな」

「それでいかなのでしょうか？ 騒ぎの原因を教えていただけないでしょうか？」

「原因か……体質と関係あるがどうかはわからないが」

と言って頬をかいて説明をする。ちぐはぐな記憶を整理することなく説明していると話し手であるレオンにもよくわからなくなってくる。だが、執事は大きくうなずいて表情を曇らせた。

その背後にいる親方も深いため息を吐いてあごから手を離した。

「それで頭の中に妖精が住みついた。何でもいいかって思ったからそのまま橋を渡ってここへ来た。これが俺の憶えていることだぜ」

レオンが言い終わるとフランが寄りかかってくる。身体を支えて空いているベンチへと座らせるとふいに寝息を立て始めた。

「魔力の放出をした後は必ずそのような状況になります」

「その言い方だと初めてじゃないようだな。塔にいた執事ってのは……えっと」

「スィフでございます。フラン様のお付きの執事をしております」

「だったら手紙を送ったのも？」

「はい。私でございます」

「回収も自ら来るとは目を覚めたらフランも喜ぶぜ。これで少しは安心出来る」

「いえ。ここへはフラン様を迎えに来たわけではございません」

「何だってッ？」

スィフはキツパリとそう言うのとレオンは複雑な感情に戸惑いながら顔をあげてスィフを見つめる。ベンチに座ってもさほど視線が変

わらない小柄の犬族。見た目では年齢がわかりにくいのがある意味特徴だと言える。

「次の仕事はフランをアソイヤ火山へ運ぶことになる」

「請けていただけるのでしょうか？」

「仕事の内容も報酬も申し分はない。だが船に危険が及ぶとなった場合は全てを放棄せざるを得なくなる」

「連絡は常に取り合っておける状態にしておきましょう。放棄された場合でも手付金はお納めください」

「……よからう。これで交渉は成立。後はダイアリングのチャンネルで詳細を定期報告する」

「はい。ではその都度、フラン様のご容態に関しての報告と依頼の経過報告をお願いいたします」

親方がそうレオンへ告げるとスィフは振り返り親方と話を進めた。レオンは腕にフランを抱きながら話を摘まんで聞いたがまだ一緒にいられる時間の猶予が伸びたことくらいしか理解できない。それが手放して喜べる状況でないのも肌で感じた。

スィフはちらりと名残惜しそうにフランの顔を覗いてからカムイのフードをかぶり居住区がある市街地へと歩き始めたのをジッと見送った。

「どうなってんだ？　これは」

「話は後だ。今はシーアテイルへ戻る。医務室へ届けた後にブリッジへ来い」

「親方……俺がまずいことを言ったのか？　神殿のことは言わなかった方が良かったのか？」

親方はただ無言でレオンの問いには答えずに踵を返して船着き場へ戻った。いつもと違う様子に深刻さが伝わってくる。豪快に笑う

こともなく淡々と作業を続けるのは研究施設の移転を手伝った時しか記憶にない。一步間違えれば船も沈むほどの魔力の檻がずらりと並ぶ格納庫の張り詰めた緊張感を未だに憶えている。

腹に詰め込んだ爆弾を破裂しないように歩く運ぶのは這うのでも走るのでもなく歩くしかないと航路を通常の四倍の時間をかけて飛んだ数年前。神殿で見たあの光景、あの魔力はそれに匹敵するのだろうかトフランを抱き締める手に力が入る。細い腕に細い身体。難なく持ち上げて船へと運ぶレオンはただ素直に喜べない自分自身を呪った。

守ってやるなんて言っておきながらすぐに不安になる。あの時も馬を止めることどころか触れることさえ出来なかった。蚊帳の外。そんな自分に出来るのは目が覚めた時、笑って迎えることだけだろうかと考えながら船へと戻る一行の最後尾に並んだ。

☆

☆

☆

☆

☆

ブリッジへ入るとそこにはテッドと親方とカムイを腕にかけたミレイがいつになく神妙な面持ちで対面している。

「話を聞かせてくれ。これは一体どういうことなんだい？」

「あの子を逃がしたのはあの執事の独断だった。国ではなく執事個人からの依頼ということになる」

「それがまずいことなのか？」

「いやそれだけではまずいことではないが問題は理由にある」

「理由……？」

「精霊の血を引く女だと言ったんだろう？」

「ああ確かに精霊を血を引くって言ったぜ」

「間違いない。あの子は十数年前にさらわれたノアール領の小国の

姫だ」

「何だってッ?! フランがいたのはエレン領だぜ? 一体……誰が……」

レオンが信じられないと辺りを見渡すが誰もが真剣なまなざしで返してくる。テッドは困惑するレオンへ話を続ける。

「精霊を捕獲するためだ。精霊の力を手に入れて破壊神を復活させノアールと統治戦争を起こすつもりだった。そのためにあの子をさらったがあまりに強い魔力に塔へ閉じ込めた」

「何だそれ……そんな……バカなことってあるのか」

「執事を中心とした親衛隊が調べたレポートがある」

テッドは小さな情報を入れたクリスタルを指に挟んでどこまで事実かは不明だが、とレオンの掌へ置いた。

「だけど大砲を撃ってきた。あれは知っているから当たらなかったんじゃないのか?」

「砲撃部隊は親衛隊が持ち場を確保していた。親衛隊も執事も全てあの国から逃げてノアール領へと亡命を終えた」

「だからノアールで受け渡そうとしたのか? だがどうして火山へ行くんだ?」

「精霊の回収へ行く。あの子が精霊を解放しなければならない。それも急ぐ必要がある」

「急ぐ?」

「灰褐色の馬はおそらくエレン領の王から放たれた刺客だ。黒いスーツに戻ったという話も一致する」

「闇の一族だって言っていたな……確か」

「そう。向こうはあの子がさらわれたことに気づいてあの子の処分と精霊の回収を行おうとしている」

「回収？ 闇の一族が集めてどうしようってんだ？」

「闇の一族は精霊に封じられた闇の末裔。精霊がいなくなれば都合がいい。エレンが統治した世界では精霊も消えて自分達の世界を作ることが出来る」

「だとしても俺達と共に行く理由がわからない。こんな船よりもノアールの国に守ってもらえた方が安全だと思うぜ」

シーアテイルクラスの戦艦は数百も数千もある。兵士の数も圧倒的に多く、魔術師も多い。

「保護を拒否された。だが精霊を守ることの約束はくれた。そういうことだ」

「そういうこと……そういうことって何だよッ！！」

「ノアールは今、先代の陛下が危篤状態で王位継承権争いの最中。ここで王位継承権を持つあの子が戻ってくることを良く思わない人がいる」

「よく思わないだってッ！！親はどうしたんだ？王位継承権だって戻ったら兄弟か親子だろう？」

「決定したのはあの子の母親だ。母親なんてロクな人間はいない」
「母親がどうして……」

「もう一人息子がいる。あの子が戻ることで王位継承権が一つ落ちることになる。十数年はあまりに長すぎた」

テッドはグッと感情を堪えて淡々と説明する。母親に捨てられた経験と重ねてしまい、少ししかない母の面影がフラッシュバックした。

泣いていた。母は泣いていた。ごめんね、と言う母をレオンは守ることが出来なかった。

「だが資金面での援助や精霊が住む地域の警備を強化してくれる」

「……会ってもくれないってか？」

「ああ会うことも話すことも無いだろう。この話もあの子には伏せる」

「嘘をつけて言うのか？」

「そうじゃない……ただ黙っているだけでいい」

テッドはそう言って深くうなずいた。

「言いたいことがあるだろうがそれには理由がある。あの子の体質で最も重要なのが感情を不安定にさせないこと」

「爆弾や猛獣でも扱うような言い方だな」

「もっと危ない。あの子の体質は魔力を放出し続ける。問題は膨大な魔力を持つのにコントロールをすることが不可能なことだ」

「本人は魔法を使えないって言っているぜ」

「魔法は習得するもの。魔力は身体にある潜在的なもの」

「だったら魔法を覚えたら魔力をコントロール出来るのかもしれないな」

「無理だ。魔力が強すぎる。今出来るのは感情を安定させ続けること。迅速に精霊を回収するしか方法はない」

「騙して精霊を回収して……それでどうなるんだよ……その先はッ！！
その先はどうなるんだ！！」

レオンは激昂し、自らの腕を振ってテッドへ抗議したがテッドは瞬き一つせずにその言葉を受けた。

「エレンやノアールには帰れないだろう。ここへも置いておくわけには行かない」

「どうして？ 依頼が終わればサヨナラってか？」

「安全が最優先される。船を守るためだ」

「依頼は莫大な報酬を得られたから受けた。それで船を買えば……も

しも何かあっても魔力を抑えられるような装置も買えばいい」

「必要ない。あの子はこの船の人間じゃない。依頼が終われば降りてもらう」

「そんなに金が大切なのかッ？！ 依頼なんて断れば……」

「もしも断っていれば闇の一族が精霊を回収した時点であの子は殺されてしまっていただろう。二度目の依頼を断ればノアールで王族の誰かに暗殺されるだろう。安全なのはここにすることだ」

言い返せない事実にはレオンは黙った。強く拳を握って歯がゆさを感じる。

「考えるのは最後だ。依頼の時は依頼のことだけを考えると教えただろうがッ。フランはお前に任せる」

親方はそうレオンへ言ったが納得することなんて出来ずにいた。

「……ああ」

親方の迫力に潰された言葉達を飲みこんでレオンは返事をしてブリッジを足早に出て行った。

☆

☆

☆

☆

☆

船の振動が足裏へ伝わってくる。医務室の中、レオンはクリスタルのデータを眺めながらフランの目覚めを待っていた。

「一度、正確な魔力地を計算して魔力を抑制するクリスタルを持たせた方がいいのかもね」

「精霊召喚ってのはそんなに魔力を消費するものなのか？」
「特殊条件過ぎて僕には想像もつかないよ。そしてこっちがレオンの身体なんだけど」

とスウィニーはプリントされた様々な形をしたグラフが散りばめてあり、青や赤や黒などの鮮やかな色がつけてある紙をレオンへ渡した。

紙をちらりと見て首を傾げるレオンへとスウィニーが困り果てた様子で眉尻あたりを掻いた。

「元々の肉体グラフと比較しても何も変わらない」

「だったらトランスってのは何だったんだい？ それに体内に小さな精霊がいる分が変わらないってのもおかしいぜ」

「ここの古い測定機じゃわからないのかもね。その精霊ってのも見てみたいんだけど出せるかな？」

「ううん……いる時はいる時でうるさいんだが今は静かだ。眠っているのかな？」

「姿が見えるの？」

「見えるね。小さくて半透明な羽根に青いまだら模様があって同じ色のドレスを着ていたぜ」

「それはいつに消えたの？」

「帰りの橋の途中で気付いて……神殿にいた時は誰も何も言ってこなかったから見えなかったんだと思うとして」

「他の人には見えなくて可能性もあるね。それで消えたのは？」

「ああ……えっと……橋を渡り終えて親方が見えて手を振った時には消えていたかな？」

「そうになるとフランの魔力が途切れたのと同時に消えたのかもね。姿が見えている間はずっと消費を続けているとか」

「そうなのかッ?! だったら無理をさせていたのかな……少し……いや結構、話を聞こうとしたから」

レオンは長い橋で繰り返した会話を思い出す。フランに頼んで何を言っているかを教えてもらっていたことも魔力の消費を拡大させたなら、と振り返る。フランの青白い寝顔に言葉を失って視線を紙へと落とした。

「レオンのせいじゃないさ」

「俺のせいさ。神殿なんかに行かなければ良かった」

「親方が勧めたんだろう？ 観光に行って来いって」

「ああ。思い出が無いのはつまらないだろうって思ってくれたんだろうな」

「それで最後。執事に渡して全てが終わるはずだった」

「フランは塔へ帰り。また一人で過ごすんだぜ」

そう言ったレオンの表情が悲しげだったのをスウィニーは背を向けて薬品を取り見ないふりをした。重症なのは心か、と胸中で嘆くスウィニーが古すぎる箱型の装置に手を置いて薬品を中へと流し込む。

「スウィニーさ……俺はどうしたらいいと思う？」

「レオンらしくないね。どうってのは？」

「真実を全て言うのか黙っているのか」

「言わない方がいいだろうね。精神が不安定な時に召喚が起きて暴走でもしたらこの船くらいなら数秒で沈む」

「そんな力があるって話を聞いてもわからないぜ。俺には少し歩いただけで疲れる運動不足のお姫様だ。何にでも名前をつけて可愛がる。そのわりに話しかけられるとどうしていいかわからなくて困りやがる」

「レオンはたくさん知っているんだ。船の中には怖がる人もいるだろうね。僕だって正直怖いよ」

「いいやつなんだ」

「それを知っているのもレオンだけさ。君がみんなにフランのことを教えてあげたらいい。知ることが大切なんだよ」

「知ることか……俺はフランの何を知っているんだろうな」

と溢したレオンへスウィニーが柔和な笑みを浮かべて作業へと戻った。古い装置がガタガタと揺れて容器内の液体を揺らした。いつもはうるさくてかなわないと思うが今はその激しい音に助けられる。視界の隅で青い光の粒子が見えたことで振り返るレオン。いつの間にか視界を遮るようにフェリアが立っていて宙を滑るようにフランの横顔へ張り付いた。

「見えるか？ 今、フランの頬に触れているぜ」

「見えるね。脳が起きてから目が開けるまで数十秒かかるから今目を開けると意識と繋がっていると考えてもいいのかも」

「開けたか……」

レオンは立ち上がり頭を振って状況を把握しようとするフランの顔の前へと座る。フェリアはくるくると回ってレオンの肩へちょこんと座って首へ寄りかかる。

「おはよう……ございます？」

「ハハハ。まだ夜だよ。疲れが溜まったんだろうな」

「はい。橋を歩いている途中からあまり憶えてません」

「ぼんやりとしていたからな。またいつか来ればいいんだ。今はゆっくりと休めばいい」

聞かれるのが怖くて早く寝かせようと邪険に扱ってしまう。フランの反応が怖くてレオンは思わず目を背けてフェリアを見てしまう。首を傾げるフェリアに沈黙を託すには無理があった。半ば諦めたよ

うにフランへ振り返る。

「……はい。少し眠たいので寝ます。次……朝……目が覚めたら話をしましょうね」

「ああ。たくさん話をしよう。これからはしばらく一緒にいられるんだから時間はある」

「はい」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

そう言う肩にあった暖かな感触と共にフランの表情が消えた。眠りに落ちるのも早くて目を疑うほどだった。

「寝ぼけていたのかもね」

「良かったって言っているのかな？ 俺はもっとフランと一緒にいたいと思っているんだぜ」

「一緒にいられるさ。悩んでいても仕方ない。今日はもう遅いからレオンも眠るといい」

「ああ。そうするぜ。フランを頼むよ」

レオンは立ち上がり医務室を出ようと扉に手をかける。その近くにあるベッドで眠るフランの様子が気になって立ち止まったが視界の隅にスウィニーが見えて扉を開けて通路へと身体を押しこんだ。

クーパーランド

——アソイヤ火山。ふもとの街 【クーパーランド】

マグマが岩肌を削り作った自然の滑走路にシーアテイルを停泊させた。そのすぐ脇に街があつて炭坑夫がシャベルを掘り返した土の上に適当に刺して酒場へ消えていく姿が一番に目についた。誰もがやれやれと言った風な表情でメットを軽く叩いて愚痴を言い合っているざわめきが優しく仄かな灯りで包まれた街にはよく似合っていた。

だがその炭坑の街に似合わない人影もかなり見られた。テントを張って火山へ続く道を封鎖し始めているノアール軍の兵士だ。

「暑いぜ」

「そうですね」

レオンがタラップを降りてすぐにそう言つて火山の方角を見上げて目を細めて嘆いた声に同意するフランはすっかり顔色も良くなった。魔力を吸う札を縫い付けたハットを被りバルーンパンツにサスペンダーがあつてトップスはフリル襟の白いシャツを着ている。首筋に汗でピツタリと貼りついたネックレスには魔力を吸いこむ符が貼り替えられる長方形の木の板を持ち歩いているせいでフェリアの姿は見えない。

「あの列は何なのでしょう？」

「あれは奉納に行くんだよ。火山に眠る火の精霊に一年の無事を祈るために薪を火山口に投げ入れる伝統があるんだ」

「今日は奉納のお手伝いが仕事なんですか？」

「……兵士の方のお手伝いかな？ 奉納の儀式が行われる前に火山

へ入って精霊へ儀式をするっていう意思を伝えに行くんだ」

軍が封鎖している手前で薪を置いてふもとへ戻り薪を取りに行く女性だけの列を指差してフランは訊ねたのにそう答えた。

慣れてしまえば何も感じなくなる、と言った脚本家のアッポイの言葉が今になって頭のなかで繰り返される。嘘をついた。その事実がレオンの中でくすぶり始める。

先頭で歩く親方とテッドが街の方角へ歩くのでその背後を二人はついて歩いた。

「いつもこんなに兵士の方々がいらっしゃるのでしょうか？」

街は妙にざわついているのを感じたようでフランはそう小さな声で訊ねる。普段は炭坑夫しかいない街。観光する場所でもなければ栄えている様子もなく、ひっそりと佇むという言葉が似合う街で荒廃した雰囲気がある。

錆びたレールの上をガタガタ揺れながら走るトロッコに乘せられた鉱物が落ちないように覆いかぶさる農夫達がレオン達一行を見て何かを話している姿が頭上を通過していった。

「普段は寂れた街さ。あんまり兵士のことは見ない方がいいぜ」

「え……？ どうしてですか？」

「忘れたのか？ フランはエレン領のお姫様なんだぜ」

「あ……」

「だからと言ってどうなるってわけじゃないが慎重に行動しようぜ。バレたら大変なことになるかもしれないしな」

レオンがそう言うのとハットを目深にかぶりなおすフランがきよろきよろと周りを覗くのが余計に目立つが兵士と話をされるのも困るので放っておこう。何より変な動物みたいで面白いってのもある。

「大丈夫さ。そんなに構えなくても親方に目が行くから俺達はほとんど目に入らないさ」

と先頭を歩く巨大な後ろ姿を指差して言う。フランは帽子から手を離して口を結んだまま大きくうなずいた。

「だが何かあっても困るから街の中にいる間は俺から離れるなよ」

「はい。ありがとうございます」

「礼は辞めてくれよ。俺がやりたくてやっているんだからさ」

「……はい。すいません」

すいませんってのもな、と思いながら汗でベツトリとする頬を掻いて階段を登り続けるレオンはフランの体調にも気を配りながら歩調を整えている。そのせいでかなり親方との距離が開いた。

半ばを歩く二人に対して親方とテッドはもう階段を登り終えて街の入口にいる兵士と話を始めている姿が見えた。

「大丈夫か？ 疲れたら休んでもいいんだ」

「いいえ。大丈夫……このくらいでッ」

振り返りフランを待とうとしたレオンを追いぬいて階段を駆けあがるフランの背中を不安げに見送る視線がフランの肩越しに見えたテッドと合った。

テッドは未だにフランが船にいることを快く思っていないらしくレオンから視線を離すとすぐに親方の背中へついて兵士が案内する街の長の館へと踵を返した。

登り切ったフランが肩で息をしながら振り返りレオンの名前を大声で呼ぶと近くにいた全員が場違いな二人を微笑ましい表情で眺めてくる。少しだけ警戒を緩めてくれたのもフランの天性の明るさや

純粹さによるものだと思じてレオンも階段を駆け上る。

「あんまり離れないでくれよ。いきなり走るともたないぜ」

「はあはあ……すいません」

「まあそんなに大きくない街だから見失うってことは無さそうだからゆっくり歩こう」

「……はい」

フランが息を整えるまで待っていたレオンはしばらくやることもないので街を眺めていることにした。

そこら中にロープウェイの紐が垂らされており頭上からは滑車の音がうるさく降り注いでくる。小さなバケツにこんもりと盛られた土や鉱物が不安定に揺れながら穴から穴へ移動していた。

もちろん滑走路に停泊しているシアテイルの頭上にもすでにバケツは通過していて土が少しずつ甲板へ落ちているのが見えた。掃除の番は大変だな、誰だっけ？と考えているとフランはもう大丈夫です、と胸を押さえて答えた。

「じゃあ行こうか」

街はちぐはぐで統一感のない外観だった。建物の大きさもバラバラで足りない部分を補強している板のせいで幅も違い、路地にはみ出している建物もある。

ぎゅうぎゅうに押し寄せられた街の隙間をぬうように続く路地を歩いていると足の裏が痛くなってくる。舗装されていないむき出しの岩肌の所々が尖っていて間違えて踏んでしまうと顔をしかめてしまう。

「こんな場所に住むと大変ですね」

「元々住もうと思って街が出来たんじゃなくて炭坑を掘っている簡

易の宿を作ったのが街の始まりだったんだ」

「少しずつ大きくなって今では立派な街になった。そう思うとちぐはぐな光景も可愛く見えますね」

「可愛く……か？　よくわからないが好きになってくれたら話しかけがあったもんだ」

疲れもあるが地熱も手伝って暑すぎる空気はフランの口数を減らした。

その顔色を確認しながら歩調を緩めて歩みを続けるレオン達がようやく親方の後ろ姿を見つけた。

屈強な兵士に囲まれていてもその存在感は異常なものだった。親方の前で話を聞く司令クラスの兵士も土地の権利所有者である男も決して小柄ではない。

「ようやく来たか。話はついた。お前らは案内人と共に山へ登れ」

「ん？　親方は来ないのか？」

「ああ。テッドとお前に任せる」

「何かあったのか？」

「決定は以上だ。後はこの兵士について行け」

親方が指差した兵士はエコーと名乗り、以後は自分が案内しますと言って敬礼をする。若い兵士で空回りしている空気を全身に漂わせている。

テッドはレオンとフランの名前だけを紹介して山へ登るルートを確認するために話を始めた。親方は土地の所有者と司令と背後に館の中へとそそくさと入っていく。

「まあ水の都市でもそうだったがこういう交渉ごとには向かないから俺らはどっかへ行って待とうか？」

「あ、それでは案内をいたしましょう。立ち話も何ですから宿へ入

り案内人とも合流致しましょう」

「ん？ 案内をしてくれるのはあんたじゃないのか？」

「いいえ。私は伝達役と護衛を兼任しておりますが案内出来るほどの経験はございません」

バカがつくほど正直に実践の浅さを露呈するエコーはサイズが合っていないヘルメットを押さえながら歩き始めた後を三人は追いかける。

ぎこちない歩き方に口数の多さから新人だとわかる。親方の用事つてのがメインでこっちがどうでもいい用事に見えるな、と関心しながら歩くこと五分して宿へ着いた。

宿の入口をくぐると閑散とした室内に乱雑にマットが敷かれているだけの簡易宿だった。荷物が端に積まれてあり、砂ほこりまみれの武器までもが転がっていた。

「到着したばかりですから」

中を見て不用心だと呟いたテッドへそう返すエコーが不機嫌な声色で答える。

「その案内人ってのは何処にいるんだ？」

「ここへ来られると思います。それまでしばらくお待ちください」

エコーは矢継ぎ早に訊ねられる言葉に苛立っていたのを隠しきれずに早口でまくしたてるようにそう言って足早に何処かへ消えてしまった。

「暑さに慣れていないんだろうな……都会の兵士が引っ張りだされたか？」

「ああ。ここは暑い。レオン達も今の内に休んでおけよ」

「お言葉に甘えさせてもらうぜ。これで冷房でもあれば最高なんだから」

「贅沢を言うな。だがこれはある」

テッドはそう言ってワンシヨルダーのバックから小さな青い札を取り出してレオンへ投げてよこした。アイズストーンという微力な冷気を発し続ける石を縫い付けてある札だった。

「へへへ。ありがたい。フランのもあるぜ」

「はい。あの……ありがとうございます」

フランは両手で札を受け取りテッドへ札を言ったがテッドは薄く頭を下げるだけのそっけない対応だった。フランは言葉を詰まらせてすいません、と小声で言った。

「テッドはいつもこうさ。クールを見せるとモテるんだぜ」

冗談っぽく言ってフランを元気づけようとしたがフランは伏せた瞳をあげることも笑顔を見せることも無かった。テッドも背を向けて腕を組んで案内人を待ち始める。

顔を見るのが辛いたって母親とフランは違うんだぜ、と言いたかったが辞めておいた。ミレイに言われた言葉もあって沈黙を選んだレオンは勝手に寝ころんでふて寝をしようと決めた。

居心地の悪い空気だった中、案内人が登場してテッドと話を始める声が聞こえるとレオンの隣に誰かが座った。薄目を開けなくともフランだとわかった。

「……嫌われているのでしょうか？」

「誰にだってあの態度さ」

「船内でもあまり歓迎されてもらえない視線は感じます」

「誰だって人見知りくらいするさ」

レオンは目を閉じたまま受け答えをする。ノアールからの依頼を賛成していない船員もテッドを含めてかなりの数がいる。だが親方の指示通り、フランには事情を話すことも出来ないので無視をするしか出来ないでいる人も多い。

知らない隣人がどれほど怖いのかを想像したことはないがフランを知れば賛成してくれると信じている。今はただ時間が足りなくてぎくしゃくしているだけだろうとスウィニーは言うが本当だろうかと考えてしまう。

親方に拾われなければ多くの人種は見世物にされるか、迫害されるかだった。そういう事実があって居場所を失う恐怖は伝染している。フランの力が暴走すれば、フランを追いかけるエレンに見つかれば、ノアールに引きとってもらえ、おろせばいい、そんな声がレオンにも聞こえてくる。

「あー……暑くて眠れないぜ」

上半身を起こして背筋を伸ばすレオンは横で悲しげな表情を浮かべるフランに同意を求めるが上の空。視線の先には案内人とテッドが地図を手にルートと持っていく道具を確認し合っている。

「これから火山へ何をしに行くのでしょうか？ 兵士の方とは別れてしまったようですが……」

フランはただ疑問を口にしたただけだろうがレオンにとっては難しい質問だった。何と答えればよいのだろうか、と首を鳴らして考える。

フェリアのように精霊を回収する？ あの時フランから声が聞こえたと言って走ってくれたからついていけたが今回は自らそこへ向

かい精霊に会うこととなる。

理由を聞かれて本当の話をするべきなのか。だがそんな話をするには母親だと思っっている人が敵で本当の母親とも会えないって話もしなければならなくなる。どう受け取るか何を感じるかは見当もつかないが真実を話すと何が起こるかわからない。

かと言って嘘をつき続けることも出来ないだろう、とフランの表情を横目に見ながら心に留めておく。

「火山口へ行くんだ。そこで精霊に会って話をすると思う」

「……と思う？」

「話すのはフランだ。神殿のごたごたの後にノアールの人から依頼されて精霊と話してくれて……えっと……説明しにくいぜ。とにかく兵士と共にいると身元がバレるかもしれないしな」

「そう……ですか……」

「エレンにはエレンの話し方もある。発音の仕方それぞれ地方独特のモノもあったりするから会話をしているだけでこの出身ですか？ とかいう話にもなると困るしな」

「はい。困ります」

「そういうことだよ。フランはあんまり気にすることじゃないぜ。魔物もほとんどいないだろうし山に登るだけだ。数は必要ない」

レオンは真実を織り交ぜながら嘘をついた。少しずつ話をしていこう、と心に決めて今はごまかすことを選んだ。

何があるうと守ってやると言ったすぐにこれだ、と自責の念が執拗に浮かんでくる。レオンは自らの未熟さを恨んでグッと歯を食いしばる。

「それで問題ない。レオンも用意出来たならすぐに出発するぞ」

テッドがそう言うのとレオンへ足元にあったリュックを投げてよこ

して案内人と共に火山の入口を封鎖しているバリケードへと歩き始めた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

バリケードの傍らで薪を入れた壺を脇に抱えた女性達が正座して何かを待っていた。ノアル兵士は完全封鎖を実施しているらしくこの地域に住む人の出入りまで制限をしていた。

その前を四人が通るとバリケードを守っていた重火器を持った兵士が敬礼しバリケードの一部を解放した。案内人も敬礼をしていることから兵士の一人だと知った。

「あの方々は？」

「俺達が精霊との会話を終えるまで待っていてくれるんだ。神殿の時のようにパニックにならないようにな」

壺を抱えた女性達の年齢はバラバラで人種も違った。壺の形も色も薪の量も違うが赤色を基調とした布を身体に巻きつけてある衣装だけは同じだった。

密集した一団の先頭にいた老婆がリーダーで兵士に詰め寄って激昂している声も未だに聞こえてくる。

「事情は伏せておいた方がいいだろう？話しても信じられないぜ。ウォーラムの時だって夢やイタズラだって言って中へ入って危険だったからな」

「危険……」

「フランは心配しなくても俺が守ってやるぜ」

「はい……でも話は出来るかもわかりませんしお役に立てるかどう

かも心配です」

「今、あの神殿の時みたいに声は聞こえないのか？ 何かを感じる
とか？」

フランは小さく首を振る。

詳しい話も聞かされていない。精霊を解放すればどうなるとも解放する理由も知らないで全てが親方達の中だけで話は進んでいた。

闇の一族が精霊を回収することが出来るのならずっと前にしているはずだ。だが今になって動きだしたのもエレンの王族から命令されたってのもつじつま合わせに聞こえる。

何が真実で何が起ころうとしているのか、そもそもさらわれたって話も本当なのかも嘘なのかもわからない。執事はどうしてそんなことを知ることが出来たのだろうか、と考えるほどに無口になってしまいうレオンはハッとフランの視線に気づいた。

「フェリアは……フェリアの声も聞こえませんがレオンさんは感じますか？ フェリアの何かを」

「いや今は何も聞こえないな。俺の頭の寝心地はいいらしいぜ」
「ふふふ。そうだと私も嬉しいです」

魔力を吸いこんでいる札をぶら下げたネックレスの紐が首筋に見える。細くて白い首筋に真っ黒のゴムがびったりと吸いついていた。意識と連動しているより自然に放出している魔力に反応して精霊は姿を現すというスウィニーの仮説は正しいと思う。札を持っている時は小さな精霊は姿を現してこない。

精霊の血を引く者と言われていた言葉から思うにノアールの姫と
いうのも疑わしい。そもそも精霊の血とは？ 自然に魔法を発する体
質とも関係があるのだろうか？

まただ、レオンは考え込んでしまいう頭を振って笑顔を見せた。

「俺も嬉しくなるぜ。あーマリスフィームみたいに観光都市だったら美味しいものでも食べられるんだけどな」

「食いしん坊ですね」

「フランだって食べたいだろう？」

「はい。実は期待していました」

「ハハハ。正直なのはいいことだぜ。火山でも自然に取れる食べ物はないのかな？ 聞いてみるか」

話をそらせるレオンは前を歩く案内人に質問をした。

まだ山へ入ったばかりなので遠くに木々が多い茂る部分も見えている。動物の気配もあって果物くらいはありそうだった。

「果物がありますが塩分が含まれておりますので人間が食べるには塩辛すぎますよ」

「そうなのか？ 残念だな」

「観光地ではありませんからね。お連れの方は疲れましたか？ 休息にしましょうか？」

「後どのくらいなんだ？ あんまり休んで遅くなるのもあれだし」

「距離にすると数キロですが山道ですから二時間近くはかかると思えます。我々でも悪い足場を歩くと疲れる。斜面も急こう配で思ったよりも体力は奪われます」

「ううん……フラン疲れたか？」

レオンは振り返りフランへ訊ねるがフランは大丈夫ですよと微笑み返した。

「ではまだ先を行きましょう。ある程度行けば温度が急激にあがりますからその手前で休憩をはさめば大丈夫でしょう。ですがぐれぐれも無理はしないようにしてもらえますか？」

「あ、はい……」

明らかにフランを見て案内人はそう言った。柔らかな物腰とは裏腹に有無を言わせない迫力があつた。

身体を心配しているよりも別の事情があるような口ぶりにレオンは不服だったが事を荒立てる必要もないとフランの横へと下がった。全員が厄介な物として見ているような視線を感じてフランはまた目を伏せて歩き始めた。テッドに冷たくされた時と同じような表情に明るく話しかけるレオンの声も届かない自分の殻へと閉じこもっている。

「迷惑をかけていますよね」

「いやそんなことはないぜ。精霊と話を出来るってのもフランだけなんだからフランの体調を気遣うのは当然だ」

「……私、頑張ります。だからもう少しだけ一緒にいてもらえますか？」

「何を言っているんだよ。俺はずっと一緒にいるぜ」

ネガティブな思考を壊せるほどに明るくふるまおうとしているレオンだけが空回りしている現場の空気にテッドは苛立っていたのがその瞳でわかる。

時折、目が合うと瞳の奥で湛えた感情がこの足元を流れるマグマと同じように真っ赤に燃えあがっている。今になって思えばそれがテッドらしくないと思うべきだった。

「ここで休みましょうか？」

案内人がそう言って岩石を削って作った椅子に座り足元へ荷物をおろした。荷物から飲み水を出して飲んだりしながら休憩する間もテッドは座らないでいた。

レオンとフランも適当な岩石へ座り、道具から水を取り出して一

息入れた。

「火の精霊ってさ、どんな感じなんだろうな？ やっぱり怒れる巨人なのかな？」

「物語のイメージではそう言った巨人がマグマの雨を降らせて街を灰にしたとかいう逸話がありますが火の精霊は深い愛情を持った精霊と言われています」

「深い愛情？」

「人を包みこむ優しさが海ならば人を愛し人を抱き締める強さみたいなのが火なのでしょうか？ 悪い面ばかりが強調されるので観光地にはならないんですよ」

「そうなのか。悪い面？」

「嫉妬・憎悪・憤怒などのネガティブなイメージが物語で定着してしまつて人が寄りつかなくて普段は静かな一帯ですよ」

案内人は調査団の一員で民俗学や宗教学の権威も持っていると自慢げに話を続けた。

「物語はたくさん知っています。ガレリアと巨人の舞台もここですよね？」

「よくご存じですね。そうあれも巨人が街を滅ぼしたというシーンだけが印象的なのですがあれはマグマの噴火を予期して街から避難させるために巨人は街を壊したんですがね」

「そうだったんですか？ 私の知っている話と全然違います」

「脚本家は話を捻じ曲げてよりドラマチックに盛り上げようとばかりしているので事実と違う話も多いんですよ」

「へー。知らなかった」

「ハハハ。皆そうですよ。学者の中でも勘違いしている人もいますから」

「そうなんです。火の精霊と会えばもっとイメージが変わるかも」

しれません。会うのが楽しみになりました」

「そりゃ良かった。何しろ精霊と交信をする時は心の全てが見られてしまうそうですから好意的に接すればそれ以上に愛情を持って接してくれますよ」

案内人は朗らかに笑って物語の話と歴史を織り交ぜて話した。さきほど見せた鋭い瞳も嘘だったかのように柔らかな表情で接している。

ただそれだけにフランが精霊と話すのは慎重に行うべきものなんだろうとレオンに思わせた。命に関わるようなことが起こる可能性もありあの時と同じようにトランスで戦うことになることも覚悟しておこう。

テッドがいるのもトランスと関係あるのだろうか？トランスが暴走して止める役目をテッドが任されたと考えれば自然に納得出来る。いつもテッドはレオンのお守役をしていた。

任務が失敗しそうになってフォローしてくれたのもいつもテッドだ。自分の感情で突っ走るレオンを冷静に止めてくれるのはいつだってテッドだった。

「そろそろ行こう。日が暮れるまでには用事を済ませたい」

テッドが舞台の話で盛り上がる二人へと行って再び、山に登るころとなった。

☆

☆

☆

☆

☆

山の景色がガラリと変わった。足元にあったわずかにあった木の枝も消えて熱気で表面が泥になる足場が傾斜を流れていくのが目に

見える。

尖った岩石の形も丸みを帯びたものとなっており、遠くでは穴が確認できるようになった。その穴の奥には朱色に波打つマグマが衝突し合っていた。

案内人も口数が極端に減り、手袋で汗を拭いながら何度も振り返りフランの顔色を確認していた。

「どのくらい登ったんだ？ 急激に気温があがって別世界だぜ」

レオンは振り返る案内人に叫ぶ。マグマが山の内側を溶かす音や焦がす音、水蒸気があがる音や耳の中に溜まる汗のせいで声が聞こえにくく感じる。

「まだ半分ほどです」

「まだ……半分もあるのかッ？ 思ったよりも辛いぜ」

「この上に行くとは地表の隙間から煙も出るので視界も悪くなります」

「そりゃ大変だぜ。このくらい離れていても大丈夫なのか？ 足音

も聞こえないぜ」

「もうすぐ一本道になりますから大丈夫です。姿が見えなくとも音が聞こえなくとも火山口へ続く道はそこだけ」

案内人も叫んで答えるが体力を消費するだけです、と言って会話を辞めた。

レオン自身も熱気に包まれたせいで全身が重たい。標高の高さも手伝って酸素も薄く体力を奪っていく。

「大丈夫か？」

「……はあはあ……はい。大丈夫です」

「無理をするなよって言っても休むのも無理か」

「ごほごほ……はい。大丈夫です」

「ほら、これも持って首筋を冷やせば少しは楽になるぜ」

テッドにもらったアイスストーンをフランに手渡したがそれさえも受け取れないほどに疲弊していた。レオンは足並みを落として背後からフランの首筋にアイスストーンを当てながら歩いた。

「あの……すいません……」

「俺は好きでやっているんだ。謝る必要なんて無いぜ。どうしても謝りたくなったらありがとうって言うてくれよ。その方が嬉しい」
「……」

こくん、とうなずくフランは言葉を出す力もない。

それからもずいぶんと山を登り続けた気がする。白い煙が足元にまとわりつくようになってな、と思っているとすぐに煙は視界を遮った。

身体に付着する水蒸気の量も煙の量と共に増えて身体を重くする。フランの首筋に当たったアイスストーンも効力を失ってぬるい石になったのが掌の感触で察した。

足元に見える誰かがつけた目印を踏んで移動しなければならぬほどの煙に抱かれて傍らにいるフランの姿も見えなくなりそうだった。

「手を握るぜ。何かあれば握り返してくれ。返事は全て握り返してくれたらいい」

レオンはそう言ってフランの手を握った。湿った手同士でぬるりと滑るがしっかりと握った。

火山口を降りると言うことは水蒸気が流れて出来た狭い道を縁にそって歩いているだけになる。一歩踏み外せば火の海へ落ちることとなる。そう思えばしっかりと握る手に力が入る。

「――ッ」

その景色が一変し、真っ赤に染まった。

煙は頭上にたむろしていて視界は鮮明になっていた。足元の汚い煤けた岩が自然の段差となって火山口へと続いている。大部分がマグマで足を踏み出す度に小さな石が転がって岩肌を滑り落ち、ジュッと音を立ててマグマに消滅する。

螺旋状に続く一本道で段々と火山内部へと下って行っていた。

熱気はからっとしたモノとなって体感温度はグンと下がり、息がしやすくなった。身体も軽くなり意識も鮮明に近づいてくる。

「祭壇が見える」

「はい。あれは……どうしてこんな場所にあるのでしょうか？」

「作っただとしてもどうやって作っただろうな」

ずっと下り続けていると宙に浮かぶブロック群が見えた。正方形に整えられた深紅のブロックと黒のブロックが交互にあってその中央には水の神殿と似た祭壇があった。

「支柱も無い。どうやって浮いているんだ？」

「不思議ですね」

近づいてくるほどにそのシルエットが鮮明になってくる。左右から伸びた支柱に支えられて浮かんでいるように見えると思われるいたブロック群は文字通り浮かんでいた。

マグマと水平に浮かぶ祭壇。側面の壁もまばらにあって元々全部を囲っていたが熱で溶けてしまったように見えたのは側面のブロックの角が丸くなっていったからだ。重力に垂れるように、獣の尾のように滑らかなカーブを描いて伸びたブロックも複数ある。

「声は聞こえるか？」

「いいえ」

「もっと近づいてみるか。聞こえたら教えてくれよ。聞こえなくてもフランのせいでもないから気にするなよ」

「……はい。すいま——あの……ありがとうございます」

「いいんだ。この時に礼を言うのは違うかなって思うぜ。でも何度感謝されても嫌な気持ちにはならないぜ」

レオンは柔和な笑みを浮かべてフランの言葉を受け止める。

案内人とテッドは先にブロック群へ立って祭壇を調べ始めている姿を横目にフランの歩調に合わせて歩いていたレオンもようやく祭壇へと足を乗せた。

その時、ガタガタとブロックが揺れ始めた。

「何があったッ?!」

レオンが戻ろうとするが背後にあった側面のブロックが帰り道を塞ぐように落ちた。

まだ揺れ続けているブロック。レオンは腰に差した剣に手を置いて周囲を見渡して警戒をする。

「みゅー」

頭の横で声が聞こえた。フェリアの声。

レオンが振り返るとフランの首から下げた札が千切れて足元に落ちていたのが見えた。フランは頭を抱えて膝から崩れた。

「フラン何か……何か聞こえたのかッ!!」

「辞めて……辞めてー!!」

フランは叫んだ。声の限り叫ぶ悲痛の声色にレオンの足も止まった。

二つのクーパー

「レオンさん、後ろッ!!」

振り返る前に熱気が背中へ迫ってくる感覚があったが目の前で叫ぶフランに気を取られて反応が遅れた。

「クッ」

レオンは右手を顔の横に当てて熱球をもろに受け止めてしまった。衝撃で身体ごと吹き飛んで前のめりに地面に突っ伏す。

声の主は案内人だった。案内人は簡易に作れる盾（本来はマグマが飛び散った時に身を守る登山用の盾）を構えながら身体を丸めてレオンとフランの方へ近づいてくる。

その背中越しに見えるテッドの身体が燃えている。明るい炎の色が身体の表面を包み込みもがき苦しむシルエットがよれよれと動く度に熱球は乱反射し始めていた。

「何があったッ?!」

「わかりません……私が気付いた時にはあのように炎に抱かれておりました」

「助けないと――」

「ダメです!!」

盾を構えてレオンとフランを守るように身構える案内人を押しつけてテッドの元へ行こうとしたレオンの衣服を引っ張り盾の効力がある範囲に引き戻される。

「あれは……精霊の火。あなた達は精霊を呼びだす為に来たのでし

ようッ?!」

「だとしてもッ。あれは何だ? 水の精霊を呼んだ時はあんな風に苦しんでいなかった」

レオンは案内人の肩辺りで展開する半透明の盾越しにもう一度確認し、自分の記憶と照らし合わすが全く違って見えた。あれはトランスというより肉体を焼き尽くされるほどの勢いと膨大な悪意を感じる。

視線を水平に動かして隣にいるフランを見る。辞めて、と叫び続けている全身の表面に薄い真っ赤なオーラが現れ始めた。

「大丈夫か?」

「辞めて!! お願いだから辞めて!!」

「何を言っているんだ? フランッ!! しっかりしてくれ」

「いやー!!」

錯乱するフランの肩を掴んで落ち着かせようとした手が無かに弾かれる。指先にしびれが残っているがもう一度フランへ触れようとした。

「大丈夫だ。俺が守ってやる。怖がることなんて何もないんだ」

「辞めて……クーパー……私達は二つで……」

「何? 聞こえないぜ」

「辞めて……クーパー……お願いだから」

「クーパー……? 火の精霊の名前か? 頼む。俺からも頼むぜ!」

レオンも共に叫んだ。

だが、フランは怯えて震える。テッドは苦しみもがいている。レオンはただ何も出来ずに手をこまねいている。

「レビー……貴様はなぜ俺を捨てた……」

テッドが漏らした言葉さえも焼き尽くす炎は勢いを増し続けて、いつしか巨大な火柱になっていた。ブロック群ごと揺らすほどの力があり、足元に広がる火の海も呼応するように波を高くしていた。

「火の精霊は双子だという話を聞いている。あれは……片方。嫉妬や憎悪にとりつかれたクーパーか」

「嫉妬や憎悪だってッ」

「彼自身も強い憎悪を持っていたのだろう。それに反応したのか、厄介なことになった。もう片方の精霊が出てきてくれたら良かったんだが」

「もう片方……精霊は二人？　だったらフランが聞いている声はもう片方の声……なのか？」

「おそらくそうだろうね。辞めてっていう言葉もそう受け取れば自然だ」

テッドを包む炎は色を濃くし、深紅に近い赤となる。やがてシルエットも炎に貼りついた影になり、声も聞こえなくなった。

声が聞こえなくなるとフランも次第に落ち着きを取り戻し始める。丸めた背中、必死に足りない酸素を吸うような呼吸。頭にやっていた両手を地面へついたが自分を支える力も残っていなくて頬から倒れる。

レオンはフランを抱き起こしそうと手を伸ばすが触れられない。身体の表面にあった赤いオーラがよりくつきりと見えてそれが阻んでいる。オーラは球体状に膨らみ、フランを包む甲羅になった。

「レオンさん……あれは精霊……でしゅうか？」

案内人の声で振り返ると火柱は火山口の隙間に敷き詰められた白い煙を突き破って消えて、残ったのは全身を真っ赤に変えたテッドの姿だった。水の神殿でトランスした自分の姿とそっくりなテッドがしゅうしゅう、と音を立てて呼吸していた。

魔物のそれに似ている姿に絶句する案内人が盾を片手にレオンの背後へ逃げ隠れた。レオンはテッドから目をそらさずに立ち上がる。テッドは手を掲げると全身の赤い光がそこへ集結してくる。光は長槍となり、軽く横へ薙ぐだけで熱風が襲ってくる。

「テッド……」

「退け」

「テッドじゃないのか……」

「退かないのならはお前も殺すッ！！」

「辞めてくれッ！！ どうしたんだッ」

テッドは低い体勢のまま、地面すれすれを滑空して槍を突き上げる。槍先がレオンの頬をかすめて前髪の一部を焼いた。

「……辞めて」

「クッ」

レオンの背後から二本の炎の角がテッドへと伸びたのを槍で器用に捌きながら後方へ押し戻された。

フランが立ち上がる気配があつて視界の隅に見えていた角がキューっという風船を擦るような音を立ててフランを包む甲羅の中へと戻っていく。

「フラン……？ いやクーパーか？」

「はい。私の名前はクーパー。火の精霊です」

「セイラムの時より話が出来そうだ」

「時間はあまりありません……あのリアムにいるのは私のもう片方。私達は二つで一つ」

「二つで一つ……？」

レオンがそう訊ね返すと返事は来なかった。代わりに全身が真っ赤なオーラで包み込まれていた。あの時と同じだ。

湧き上がる力の奔流に身を委ねていると自然にトランス状態へとなることが出来た。全身を光が包んで、手には赤色の剣がある。

「嫉妬、憎悪を持つリアムの心に強い反応をしたのでしょうか」

「テッドが……」

「レビー。その名前が彼の心を支配している」

「レビー……俺達の母親の名前だ。俺達を捨てた母親の名前……」

頭の中で響く誰かの声にそう答えるとレオンは途端に無力を感じる。自分は守れなかった。自分は幼くて何もしてあげられなかった。テッドは怒っていたんだ、と思うと今までの母親への嘆きが頭に浮かぶ。

深い憎悪、捨てられた憎しみが塊となって心の隅で転がっていたのだろうか。目の前のテッドは怒りに身を委ねている。深い痛みだ。深い憎しみだ。鮮明に見える赤色が心の痛みだと知った。

顔には出さないテッドの内面にくすぶり続けていた火がこんなに大きいなんて思わなかった。

「レビー……母か……」

レオンは少ししかない記憶の糸を手繰り寄せた。

☆

☆

☆

☆

☆

リオールサナと呼ばれる砂漠の手前にある旅商人や旅人が砂漠を超えるために一泊過ごすために作られた街に兄弟はいた。街の大半の人間は旅人相手の商売をしていて母のレビーも例外では無かった。夜の17時から24時まで四公演を繰り返す毎日で昼間も練習に時間を費やしてロクに話した記憶もない。そんな街の子供達の大半は街外れにある教会や孤児院に預けられて母の帰りを待つ日々。迎えが来ない日も少なくはない。

「また来ていたよ」

近くにある施設の研究者である犬族の医者が気絶したテッドを抱きかかえて教会の門扉を叩くのも見慣れた光景になりつつある。

テッドは毎日のように街へ行き、劇場へ足を運んでいる。レオンは呼ばれたことも行こうと思ったこともない。待っている、と言われたのだから待っているのが当然だと同じ街の子供に言われていたからだ。

寂しいか、と聞かれれば複雑な気持ちだった。ここには神父さんもシスターも多くいて同年代の子供もたくさんいた。

「……これはまたご迷惑をかけました」

「いいえ。母親に会いたいのでしょう。お気持ちは察します」

神父が困り果てた表情でテッドを受け取ると犬族の研究者は神父の膝もとにいたレオンへ視線を移した。

「この子もリアム……ということは兄弟ですか？」

「はい。父親は違いますが母親は同じ兄弟です。まるで違った性格をしていますよ」

「優しい目をしている」

「この子は優しい。兄もまた優しいですがこの子は特別施設の子供たちにも人気がありますよ」

「リアムは特別な血を持っている。かつてのレッドと同じようにこの街を守る力がある」

レッドとはこの国境線上にある街が戦乱に巻き込まれた時に孤軍奮闘し戦火を退けた英雄の名前だ。昔話の類で何度も聞かされた。レッドに似ている、というのも大人が良く使う褒める言葉の一つだったことを憶えている。

「それでは私は――」

去ろうとした犬族の研究者の裾を引っ張る小さな手が神父の腕の中から伸びている。

「この子は母を思いすぎている。依存しているという方が近い」

「五歳に満たない子供が母親の傍にいたいと思わない方がおかしい。だが街には荒くれ者や流れモノも少なくはない」

「危険なのも承知しております。学業の一環で教えてもおりますが……まだ若すぎる。学ぶには時間が必要です」

「ええ。我々も出来る限りのお手伝いは致しましょう」

「申し訳ありません。甘えさせていただくしか出来ません。何しろ人手が足りないのです」

教会の中には街中の子供でひしめき合っている。うるさくてドタドタと暴れ回る子供の声がまた背後から聞こえている。

「いいえ。お互い様ですよ。では」

犬族の研究者は小さな手の指を一つずつ離して街の方角へ続くのだらかな斜面へと歩き始めた。その向かう先には灯りがともり始めてここからでも賑わいを感じられた。

☆

☆

☆

☆

☆

「俺はあんまり憶えていないぜ。断片的な表情や仕草やニオイしか憶えていない」

クーパーの声にノイズが入ってもう会話が出来なくなった。ふいに思い出した懐かしい光景にも涙一つこぼす気にはなれない。

「何だっていまさらそんなことで憎しむんだ？ もう過ぎたことだぜ。まあ俺だって色々思うことはある」

レオンは顔を半分だけ振りからせてフランを見る。全身を覆う赤いオーラが波打ってそれ自体が生物みたいだった。

焦点が合っていない瞳孔が開いた瞳の中は互いに見合わせて真ん中にいるレオンは空気みたいだった。精霊同士も強い感情があるのを心の奥で知っている。

憎しみを持ったテッドのクーパーとは違った感情。暖かくて相手のことを深く愛している感情で満たされる心が全身に力を注ぎ続けてくれる。

「母親なんてロクな人間はいないか……」

ふいに過る言葉。フランの母親が見捨てたという話をしていた時にテッドには予兆があった。声を荒げることなんて珍しいと思って

いた。

いまさらっていうのもフランの顔を見たから思い出したのか。フランも同じ境遇なのにさえ怒りを感じているのか。

「スウィニーも神父さんもさ……優しいのはテッドの方だぜ。俺はただ何も考えていなかっただけさ」

レオンはそうこぼして迫りくるテッドの長槍の猛攻を正面から受け止めた。背後にいるフランを守るために戦い続ける。だがテッドも守りたい。それがわがままなのか？何かを選べば何かを捨てなきゃならないのか？

「違うッ！！ 目を覚ましてくれ」

「うるさいッ！！ 退けッ」

「退かないぜ。俺は守るって約束したんだ。たとえこの身をその炎で焦がしてもここを退かないぜ」

レオンは槍を弾き返したが追撃はしなかった。テッドの身体を覆う赤い色がドンドン、と黒ずんで深紅に近い色までなってきた。

「退かないなら全てを壊してやる」

「どうしちまったんだ……テッド……」

「怒りをくええ。俺が味わった苦痛をお前は知れ！！」

「辞めてくれッ」

長槍を掌の中でくると回して先端を足元の黒いブロックへ突き刺した。先端がブロックを突き抜けてからもテッドは全身の力を込めて奥へと押し込み続ける。

「何をしているんだ？ クーパー！！ 教えてくれ」

レオンの声が虚しく響いた。

その時、静寂を破るありったけの魔力を込めた一筋の矢がレオンの背後から槍を突き立てるテッドへと伸びた。

「辞めろ!!」

「ですが……今がチャンスです」

「チャンスだって？ あれは仲間だ」

「私にはそう見えません」

キッパリと言ったのは案内人だった。構えたボーガンをおろして立ち上がりテッドの様子を確認する。

矢はテッドの肩へと突きぬけて背後のブロックに当たって折れた。テッドは顔を苦痛に歪ませて長槍から手を離れた。槍はすうーっと落ちて足元に広がるマグマへと落下する。

「——ッ!!」

槍が火の海へ落ちた途端に複数の火柱があがり、ブロック群の高さも遥かに越えて白い煙を突き破った。

「噴火させる気だったのかッ」

「……どうしてだ？ テッド……辞めてくれよ」

「やはりこれは危険すぎる。レオンさんも手伝ってあれを倒しましょう」

「倒す？ 倒すったって……あれは……あれは……あいつはテッドだ」

悔しさを吐きだすように咆哮し、また赤色の光を掌に集め始めるテッドが獣のそれに似ている。いつものクールな表情は消えて怒り

に身を任せているのが一目でわかる。心で感じる。震えているのは心の中にいるクーパーだ。きつと泣いている。

レオンの頬に暖かな涙が流れた。憑依された身体を使ってクーパーが泣いている。

「どうすりゃいいんだよ」

身体を抱く炎の色も黒ずみながら肥大していくのを見て案内人は慌ててもう一つの矢をボーガンに装填し始めていた。

追憶のテッド

――テッドの回想

教会のお手洗いは外の離れにあった。幼児を寝かせるシートの中
央に折り目を付けておくとき一定の時間で背中がかゆくなり泣き始
める。そのドタバタの最中にトイレへ行くと行って街へいつていた。

方法はいくつもあった。たとえば近くにある森から迷いこんで
きたり坊を畑がある囲いの中へ置いて窓の外を眺めていると幼児が
興味を示してちよつとした騒ぎになる。その騒ぎの中、礼拝堂の
入口から堂々と抜けることが出来た。

「靴を履いてくれば良かった」

大きな車輪付きの馬車が通らないので小石は潰されなくて残
っている。舗装なんてされる費用もなくボランティアで草が整えら
れているだけのあぜ道をひた走るテッド。子供の足でも十分ほどで
街の入口付近へと降りれる。

小高い丘の上にある教会。砂漠の興業都市との距離感が絶妙な
人の心を表している。

入口に掲げられた電飾付きの看板の足元に身を寄せて街の中を
覗くテッドの視線の先には劇場 【マドラーデ】 があった。昼間に
見ると間抜けな外観の分厚い布で覆われて太い木々が支柱の代わり
に使われているだけの劇場に人が吸い込まれる。

昼間に入る人間は劇場の関係者が多いとスウィニーが言っていた。
犬族の研究者は今日も夕方になるとふらつとやってきてテーブルの
隅でミルク割のスコッチを飲むのだろう。

「見えない……か」

テッドは入口からは街の中へ入らずに柵に囲まれた外周にそって歩いた。劇場の数だけでも十以上はある。宿にカジノに武器も材料も砂漠を超えるために必要な道具は何でも揃えることが出来た。柵の内側でわずかな活気があるのはそのせいだ。

大半の人はその一つ前の街で全てを揃えて夜に砂漠を超える前に仮眠をとるために利用するがまれに数日間もうろうしている人もいて、その人は名前が覚えられるほどに入れ替わりが激しい街だった。

円形に広がる街の裏口、砂漠に近い出口の脇に小さな穴があった。テッドがほく前進をしても背中を擦るほどに小さな穴を通り抜けた場所で折り返し今度は柵の内側を来た道に戻った。

「もう日が上がりきったか……」

教会の人が気づいて騒ぎ始める頃だ。最近じゃ諦めて探すこともしていないと思うが、とつかの間の感傷に浸りながら太陽を見上げて先を急いだ。劇場はどれも同じ外観をしているが毎日のように見ている母親がいる劇場だけは一目でわかる。

「……それは……いい値段するが……だが……」

「運搬に費用が……何しろノアールからの代物で……エレンからだと税金が……」

「仕方ないにしろ……ううん」

テッドは声が聞こえて足を止めた。

露店の武器屋と体躯が二回り大きい男の話声。その呼吸に合わせてそつと足音を立てて移動する。見つければ騒ぎになることもある。まるで子供の獣を見つけたみたいに目を丸くしている姿は何度も見た。

代物を手にとって鞘から剣を抜いた時に一気に走り抜ける。店と店の間からこちらを見ようとした横顔が店主の言葉に振り返った。少しだけ走り材料屋の裏にある樽と樽の間にすっぽりと身を挟んで呼吸と胸の鼓動を整える。口を押さえて思いつきり息を吸うとだいぶ楽になる。口元から手を離して空を仰ぎつかの間の休息を得る。

「もう少しで会える」

念のため、左右の人影を確認してから樽から身を剥がした。立ち上がり脇を見ると柵がさっきよりも高く見えた。

テッドは疲れを自覚しながらも劇場へと走った。

数分。劇場裏のテントの隅をしっかりと握って到着の味をかみしめる。時間によって太陽にさらされる部分なのでまだ温かさが残っていた。

耳を当て中から洩れる声を聞いた。舞台を踏む足の音と手拍子が続いている。

「……」

それだけで嬉しかった。テッドは涙を堪えながらその音にただ身を寄せた。

☆

☆

☆

☆

☆

テッドは水平に手を払って案内人が放った一筋の魔法矢の軌道を変える。矢の軌道は弓なりに湾曲し斜め上にあつた真紅と黒のブロックの隙間を抜けて火山の壁へぶつかり二つに折れて火の海へと沈んだ。

「辞めろ!!」

「ですがッさっきの火柱を見たでしょう？」

「――ッ」

「溶岩の雨が街へ降るのは絶対に阻止しないと」

また矢を装填し始めようと屈んだ案内人にテッドが攻撃を仕掛けようと駆けだす。

「辞めてくれ」

「退けろ」

間に入り槍を受け止めるレオンがそう叫んだがテッドは冷静な口調で返した。

「テッドは……テッドに怒りは似合わないぜ。誰かに操られている姿も様になってねえぜ」

「……」

「目を覚ましてくれよ。俺は……俺はッ」

「退けろ」

一瞬のすきをついて剣を弾くテッドが開いたスペースをくぐり抜けて案内人へと槍を一閃させる。反応が遅れた案内人。盾で直撃だけは避けれたが盾は破損し出力が低下する。

仰け反り尻をつく案内人の頭上から槍を縦に構えたテッドが追撃する。

「――ッ」

その槍の側面から炎が流れてくる。手元から槍を奪い去って壁の

奥へとねじ込んだ。勢いを失った炎と共に火の海へ落ちる槍が小さな火柱を起こしたのが足元に見える。

炎を放ったのはフランの肩から生える角のような何か。

「クーパー……お願いだから辞めて……そうじゃないと私は」

「またお前だけで独占しようとするのか？」

「違う。違うの」

「お前は私だと言うが、私はお前ではない。断じて違う！！」

テッドではなく中にいるクーパーが言ったように聞こえる。フランの中にいるクーパーが違うと返せば倍の声で違うと言いつ返した。

言い合いが続くほどレオンのトランスの力が弱まってくる。力が抜けて手に持った剣の輪郭もぼんやりとし始めていた。その代わりにフランの周囲を囲う炎は大きく膨らんでいく。

ひやーっ、とその隙に逃げる案内人にも目を向けずににらみ合う両者が作り出す空気に火の海も押されて静かに波打つ。

「あなたはクーパー……私もクーパー。二人は一つ（パーニャ）二人で一人」

「憎しみ、嫌悪、嫉み。押しつけたのはお前だ」

「違う」

「そしてお前はそれを望んでいる。だが人に愛されることを望んだお前は私と言う姿の無い獣を作り出して全てを押しつけた！！この気持ちかわかるかッ」

「……違う」

「否定は私のモノだ。それさえも奪おうとッ」

テッドは長槍を作り出してフランへと襲いかかる。フランは微動だにしないで周りを覆う炎の外殻が長槍を阻んでいた。

「レオンさん……逃げましょう」

「逃げられるかよ。お前だけで逃げてくれ」

「あなたでは勝てません」

「……勝てない？ 勝つんじゃない。止めるんだよ」

レオンは自らの力の消失を感じながらもフランとテッドの間へ入ろうと駆けだした。案内人も戸惑いながらもリュックの中から使えそうな道具を探る。

壊れた盾を押し込んでボーガンの矢を取り出したが人外の戦いに手が止まる案内人は矢も押し込んでリュックの紐を締めて静かに祭壇から逃げようとしていた。

周りを囲んだ壁の隙間から飛びおりればギリギリ縁へ乗っかれる部分を見つけて飛ぼうとするが、直前で足元を見てしまい全身をすくませてへたり込んでしまった。

「フランでもクーパーでもどっちでもいい。教えてくれ。どうすりゃいいんだ？」

レオンはテッドと外殻の間へ身体をねじ込んで交差させた拳底で双方を押し返して距離を離させた。もろにお腹へ喰らった一撃に表情を歪めるテッドとビクともしないフラン。押した掌の方が軽く爛れてヒリヒリとする。

「目を覚ましてくれよ」

「……」

「俺だって話をしている。自分が自分だってわかる。テッドだって負けるんじゃないやねえぜ」

「クッ……うう……」

テッドは丹田の位置を押さえながら立ち上がり低くうなった。

「それにフランも辞めろ！！ 言いたいことがあるなら話せよ。戦うことを望んでいるわけでもないだろう？」

「戦いを望みません。ですがクーパーの激しい怒りに身を捧げるわけにもいきません。あのような感情に支配されるとこの大地も滅ばされかねません」

「あのような……お前は何かわかってないぜ。怒りも嫉みも大切な感情なんだぜ。それを分離して必要ない感情だって見捨てるなよ！
！」

「見捨てる……？」

「そうだ。あいつが拒んでいるんじゃないかってお前が拒んでいるんだ。恐れているんだ。自分じゃないって受け入れられていないんだ！！
」

レオンの言葉にフランを覆う外殻が反応して蠟が溶けるように姿を崩したが、ややあって元の形状、いやさらに強力で禍々しい姿へと変化していく。角も先端が伸びながらグングンと鋭利になった。

「怖がるなッ」

「……」

「誰だって認めたくない感情はある。そいつのせいで面倒なことになるもんだぜ。だがそれも自分ってことさ」

「……」

「フラン。精霊は人の心に反応しているんだろう？ クーパーの深い愛情が反応した自分の愛情を信じろ。きっと愛することが出来るさ」

怖がり、拒絶するほどに力が沸きあがるのをレオンも感じる。狂いそうな力の奔流に酔い始める自己^{ナルシズム}愛がかすかにくすぶる胸の中、爛れた掌でガバツと自らの胸もとを掴んでおさまれと命じる。

フランは長い間、人と接することが極端に少なかったせいで色々な感情をコントロール出来ずにいた。迷い・戸惑い・困惑する感情がふいに外殻を柔らかくさせるがすぐに拒絶し、形状を保とうとする。

「うるさいッ」

テッドは声を荒げることで拒絶し、フランは黙ることで拒絶していた。対照的な二つの意思に挟まれたレオンはそれでも叫び続けた。テッドもフランも失いたくない。火山が噴火して街が消えるのも困る。だからといって戦いたくない。

「選択するのはいつだって何かを失うものならさ、俺の全てを失わせてくれよ。テッドとフランと街の皆を巻き込まずに俺の身体の中で話合ってくれ」

「黙れ！！」

「俺は壊れたっていい。何かを失うくらいなら自らを失うさ。俺はリアム。精霊を宿せる身体なんだろう？ だったら俺の身体をくれてやる」

「……黙れ」

「テッドの肉体から離れるよ。フランからも離れてくれよ。フェリアだって俺の頭の中が気に入っているんだぜ？ 精霊の住み心地は保証するぜ」

かすかに笑みを浮かべて冗談を言うのが正しいことかもわからない。ただ怒りの矛先をレオンに向けてくれれば、と願った。

フランを守ってやる。遠い昔にかわした約束に思える。時間の経過が足りないってんなら言葉で補おう。何度だって守ると誓おう。

「黙れって言っているんだ！！」

「――ッ」

テッドは低い姿勢から地表すれすれを滑るように走り、手に持った槍突き付けてくる。深く息を吸って剣を捨てたレオンが両手を広げる。

わき腹に強い衝撃があった。視界が歪んで意識が途切れかける。わき腹から燃え広がる炎が全身を黒く染め始めた。全身で怒りを感じる。こんなにも強い怒りを隠していたことを知らなかった。

記憶の中にあるテッドは常に冷静で感情を出さないクールな男だった。まるで別人に触れているみたいにテッドは感情をあらわにしている。

「……ごめんッ……」

レオンは身体をめぐるテッドの感情を得て謝ることしか出来なかった。

「謝るしか出来なくて……こんなに苦しい思いをしていたなんて知らなかった」

「……れ、れお……」

よれよれと力が抜けて自らの肉体も支えられない身体が自然と前に傾いてテッドに寄りかかろうとしたのを抱き締めるテッドの腕。

「本当にごめんッ……テッ……」

痛みすら彼方へ消えた。ただこの胸に伝わる怒りが悲しくて、こんなにも溢れた想いを抱えていたのに甘えていたのを悔んだ。

☆

☆

☆

☆

☆

――テッドの回想。

夕暮れが迫るにつれてまばらだが人が増えてくる街の光景。昼間とは違った種類の賑わいに看板にもライトが灯った。様々な色の電飾に群がる旅人はまるで蛾みたいにくらふらと誘われる。

露出の高い服を着る女を中心に人ゴミが出来始めて、五分も経たない内に流れが出来た。当然、劇場にも人が多く流れ込んできて第一公演が始まった。

「寒いな」

近くにあった布を拾って包まるテッド。日影に長時間いたこともあって体温はずいぶん低下していたので全身を掌で擦る。掌も冷えるとはあ、と息を吐きかけて温もりを持続させて再び擦っても寒さには勝てなかった。

砂漠の気温は昼と夜では雲泥の差があり、ひなたでも日影でも差がある。

「あんまりだな」

布は薄くて耐寒にもならないが手放さなかった。すっぽりと頭にかぶせればフードにもなる。人目をしのぐ役割もあって問題は背丈だった。

小人族に変装しようにも腕や足が細すぎる。獣人族では毛深さが全く違うし、ヌツと付き出た鼻頭もない。

「仕方ない。待つしかないのかな」

テントに背を預けて身体を乗りだし街の様子を眺めた。ざわめき始める街の様子を察知して誰か有名な戦士がいるのだと推測する。有名な戦士の一団の姿が見える位置にまで走る。テントとテントの間だがすぐ前には広い路地があつて近づいてこられると影でも子供だということがバレる危険な位置。

戦士たちを囲む女を不機嫌そうに睨む酔いどれの戦士が多くいた。

「おいッお前ら、ガイザーの傭兵だろう？ 俺とどっちが強いか勝負してくれよ」

「確かにガイザーの傭兵だが争いは辞めておくよ。お金にならない戦いは趣味じゃないんでね」

「何だつて？ だったらお金をくれてやるよ。いくら欲しいんだ？ ほらッ」

一人の男が札を投げつけて挑発するがガイザーの傭兵は呆れた様子で答える。

「飲み過ぎじゃないかな？ 俺らだって長い旅で疲れているんだ」

「何だッその言い方はッ。気に食わないね」

「はぁ……手荒い真似はしたくないんだってば」

「舐めてやがるのかッ」

街でも馴染みの光景だ。毎日誰かが誰かと喧嘩をし始めてそれに野次馬が群がる。

屈強な男に囲まれてもなお、威勢のいい男が殴りかかると周囲を歩いていた男達がやじを飛ばし始めて一気に過熱する。

「今だッ」

テッドはタイミングを合わせて一気に路地へ出て劇場の中へ入った。切符を配る男も喧嘩を苦い顔で見足元のテッドに気づいていない様子だった。

中は丸いテーブルが七つあって椅子だけの席が壁に並んでいる。人の入りはまばらだった。

入口からすぐにはバーカウンターがあつて劇場に背を向ける形で椅子が設置されている。その隅に身を押しこんでいつも角に座るスウィニーに黙っていてくれと目で合図をした。

困った顔のスウィニーはそれでも黙ってスコッチグラスをちびちびと舐めていた。

「間にあつたか」

開演の合図のブザーは鳴っていない。

「また来たのかッ」

太い声が頭上から聞こえてすぐにカウンター越しから手を伸ばしたガタイのいい男にテッドは首筋を掴まれて引き上げられる。

「離せよ」

「レビーの子供だからって何度も許してもらえと思うなよ」

「離せてんだ」

「はぁ……やれやれ」

そう言つて腰辺りに置いてあつた眠り花をテッドの顔に近づけると途端に眠気が来た。

次に目を覚ました時は教会のベッドの上だった。また母親に会えなかった。どうして？なぜ…会いただけなのに…なぜなんだ…。

憶えているのは母親では無い誰かに抱かれた腕の温もりと全身を包むわずかな揺れ。

テッドは起き上がり己の非力さを怨もうとした時、ベッドの隅で座ったまま眠りこけるレオンの姿があった。

「――ッ」

待ってたのか、とレオンに手を伸ばそうとした時、かすかにニオイがした。母親と同じニオイがベッドに乗つけた頭からにおう。

「おい……母が来たのか？」

「ん？ ……うん？ ああ……起きたの？ おは――」

「いいから答えろ！！ 母は？」

のんびりと欠伸をするレオンの肩を何度も揺らして強引に訊ねるテッドの迫力に押されてもなお眠たそうにしているレオンはもう一度眠ろうとした。

「まだいるのかな？ さっき来たよ。何かね、色々……うん……」

「クソッ退け」

テッドはレオンを投げてベッドから飛び降りて入口へと向かったが、人の姿はない。まだ夜で遠くに見える街には人の姿がある。

「どうしてなんだ……」

嘆いた言葉が夜の静寂に吸い込まれていった。

☆

☆

☆

☆

☆

「あの時、母は……テッドに会わなかったんじゃないか。会えなかったんだよ。会うと余計に辛くなるからって」

記憶なのか、今考えていたことなのか、レオンは見えた光景に対してそう答えた。相変わらず力が入らない身体をテッドに預けている。

「俺を少しだけ抱きしめられてすぐに帰ったよ。寂しそうな顔をして震える腕を憶えているんだ」

「……」

「母だって一人でいるのもすごく怖かった。すごく弱くてすごく辛かったんだと思う。だから会いたいつて思ってた。街まで来るテッドに会ってしまおうと帰れなくなりそうだったのかな……ごめん……よくわからないんだ」

「勝手な……勝手なことを言っただけ」

テッドはもたれかかるレオンの身体を剥がした。立って支えられる力もないレオンは勢いよく倒れてしまう。震える腕に力を入れても上半身さえ起こすことも困難だった。

「怨まないでくれよ。母だって同じ気持ちさ。会いたくても会えなかった」

それでも力を入れて立ち上がろうとするレオン。

ぷるぷると震える腕に鞭を打って上半身が起こせると残った力に火がついて立ち上がることが出来た。

「母もテッドも同じ気持ちなのにどうして怨まないとダメなんだ？」

」

「違うッ」

「違うないさ。俺は二人とも知っている。二人とも俺の大切な家族なんだ」

「だったら……だったら何故捨てたッ。お前も捨てられたんだぞッ」

「捨てられた……理由があるんだと思うぜ。母を守れなかったのは俺のせいだ。だから捨てたんじゃない……俺の力が足りなかったんだ」

レオンはほんの三歳で何も出来ずにいた。寂しさを埋めることもお金を稼ぐことも漠然とした恐怖を拭うことも出来ない子供だった。子供が母を守りたいって願うことは罪なことなのか。

「仕方無かったなんて言葉は使いたくないケド……俺達は子供で一人でも出来なかった」

「辞めろ……辞めてくれ」

「認めたくない弱さがあった。愛を憎しみにすり替えても弱さは強くはならないんだぜ。カードの裏が表になるみたいに」

「辞めろッ」

「テッド……お願いだから目を覚ましてくれよ。憎しみなんて悲しいだけだぜ」

強い拒絶にテッドを包む黒ずんだ炎が膨れ上がり続けた。違う、違う、違う、と否定し続ける言葉とテッドの意思がぶつかり合い激しく燃え上がる炎。

その炎はねじれて竜巻になり、熱風を周囲に散らせた。黒ずんだ火の粉も舞い踊る中、テッドは喉が千切れるくらいに叫んだ。

「信じるぜ……テッド」

そう言っ てことの成行きを見守るしか出来なくなったレオンは無意識に刺されたわき腹に手をやった。掌を脈打ち流れるのは黒ずんだ炎ではなく、自らの真っ赤な血だった。

鎮まる怒り

炎の竜巻が頭を大きく振って側面のブロックに衝突を繰り返していたのをただ見守るレオンは膝をついた。案内人が駆け寄り傷口に回復アイテムを擦りつけたがアイテムは身体を覆う光に効果を消されてしまった。

「回復が出来ない……？　痛みはありますか？」

「痛みはないぜ」

「おそらくアドレナリンのせいでしょう……」

「血が出ているのはわかる。掌に脈を感じるぜ」

掌を傷口から離してすぐに血は止まった。ギュッと何かが軋む音が骨に響いてレオンの身体中を駆け巡る痛みが変わった。

歪ませる表情に案内人は別の治療法があります、とリュックの中を探ろうとした斜め上から大げさに頭を振った竜巻がレオンと案内人を薙ぎ払った。

身体ごと吹き飛ばされる二人。案内人のリュックの中身が転がって一部は火の海へと転落してしまった。すぐに残ったアイテムを拾い集めようとした案内人よりも早く竜巻が起こした熱風がアイテムを外へ弾き飛ばした。

「この竜巻がクーパーなのか？」

「いえ。これは意思同士が衝突し合っています」

「意思同士の衝突ッ？！」

「リアム的心思とクーパーの意思が離反し始めています」

「それは……どうなんだ？　いいことなのかッ？！」

レオンが叫ぶ声に抑揚のない声で答えるフラン。クーパーが話し

ていると言った方が正しい。

竜巻は上下にも揺れ始めて激しさを増している。これだけの激しい衝突にも壊れることのないブロックだが、その奥に見える火山の表面が割れて火の海へと崩れる岩石の姿もあった。

「ここも祭壇も危ないのか？」

「いいえ。ここにいれば安心です」

「だったら外はまずいってことなのか？ さっきの火柱も気になる」

「この足元を波打つ火の海はクーパーの心。怒りに身を任せれば噴火してしまう。それだけは止めないといけません」

「何だってッ?!」

その言葉で火の海がとてつもない脅威なモノに思えた。竜巻は勢いを増して長槍の炎とは比べ物にならないほどの力を感じる。あれが落ちれば火柱なんてレベルじゃ済まないことはレオンにも理解出来る。

「止めないとッ。選んでいる時間はありません」

フランを守る炎の外殻が膨らんでいく。二本の長い角が内側へ折れていき互いに巻き付くとそれは一つの大きな角になった。

「もう少し時間をくれ……テッドなら……テッドなら必ず何とかしてくれるぜ」

「待てません。時間は長くない」

「どのくらい？」

「正確には何とも……ですがもうクーパーを止められないのなら無理やりに一つになるしかありません」

「精霊も手荒な真似をするんだな。だったら俺も加勢する……少しだけ俺に時間をくれッ」

レオンは痛みから抜けだす為に声の限りに叫んで突進した。竜巻の根元にテッドがいると信じてグルグルと回る竜巻を避ける低い姿勢で駆け寄った。

風力で身動きが取れなくなりそうだ。全方向からの圧力に耐えながら前へ、テッドがいる竜巻へと足を進めた。頭の上で腕を交差させて一気に通り抜けるつもりだったが、力が足りずに弾き返されてしまった。

後方へ軽く飛ばされるとそのまま足を取られて身体はフランの手前まで投げ出された。

「何度でもやってやるさ」

風に乗ってレオンへ降りかかる火の粉を腕で払って立ち上がりもう一度竜巻へと挑戦するがビクともせず風に押し返されるだけだった。

「辞めなさい。半覚醒しか出来ていない精霊の力では覚醒した精霊の力には対抗出来ません」

「半覚醒？」

「意識が統一されていない。今は精霊の力を使いこなせていない」「使いこなせていないかッ。自慢じゃないが俺は銃だって剣だって演劇だって中途半端だ。上等だぜ」

レオンは自分の胸を拳の底で叩いて奮い立たせる。技術が劣っていても心だけ負けていなければ必ず道は開けると経験が教えてくれる。

うおおおおお、と雄たけびをあげて竜巻へ突っ込むレオンが根元にしがみつく。大きな手に掴まれて投げられようとしているみたいに足が浮いた。

だが上半身にありったけの力を込めてしがみついた。

「テッド!!」

竜巻の音に叫ぶ声も奪われる。

ごうごうと音の洪水を全身に浴びながらも何度もその名前を呼んだ。

「れ……れお……」

「そう俺だ。レオンだ」

「れお……」

「呼べ!! 俺の名を。そして思い出せッ」

竜巻の根元から小さな赤いデッパリが見えた。指だとわかったのはそれが三本出た時だった。それは確実に外へ向かって突き出している。

レオンはそれを掴もうとしたが竜巻の勢いに動けなかった。

「レオンッ……レオン!!」

「テッド」

指先だけだったのが炎に包まれたテッドがよろめきながら竜巻の外へ出てくる。それをレオンが抱きとめて二人は風に吹き飛ばされる。

しっかりと抱いた腕の中にはテッドがいて黒ずんだ炎ではなく、レオンと同じ真っ赤な炎をまとっていた。

「ギャアッアアアアア」

断末魔の叫びが竜巻からして規則的な動きが不規則になり、やが

て根元に吸い込まれるように縮小していった。

黒ずんだ炎はある人と同じくらいのサイズになるとテッドに似た外見に落ち着いた。黒ずんだ炎は頭を抱えてもがき苦しみ、自らの炎を手で千切って宙へばら撒いた。

「テッド……無事か？」

「ああ。弟に助けられるとは情けない」

「そんなこと……俺はいつも助けられていたんだ。お互い様さ」

テッドの背中を支えて立ち上がる二人。レオンの全身はギラギラと輝く光に満たされ始め、痛みは消えた。

「まだです。まだクーパーの怒りを鎮めない」と

「ああ……でもどうやって？」

「精霊の血を引く少女はまだ受け入れることが出来ていません」

「説得する」

「話を聞けるほど安定していません。声は聞こえない」

「フランッ！！聞いてくれッ」

「無駄です。無駄……無駄なんです」

「テッドも助けられた。フランも必ず答えてくれるさ」

レオンはクーパーの制止も聞かずにフランの名を呼んだ。

だがその名を呼べば呼ぶほどに拒絶は深いモノとなったのが外殻の形状が禍々しくなることで理解出来た。角だけだった姿が全身に棘が生えて中にいるはずのフランの姿も見えなくなった。

「あああああああああ」

声にならない悲痛の叫びを続ける黒ずんだ炎が側頭部に手を当てながら立ち上がる。片方の手を伸ばしてよれよれと歩いてくる。

「俺はわかる。その叫びが痛いほど胸に響く」

「……」

「愛されたいと願って街へ降りた俺はきつとこう見えたのかもしれない」

「……テッド？」

「なあレオン……俺は羨ましかったんだ。母そっくりなフランに素直に話しかけられるお前が」

「ああ。これからはテッドも話してやってくれよ」

「その素直さに嫉妬していた。親を恨み弟に嫉妬して……俺は何をやっている」

独白するテッドは自分自身と会話するように話を続けている。黒ずんだ炎は過去の自分と重ねているのがレオンにもわかった。

「一人にはなりたくないよな？愛されたいと願えば、人に求めるばかりになる。それが母を追いつめていた」

「テッド……」

「最期にそれが知れただけでもここへ来た意味があったもんだ。ありがとうなレオン。ありがとう親方」

「何を言っているんだ？ テッドッ！！」

「フランと仲良くしているよ。もしも母親に会えたらごめんと謝っておいてくれないか？」

「それじゃまるで……まるで……」

「一度壊してしまった関係はもう二度と戻らないからクーパーが手を出す前に俺が説得する。ただそれだけのことだ」

テッドはレオンの肩に手を置くとガクン、と力が抜けた。

「何を……？」

「説得は必ず成功させる。兄を信じろ」

「テッ……」

テッドはレオンを片手で持ち上げてフランを覆う外殻へと投げる。外殻の棘が豆に似た形になりクッションの役割をした。レオンはそのクッションに拾われてゆっくりと足元へ下ろされる。

「シーアテイルは必ず任務は達成する」

走り出すテッドは長槍を作り出した。黒ずんだ炎へ向かってそれを両手で握った。

握った長槍に思いを込める。この一撃は激しい憎しみを共有した自分にしか放てないと確信している。この一撃は憎しみではない。この一撃は何よりも深い愛情。

子供の時に欲しかったただ一つの心。孤独を壊してくれる深い愛情。満たされた愛の結晶。本当は自分が欲しかったもの。子供の時に願った、夢見たものをくれてやる。

「精霊の代わりに俺が伝えてやる。俺はお前でお前は俺だ」

長槍の一閃は胸骨の隙間から肩甲骨の中央を抜けて黒ずんだ炎を後方の宙へ散らせた。羽根が生えたように黒ずんだ炎が広がり続ける。

テッドは黒ずんだ炎を片手でグッと抱き寄せると炎はさらに縮小してあの時の自分の大きさになった。抱き寄せる手を巻き込んで抱きしめる形になった。

「……ありがとう」

そう聞こえた気がした。

黒ずんだ炎はさらなる縮小の後に膨大なエネルギーに発光し始めた。腕の中で膨れ上がる炎にテッドも満たされた気分になる。

脳裏には母親の姿が蘇った。別れの時、こうやって抱きしめてくれると言ったのに意地を張って断った。罵った。捨てるのかッと叫んだ。

本当は、本当はこうしてもらいたかった。

そして、一気に膨らむ黒ずんだ炎はテッドの腕の中で爆発した。

☆

☆

☆

☆

☆

黒ずんだ炎とテッドは宙に霧散している。舞いながら黒ずんだ炎に触れようと手を伸ばす赤い炎が重なった。

フランを覆う外殻が緩やかに解けていき、ドサッと支えを失ったフランを抱きとめるレオンの視線は霧散する炎周辺にさ迷っている。

「テッドはどうなったんだッ……クーパー!! いるんだろう?」

叫ぶが返事はない。ひらひら舞う火の粉が酸素を消費して燃え尽きる。数は減り続ける度にフランの表情も和らいでくる。

腕の中でつかえるような苦しみを小さな喉がこくと飲み込んでいるフラン。レオンの身体を覆っていた炎も頭上へひねり出されて大きな炎の塊が赤いドレスを着た女性になったのもつかの間、すぐに消滅した。

「おいッテッドは? テッドはどうなったんだ?」

「くーくー」

消滅したはずの炎の塊から一部が飛びだしてフェリアに似た小さな妖精になる。黒ずんだ炎と赤いテッドの炎が重なった炎から同じような赤いドレスを着た妖精が出現して互いに惹かれあうように両手を伸ばした。

手を握り合って再会を喜ぶ妖精に言葉を失うレオン。

「くーくー」

「みゅーみゅー」

「くー」

頭の中にいるフェリアがクーパーを呼ぶのがわかった。声に導かれたクーパーが手を結びあってレオンの頭の中へと消えた。

響く再会を喜ぶ声の中にまぎれて聞こえたのは「ありがとう」というテッドの声。テッドは犠牲になった。そう理解すると自然と涙がこぼれる。

「どうしてだよ……他に方法はあった……方法はあっただろうがッ」

レオンは力の限りに叫ぶ声に案内人も声をかけるタイミングを失ってレオンの肩に手を伸ばした中腰の状態で立ち止まっている。

ややあって案内人の手が肩に触れた。

「……帰りましょう」

「……」

「火の精霊を回収し終わりました。テッドさんは街にいる全ての命を助けた。我々も助けられた」

「フランをうまく説得出来れば……テッドは助かったのかな？ 俺

が代わることは出来なかったのかな？」

「……」

案内人はあえて何も言わずに時間を与えた。何もかもを受け入れるには幼すぎるレオンの姿に自然と顔色も強張る。

くーくー、と話しかけてくるクーパーもみゅーみゅー、と答えるフェリアも腕の中で眠るフランも手放したくなった。だが、実際は強く抱きよせてフランの目覚めを望んでいた。

心と心が離れるレオンの涙はいつしか止まった。

「戻りましょう」

驚くほど素直に言えたレオン自身に違和感を感じながらもフランを抱きかかえて立ち上がる。

トランスしていないのに心の中に別の自分がいる。それが悲しいほど淡泊に事実を受け入れる。胸にあった乱雑に散らばったテッドとの思い出をラベル付きの箱へ入れたりしてさ。

☆

☆

☆

☆

☆

街には落石やマグマの侵攻を防ぐのに使われる移動式の盾がずらりと並んでいる。その足元には兵士と共に親方の姿もあった。

親方は足りない一人に対しての言葉もなく、すぐに移動するとシアテイルへと歩き始めた。ノアールの兵士とは打ち合わせを終わったらしく滑走路にあったシアテイルも補給を終えていた。

あまりにも連携と手際が慣れ過ぎていて妙な気分になった。

「フランを医務室へ運んだ後に話があるぜ」

「ブリッジで待とう。出発してから時間を取ろう」

「ああ……」

ブリッジと医務室へ別れる道でレオンは親方にそう言って別れた。医務室へ運ぶとスウィニーがいてベッドにフランを寝かせるとすぐに身体の具合を見始めた。

「札が壊れたか……一体何があった？」

「精霊が現れてフランを守った。もう片方の精霊はテッドにくっついてこの火山を噴火させようとした。俺は……何も出来なかったぜ」

「テッドはどうなった？ 無事……なのか？」

「さあ……ただ最期だと言って火の精霊と共に姿を消したよ」

ありのままを伝えたつもりだがレオン自身もよくわかっていない。あの火山の暑さばかりが思い出されてすっぱりと抜けた記憶はまるで夢だったみたいだ。

「テッドは憎しみを司る火の精霊に反応したって言っていた。そんなことを考えもししていなかった」

「レビーがいなくなった時には三歳だ。テッドだって五歳。考えられる年齢じゃない」

「そうかな……テッドに触れた時に色々と思い出したことがあった。街へ行ったテッドをスウィニーが連れて帰った後に母親が少しだけ様子を見に来た時に俺はテッドを起こさなかった。俺だって……会いたかったんだ」

「悪いことじゃない」

「甘えていたんだ。俺は離れたくないって思ったから……ギュッと抱きしめ返したんだ」

あの温もりを憶えている。守りたいと思いつながらも甘えていた。会いに来てくれた嬉しさで何も考えられなかった。その愛に包まれていたい、と願ったのも離れたくないと願ったのも鮮明に憶えているのにテッドには知らないふりをしていた。

そんなレオンはまたフランが現れた時もテッドの気持ちなんて考えもせずにフランの傍にいた。

「無理もない。三歳の子供だ」

フランの腹にペタリとチューブに繋がった蝶の形をした吸盤を左右に置いて装置を起動させる。

「テッドは二人を守った。いや街をも守った。それに感謝するべきだと思う」

「綺麗事さ」

「それが必要なんだ。今は特にそれが大切だ」

「心に踏ん切りをつけるためかッ！！ 仕方ないって思うためにかッ」

「違う。テッドの思いを無駄にしないためだ」

スウィニーは淡々と作業を続けながらつとめて冷静な口調で声を荒げるレオンへ言った。

「親方はこうなることを知っていたのか？」

「さあ……我々には何も言ってくれない」

「ノアールの兵士との関係もそうだ。親方は何を知っているんだ？」

「あいつは元々ノアールの兵士だ。知っている話はそれだけで昔の話はしない。ここにいる誰も昔話はしない」

シーアテイルの船員の過去の話はタブーとされているのが暗黙の了解だった。詮索はしない。それがルールの一つ。

「……フランの容態はどうなんだ？」

「問題ない。今は安定しているように見える」

「そうか。フランが怒りを受け入れることが出来なかったからテッドは犠牲になったって思われなかな？」

「やっぱりか、と風当たりが強くなる人間も少なくはない。黙っておく方が無難だ」

「言えはどうなると思う？」

「フランを降ろせとどうにかしようとする運動が起こるかもしれない。この子自身も自分を責めて魔力を暴発させる可能性もある」

「何もかもが壊れるかもしれないのに俺はまだ一緒にいたいと願っている。いないとダメな気もしている。それが自分の意思なのかもわからなくなっているくらいに頭の中にはいくつもの意思があるのも感じる」

「自分の意思が離反しているのか……？」

「ああ精霊が頭に増える度に心と心が離れていくぜ」

それを聞いて表情をくもらせるスウィニーは何も言わずに作業へ戻った。毛深い顔で見えにくいと言われている犬族の表情でも同情しているのがわかる。

「それぞれ父親に似ている。テッドの父は強引に劇場に通い続けて毎晩レビーに愛を伝えた。レオンの父はテッドの父が亡くなった後も献身的に支えてレビーに愛を与えた」

「だが両方、母親の元を去った」

「戦乱の命は長くない。レオンの父も戦争へ徴収されて帰らぬ人となった。あの街は国境沿いにあり砂漠も近い。人が死ぬのも珍しいことじゃない」

「スウィニーが父親だったら良かったぜ」

「長生しているからか？」

「それもある……そうなればテッドと母親と四人で暮らせたのかな？」

レオンの言葉に返事をしなかったスウィニーは出港の合図を聞いて医務室から出て行くように言った。

船内の亀裂

扉を閉めたレオン。揺れる船内に、出港の合図の鐘の音色が響いている通路に人の姿は無かった。

揺れがおさまるのを待たずに左右の壁に八つ当たり気味にぶつかりながら歩くレオン。足元をすくわれて倒れるようなヘマも普段なら絶対にしないが今は冷たい廊下が頬に触れている。

立ち上がりブリッジへ向かおうとした間にあったプレイルームに多くの船員が見えた。レオンを見つけると一人が手を引いて階段の中腹辺りに連れてくる。プレイルームにいた全員が静かに視線を集中させた。

「テッドが乗船していないのはどういふことなのか説明してくれ」

先頭にいた真剣な眼差しของロニーが腕を組んで威圧的な態度でレオンへ詰め寄った。舞台の大工をしているロニーの両腕から背中にかけて刺青が入っている。

後ろに視線を巡らせると同意するようにうなづく船員達で溢れていた。

「説明も何も俺もわかっていないんだぜ？」

「何があった？」

「テッドは火山の噴火を止めた。俺達を守ってくれた。ただそれだけだ」

「あの子……あの女が関係しているんだろう？ 魔力を放出するとか？ それに巻き込まれて死んだんじゃないのか？」

「そうじゃない」

「レオン……そうだとすればこっちを見て言ってくれよ」

レオンは無意識に視線を外していたのにロニーの指摘で気付いた
が言い訳することも真剣に向き合うこともせずにとだうつむきがち
に首を左右に振った。自分だってわかっていないのに説明するも何
もないだろうって曖昧に受け答えをしてブリッジへ向かおうと階段
を登る背中に声をかけるロニー。

「俺の居場所はここしか無いんだ。他の皆も不安を感じている。お
願いだから本当のことを言ってくれ」

「本当のこと？ それなら俺が聞きたいくらいだぜ。一体俺はどう
すりゃ良かったんだ……これからもどうすればいいと思う？」

足を止めたが振り返らずに言い返すレオン。わなわなと震える小
さな背中にロニーの表情も曇った。

「親方は何も話そうとしない。あの子が誰なのかも……手探りで情
報を集めてもただ不安定にさせるとこの船が吹っ飛ぶくらいの力が
あるってことくらいしか手に入られない」

「精霊を集める理由は今から聞いてくるつもりだ。テッドの死につ
いても話すつもりだ」

「だったら待っていていいか？ ……ブリッジから戻ってくるお前
を」

「考える時間が欲しい。そして何より少しくらいテッドを悼む時間
をくれてもいいだろうか？」

テッドの名前を聞くなりロニーの気迫が緩み、その背後にいる全
員の緊張も緩和されるのを感じた。

レオンは返事も待たずに階段を登ってブリッジへ向かい始めた。
テッドはあの全員と対峙して何を話していたのだろうか。何と言っ
たのだろうか。

「テッド」

名前を呼ぶとまだここにいるような気がする。テッド、とその名前を口内で噛み締める。

ブリッジへ向かう通路に人気は無く、冷たい壁に感傷は吸い込まれていく。上部や下部に複数ある小さな穴からは空気が流れてあり、頭を冷やすのに役立った。

船は安定し始めて航路に乗ったと判断してから扉をノックして中へと入った。

親方の前にはミレイが先にいてレオンと入れ替わりに外へと出て行った。

「親方……もう黙っているのも限界だぜ？　ロニー達にも」

「わかってている。フランと呼ばれる子供だがあれはノアールの姫君だ。ノアールの兵士だった時に仕えた風の谷にある城があの子の生まれだと聞いたのは偶然だ。赤ん坊はどれも同じに見える」

「あの執事もどうしてそんなことがわかったんだ？　そんな秘密が漏れるとは思えない」

「執事は王族の關係図が頭の中に描ける。どうしても合致しないフランを疑問に思っで出生を追った」

「どうして？」

「城の全てを知るのが仕事だからだ。それに国と同じで執事も一筋縄ではない。いくつかの派閥やスパイもいて情報を集めるのは難しくはないだろう」

「それが城から抜け出してノアールへ行っただ理由とも繋がるのか？」

「エレンの国は闇の一族と手を組んでから何もかもが変わった。表面的には気付かないことがあっても内情は悲惨なようだ」

「だから逃げたのか？」

「そうだ。あの子を連れて戻ればノアールで雇ってもらえると思っ

て依頼をした」

「それは――」

「愛情からと思ったのか？ それならばお姫様を人に託したりはしない」

執事の顔は思い出せないが、柔和な顔をしていたと思う。犬族だから表情が見えにくいのが本気で心配しているように見えたのもフランがいなくなるとノアールとの交渉に響くからと思えば悲しくなった。道具として扱われている。

「まるで道具だ」

「否定はしない。だが価値のある道具だ。エレンとノアールが戦争に入ってもあの子がいれば戦争に巻き込まれることはない。いざとなれば人質に出来る」

「見損なっただぜ。テッドも道具だと思っていたのか？ 火の精霊のことも知っていたんだろう？」

「知っていた。だからあの街を守るために防壁を張っていた。万が一のことがあれば逃げる用意もしていた」

「俺らを捨てて……か？」

「そうだ。俺は船を守る。俺の船だ」

キッパリと言い切る親方は片手でグイッとワイン瓶を傾けた。甘ったるい酒の匂いがしてレオンは目を細める。

「その言葉をロニーへ言ってやれよ。喜ぶぜ」

皮肉を込めた台詞に親方は曖昧にうなずいた。テッドが見捨てられた気がして怒りがこみ上げてくる。

「船のことを決めるのは俺だ」

「そうだな。事情を話してフランへ本当のことを言われたら大変だ。この船も爆発しちまうかもしれないぜ」

「もう少しだ。どうせ風と土の精霊を回収すれば終わる」

「終わる？ フランを見捨てるかッ」

「精霊の力を全て手に入れた人間はその全てを解放し、約束の地へと導く道を開く。そうやってしまえば闇でも手が出せない」

「闇は諦めてフランを追いまわすこともなくなるってか？ それならノアールが昔に行っているんじゃないか？ 大切な人間ならさらわれたら慌てるだろう？」

「ノアールは精霊を失うこととなる。封印された土地に精霊が戻るまでは長い時間がかかる。闇さえ来なければあの子の身柄も突っぱねただろう」

「闇に壊されるよりはマシだっけいまさら躍起になったのか。一体誰と戦っているんだよ……誰から守ればいいんだ……全然わからねえぜ」

混乱する頭を振ってレオンはそう嘆いた。

「時間を稼げば世界は元通りになる。精霊は失っても力は大地に残り続ける」

「それがこう着は続く……全て元通り？ テッドは犠牲になって時間を稼いだって褒めてやるのか？ 教科書にでも乗せてやればそれでいいッて言うのかッ」

「選んだのはテッド自身だ」

「――ッ」

「お前もそれを知っている。考える時間はまだある。次の目的地まですでにぶん時間がある」

「フランにつく嘘を考えろって言うのか？」

「子供じゃないんだ。それは自分で考えろッ。話は終わりだ。さあ出て行け」

親方は空になった瓶を振ってレオンを下がらせる。

まだ言いたいことはあったが、言葉を引っ込めてブリッジから通路へ出ていくレオン。言いようのない喪失感が感情を喰い散らかしている。

急いで扉を出るとすぐ脇に先に出たはずのミレイがいた。

「話……あるのよ」

「ああ」

ミレイはそれだけ言って船室へ歩き始めた背中をついて歩く。

☆

☆

☆

☆

☆

——ミレイの部屋

ミレイは化粧台の鏡に向かってメイクをなおしている後ろ姿を入口の扉に背中を預けながらただ眺めていた。

「……何か話があるんだろう？」

「ええ。話して」

抑揚のない声でそうとだけ言ったミレイに困るレオンは少しだけ間を置いて扉から背中を離れた。

「動かないで」

「……」

「そこで話して」

ミレイは言い終えるとまたメイクを続けた。舞台用のメイクと違ってかなり薄いメイクだが念入りに下地を作らないと肌に悪いと言って長時間メイクをしている時は考え事をしている時だと知っている。

丸い頬に大きな瞳。長い睫毛に愛くるしい低い鼻。大きな耳が嫌でいつも髪の毛で隠している。メイクをしている時だけはタオル生地へのアバンドを乗せてある大きな耳が見えた。その地域特有の先端が尖っている耳の形を隠したいだけだろう。

「テッドが死んだ……たぶん」

「知っている」

冷たく言い放ったミレイに困り顔のレオンは頭を掻いて慣れない時間に戸惑った。女の人の冷たい怒りは言葉だけを失わせる。

「何て言えばいいんだ??」

「私が納得出来るように話をしてくれたらいいのよ」

どうして俺が、とレオンは思ったが口にはしなかった。

テッドは死んだ。

あつさりと言えた自分にも驚いたが悲しみが薄いのに驚いた。希薄な関係じゃなかったはずなのにテッドの顔も思い出せなくなりそう。

「悲しみは後から来るものよ。今の内に全部聞いておきたいのよ」
「……」

無言でいるレオンに続けてミレイはそう言った。

「案内人に連れられて山へ登ったんだ。火の精霊の祭壇へ行くために歩いたがこの街にいるよりもずっと暑かった。白い煙に視界を塞がれると蒸されている気分になった」

「……」

「俺はずっとフランを気にかけて火山口へ向かった。テッドと案内人は先へ行って祭壇にも先へついた。少し遅れて祭壇へ足を踏み入れると途端にフランが苦しみだした」

「……あんだ、バカね」

「なッ何ッ?! 何だよ、その感想はッ」

ミレイの冷たい態度にそう言ったがミレイはふっと弱く笑みを見せてバカよ、ともう一度付け加えた。船で言う姉のような存在でテッドとは深い仲だった。詳しくは聞いたことはないがそうだと全員が知っている。

「それからいきなりテッドも苦しみ出してフランへ攻撃を仕掛けてきたから俺は止めたんだよ。そしたらフランも反撃しちゃってそっちも止めたんだ」

「……」

「あ、フランに殺されたってことじゃないんだ」

「つ・づ・き」

「ああ……それからテッドと剣をぶつける度に昔の記憶が蘇ったというよりテッドのが見えた。憎しみを持っていたことは少しは感じて痛ぜ? でも……あんなにも辛いと思っていたなんて」

「テッドは自分の愛情をうまく表現出来ないの。あんたみたいに素直になれなかった。ただそれだけ。ただそれが憎しみとすり替えられただけ」

「……フランのことをあの子って呼ぶんだぜ? 女好きのテッドが。やっぱりそこで気づくべきだった」

「気づいてどうしたの?」

「どうしたのって言われても困るが、火山へ行くのを反対したら助かったかもしれないぜ？」

「無理でしょうね。親方が行けというならテッドは行った」

「ああ。親方はこの船の、テッドにとっても父親みたいなもんだからな。この船は家族だって教えられた」

船へ乗せてもらった日のことも憶えている。テッドの手に引かれて夜の森を走っていた。すごく寒くて凍えてしまいそうになったがテッドの悲しそうな横顔を見てると何も言えなかった。

「親方と出会わなければ……テッドは死ななかったのかな？」

「話が脱線しているわ。話を戻して」

「……」

ミレイはマイペースにメイクをこなしながらレオンへそう言った。

「それからテッドを助けようと自分に精霊を憑依させようと思って精霊を呼んだが俺には来なかった。それでもテッドには言葉が届いたんだと思う。俺のことをレオンって呼んだんだ」

「自分なら何とか出来るって思ったの？」

「わからないけど何とかしなきゃって思った。自分を取り戻したテッドと精霊が離れる時にすごい竜巻になって暴れたがテッドは精霊から離れることが出来た。だがテッドはまた精霊へ向かっていった」

「そうしなければならなかった？」

「フランが精霊を受け入れることが出来れば……あるいは必要なかったかもしれない」

そう言い終わる前に目を細めて足元を見た。熱で溶けた岩石の一部が靴の先端にあってそれがどうしようもなく気になった。

「テッドがそうしたから精霊は無事だった。そう思いたい……そうじゃないとあの子、フランに強く当たってしまいそうだわ」

「精霊が無事だったのはテッドのおかげだ」

「やっぱりあんたはバカよ。精霊がどうしても必要かをそれが無ければどうなるのかって話をするもんよ」

「ごめん……」

レオンは謝ると少し楽になれる。

「エレンの国が精霊を集めると破壊神つてのになるらしい。それに乗じて闇の一族も破壊された世界で闇の領土を広げることが出来るらしい」

「神話の世界ね」

「ノアールは精霊を集めて約束の地へ返すつもりらしい。そうすると誰も手が出せないところへ精霊を封印出来るって大地には精霊の加護が残るから大丈夫だって」

「そんなことをどうして今までやらなかったのでしょうか？」

フランがさらわれた時に取り返そうともしなかった理由もわからない。ただ精霊っていうのを封印すればどうなるってのも精霊ってのが何なのかさえも不明だ。

「精霊と対話するには精霊の血を引くものじゃないとダメだからフランしか話せないのかも？ 俺もフランがいれば声は聞こえるがノアールにはそれがいなかった。フランも赤ん坊だったからとか……かな？」

「テッドには声は聞こえたのかしら？」

「さあ……でも精霊に何か言っていたが話せているというよりは一方的に言っていた気がする。自分に言い聞かすように話していた」
「……もういいわ」

「え？」

「メイクで忙しいの。早く帰って」

「はい？」

「話は終わり。ここは女性の寝室よ。すぐに出て行って」

「……」

急かされて外の通路へ出たレオン。

女ってのはよくわからないと思いながらフランの様子を見に行こうとした足が止まった。ただ何もかもが億劫で一人になりたいと思った。

踵を返して自分の船室へと向かうレオンが眠ったのはそれから五分も経たない時だった。

☆

☆

☆

☆

☆

ちよつとした騒ぎで目を覚ました。言い争う声。喧嘩だろうか、とレオンは起き上がり船室から飛び出る。

通路には人だかりが出来ていてその中心には仲裁をするロニーの姿があった。

「あいつは何だよッ!!　ちくしょうッ」

「何かあったのか？」

レオンが人だかりをかきわけてロニーへ訊ねるとロニーは困った顔で医務室の扉へと視線を送った。

「フランが関係あるのか？」

「ああ。あの子がテッドは何処に居るのかって言ってきたんだよ。」

あいつが殺したんだろうがッ」

「……違う」

「じゃあテッドは何でいないんだよ？ 教えてくれよ」

怒鳴っているのは照明担当のヤーガス。常に長袖を着ているのは蛇の鱗に似た皮膚があつて部分的に壊死した細胞が黒ずんで割れている姿を見られたくないからだった。

「親方に聞いても何も答えてくれない。ミレイは部屋にこもりっぱなしだ」

「だから医務室へ聞きに行ったのか？」

「ああ。スウィニーが少し離れた時だからほとんど会話らしい会話もしてねえ。目を覚ましたから何があつたか聞いたんだ。だったらそう訊ね返してきた」

「落ち着いてくれ」

「お前は落ち着いていられるのは何でも知っているからだ。俺らは何も聞かされてない。不安だ。また……また居場所を失うかと思うと怖いんだ」

レオンよりも十以上も歳が離れたヤーガスがそう言うのと胸にズシンと響く。表情には隠すことのない不安があつて周りを囲む多くは同じ顔をしていた。

「……だったら話そう。だが俺だつてわからないことだらけでうまく伝えられないかもしれないぜ？」

「知らないよりは随分とマシさ」

レオンはミレイと話した時よりも慎重に言葉を選んで話をした。精霊のこと。エレンとノアールのこと。フランの心が不安定だと危ないってこと。

ここからは推測だが精霊と深く共鳴し合っている間は記憶がないのでテッドがどうなったのかも知らないこと。そして真実を言うべきかを悩んでいること。それにはリスクを背負うことになり、最悪船をふっ飛ばす力は充分にあり、コントロール出来ないというのも正直に話した。

その結果、泣きだす船員もいれば震える船員もいた。全員に共通しているのは安心したって表情の人間は誰もいないってこと。

不安が駆け巡り、興奮状態にあったざわめきの質が徐々に変化していくのが目に見えて感じる。その空気に話すのは早過ぎたか、とも感じたが話を続けた。

親方は船員のことを思って黙っていたことを話してそのことで船を降りたいと思えば降りてもいいと言う話もした。選択の余地を確かめる沈黙に船員達は互いの顔を見合わせる。

「それは一体どういうことなんだ？」

「俺が聞きたいくらいだぜ」

「……話が大きすぎる。俺はてっきりエレンのお姫様のわがままに付き合っているのかと思っていた」

「エレンのお姫様じゃなく、ノアールのお姫様でそのことは本人は知らない」

「家族だっと思っていたのが実は敵で本当の家族は見捨てた？ そんな話を知ったらショックを受ける。不安定になれば船を壊してしまいかもしれない。だから親方は言わなかったっていうことか？」

「そうだ。多くの人が知ればそれだけフランの耳に届く可能性がある。言わなくとも態度に出れば不安にさせる」

「そんな……だったら……」

「知らなかった方が良かったって言うのか？ そう思うなら忘れてくれ。だがフランには何も言わないで普通に接して欲しいんだ。約束してくれ」

レオンはそう言って周りの人を見渡したが全員が視線を外して答えをはぐらかした。

「ここでそんな話をしているのを聞かれるのも困るだろう？騒ぎを不安になっても困る。だから今日は各自部屋に戻って考えよう」

沈黙の中心でロニーはそう提案した。同意する声もそれ以上追及する声も無くて全ては足音に踏みつぶされていく。

ロニーとレオンだけが残されて不気味な静けさだけが通路にあった。

「聞かれていないか？」

「医務室は防音になっていいるから大丈夫だと思う。どれだけ聞こえたかも知りたいから俺がそれとなく医務室へ入るぜ」

「ああ……レオン。すまない」

「気にしてないぜ。いつもはテッドがこうやってたんだなって思うと色々と考えることがある」

「テッドのことも責めてすまない。本当は兄弟のレオンが一番悲しいはずなのに、皆も余裕が無いんだ」

「ああ。ロニーも皆のことを頼む。今日は医務室で眠ることにするぜ」

「見張りもつけようって言っても清掃の当番を作って通路を巡回するくらいだが」

「ありがとう」

ロニーはうなずいて船室の方とは反対の方向へ歩き始めた。通路には静けさが戻り、夜の闇がやれやれというように空気を冷やし始める。

医務室の扉は近くにあって扉をノックするのにも緊張する。もしも、と嫌な考えが頭に流れたが頭の中で冷静にごまかすイメージを

繰り返して医務室をノックした。

扉の奥からスウィニーの声がして扉を開くとすぐに脇にあるベッドに視線を送る。ちよこんと布団から飛び出た眠ったフランの頭が見えて胸をなでおろした。

「全員が不安に感じている。もちろんこの子も」

「目を離したのが悪かった。今日は俺もここで眠るぜ」

「ヤーガスも悪いやつじゃない、と言っておいた。幸か不幸か、疲労のせいですぐに眠ってしまったよ」

「良かったぜ」

「だが何処までもごまかせるもんでもあるまい。何処かで話さないとダメだ」

「わかっているさ。だが話をして身体がどうなるってのもわからない……自然に魔法を発する体質さえ抑えられたらいいんだが」

「あの札だけでなくポケットに入れておいた札も全て破れてしまっている」

デスクの上には破れた札が並んであってそれぞれ違う色のパッケージに詰められて解析結果のグラフがラベルに貼り付けられている。

「解析でも強度不足と出るだけで解決策は見えなかったよ。街でいくつかの書籍も買ってみたが参考になりそうな話はない」

「そうか。祭壇に入った途端に共鳴したんだ。共鳴ってのは魔力を増幅させるとかも関係ないのか？」

「因果関係は難しい。何しろ共鳴現象さえも滅多に見れるもんじゃない」

「詳しくは知らないんだが何かあった時に共鳴して俺の方から魔力を抑えるって出来ないのかな？」

「何とも言えん……だが共鳴とは同じ魔力波が同調しているのと魔力そのものを共有するのでは意味が変わってくる」

「難しい話はさっぱりだ」

お手上げの格好をするレオンは視線をフランへ送って寝顔を覗き見る。

「まあ俺もあんまり寝てないから寝かせてもらうぜ」

「勝手にしろ。私は作業をしている」

「ああおやすみ」

「おやすみ、レオン」

レオンはゆったりと大股でベッドまで近づき、隣で眠るフランを起こさないようにゆっくりと寝ころぶ。横着して足でかかを蹴ってブーツを脱ぐとスウィニーが顔をしかめるのが視界の隅に見えた。

ウェルスタンへ

「くーくー」

「みゅー」

「くーくーくくくッ」

「みゅー？ みゅみゅー」

言い争うクーパーの声が眼前で迫ってくる。時々、鼻頭を蹴ってくるのでヒリヒリしているがまだ半分は夢の中になりたいと願うレオンを起こしたのはフランがベッドから押して床へ落としたからだ。

「レオンさんは寝ているんですからダメですよ」

「――ッ」

「あ……」

「いっててててて……まったく朝から何だよッ」

床にぶつけた右半身を擦りながら立ち上がるレオンの視界にはフランの背後に隠れる精霊達。

「ん？ 精霊がッ?!」

「私が目を覚ましたら精霊達がレオンさんの頭の上で喧嘩をしてみましたね。あの……私は止めようとして……あの……大丈夫ですか？」

かたまっているレオンの顔色を覗くようにフランは訊ねてくる。昨日のことは全く憶えている様子もなく、元気で普段よりも明るくだ。

「ああそれはいいんだ。それより精霊がいて何ともないのか？」

「はい。何だか元気になった気分です」

「そりゃ……良かった。昨日のことは何か憶えているのか？」

「いいえ。火山の道中からはすっかり忘れてしまっています。でも新しい精霊がいるので成功したのでしょうか？」

「……ああ」

「レオンさん？ 何かありましたか？」

「いや何にも無かったぜ。しいて言うならテッドが別行動の任務になってぼやいていたくらいだな」

「テッドさんが？ 一言お礼を言いたかったのですが……」

「まあいいんだよ。それが仕事だからさ。それにテッドのことは誰にも聞かない方がいいぜ？」

「はい？ どうしてですか？」

「えっと……何でだろうな。別行動中は話をしない決まりなんだ」

「常識ってことですか？ そうなんですね。わかりました。帰ってきましたらたくさん話をします」

あまりにも笑顔で言うのでレオンは複雑な気持ちになった。曇りそうな顔を隠すように振り返ってブーツを履きながらそうだな、と返事をする。

「よし、今日も行くかってまだ飛行を続けているみたいだから親方のブリッジまで行こうか」

「はい」

振り返る時にはすっかり笑顔も見せられるようになっていたのにホッとした。すらすらと出てくる嘘に慣れると妙な気持ちになる。

扉を開けて通路に出ると明るい日差しが穴から洩れて新鮮な朝の風が吹き抜けてくる。

「あ、そうだ。名前は決めたのか？」

「マインとララです」

「どっちがマインでどっちがララなんだ？」

「この優しい顔をしているのがララでちょっと悪戯そうな顔をしているのがマインです」

二人の周囲を回る火の精霊は未だに喧嘩をしているのをフェリアは呆れた様子でレオンの肩に座っていた。

すれ違った船員があっけにとられて驚く表情だが何事もないようにはおはよう、と言うのは昨日の説明があったからだと思いたい。誰かとすれ違う度に緊張する。

そして一番緊張したのはヤーガスだった。相手も緊張した面持ちであいさつをしてくるがフランも自然だったので安心したヤーガスとレオンは小さくうなずき合った。

ブリッジに辿りつくのがやけに遠く感じたが無事に辿りついた。

「待って」

「あーユナか。整備だろう？ 珍しいな格納庫から出てくるなんて」

「そりゃあたしだって格納庫のオイルのニオイにまみれていたんだよってば。でも中には入れないよ」

「どうして？」

「親方が寝ているからさ。起こすと大変だからね。とにかくレオンが来たら格納庫へ案内してくれて頼まれたから待っていたんだ」

「格納庫へ行くのか？ まだ航路の途中だろう？」

「それがさ、色々あって。まあ立ち話もなんだからついておいでよ」

ユナと呼ばれたぶかぶかのオーバーオールを着てマスクを耳にひっかけているくしゃくしゃの髪の毛をした女の子に先導されて格納庫へ向かった。

お尻にはスパナとモンキーレンジがあって歩く度にそれらがぶつかる音が聞こえた。そのおかげで精霊の関心はその工具にいつてい

つしか喧嘩は終わっていた。

「珍しいのかい？　格納庫へ来るとすっげーのがあるんだぜ」

うししし、と独特の笑い方をするユナは工具を手にとって精霊に話しかけていた。ユナは機械以外に興味があるものが少なくシアテイルの整備スタッフとして格納庫で寝泊まりしている変わった女の子だ。

器用に工具をぐるぐると回すのに夢中になる精霊はいつしかユナの手元に全員が集まっていた。

「楽しそうな方ですね」

「ユナは誰にでもあーいう感じさ。それは精霊でも機械でも人間でも接し方が変わらないんだぜ」

機械に話しかける典型的な機械少女。両親の工場ですっと育ったせいもあって機械に思い入れはかなり強くて変な使い方をすると途端に豹変する。

怒らせると怖いんだぜ、と茶化すように笑うレオンがちらりとユナを見る。ユナを案内によしたのはありがたかった。今まで不自然だったのが一気に自然に親しんでいく空気になった。

空気が良くなっただけフランもレオンも明るくなって話も弾んだ。格納庫へ辿りつくときオイルのニオイが充満していて照明も薄暗いので精霊はすぐに姿を消した。頭の中に逃げたのだ。

「このニオイは慣れるといいんだけどなー」

と不満っぽく言ったユナは格納庫の奥へと進んでいく。レオン自身も格納庫へはあまり来る機会はなく並んでいる全ての装置や機械に関心しながら歩いていた。

大型の戦闘機からガトリングやバズーカなどの兵器が多くあつてフランは少しだけレオンの背中へ近づいた。

ユナの足が止まったのは殺伐とした部品の海に寝そべっている優雅な緑色のボードだった。

ジャットウェイバーという風に乗る板でユナの趣味であるライドイングリフトに使う板だった。

「色を塗り替えてワックスもかけておいた。多少の癖はあるけど誰もが乗れるように改良もしてある」

「改良……？」

「そう。これをここへ填めると波を覚えてくれるから勝手に目的地へと連れていってくれるし帰りはこの船をインプットしてるから帰られる」

ユナは板を持ち上げて縦にすっぽりと板を置ける装置へ立てかけながら説明する。手に持ったクリスタルはメモリーストーンという本来は記録に使われる代物だった。

「これは私物だから絶対に持って帰ること。それにメモリーストーンは降りたら必ず手に持って保管しないとダメ。高いんぜ」

「一体何の話をしているんだ？　そもそもどうしてここへ？」

「あー……そうだな。忘れていた」

「頼むぜ」

「悪い悪い。シーアテイルは駆動部が問題があるから補給してから

【ウェルスタン】　へ行くことになる」

「風の谷にある都だったっけ？」

「そう。森の頭上を板で滑って越えれば近道になる。ノアールから急いで来るようになって言われたから先に二人だけでも行かせようってね」

ユナの言葉で補給もあるが船員の乗り降りも含めた整理があることを考えてしまうレオンはふいに言葉を詰まらせる。

「心配するなっではじめてでも乗り方を教えてやるぜ」

それを不安ととったのか、ユナはレオンの背中を叩いてついでに言うように言った。

少し歩いた先にコンテナがあって甲板へ昇降する装置に繋がれていた。板と共に昇る三人の頭上の扉が開いて太陽の光が降り注いでくる。

強い風が吹く甲板の上にせり上がったコンテナ。その周囲を囲む結界が半透明の薄い幕となって風を和らげる。

「ここで練習してから飛べばいい。とにかく乗れよ」

板を寝かせるとふわりと膝辺りの高さで浮かんだ。ユナがグツと両手で沈めてもビクともしない。

「前に力を入れると減速になり、後ろへ体重をかけると加速するかビビるんじゃないぜ」

「止まるにはどうすればいいんだ？」

「キュツと半分の円を描くように板のお尻を振れば止まる。最悪、飛び降りろ。上に乗っているライダーがいなくなれば衝突防止で自動操縦になって近くで止まってくれる」

「はじめから自動操縦でいいだろう……」

「わかってねえな。自分で操作するから面白いんじゃないかよッ」

「面白いのかな？ まあ乗ってみる」

レオンは板へ乗るとゆらゆらと前後左右に身体が揺れてバランスを保つのがやっとだった。

「これは魔力で動いているのか？」

「風だよ。ただの風」

「勝手に動くぜ」

「そりゃ動いてんだよ。お前がッ」

「――っとこれで大丈夫か……」

ようやく安定した板にセンスあるぜとほめるユナが板の裏の中央部分にある丸みを帯びた機械の脇にメモリーストーンを差しして何かを打ちこんだ。

「帰りはこれで。ストーンを持っていたら何処へいてもシーアティルの場所もわかるし絶対失くすなよ」

「わかったって」

「普段の仕事もそれでやってんだからな。それと中身は見るなよ」

「見方もわかんねえぜ。扱い方も知らない」

「……なら問題ねえか。とにかくフランも乗って、ほらッ」

ユナはフランの手を引いてレオンの前に乗つけた。レオンも手を伸ばしてフランを受け取ると一気に引き上げる。

「揺れます」

「悪いな。狭いし慣れるまでは我慢してくれよな」

「……はい」

「しがみついているよ。落ちると危ないぜ」

「はい」

ギョッとレオンの胴体へ手を回すフランの肩を抱くレオンを見ながら背後へ回り込むユナ。

「右手に見えるのが森だ。あの上を抜けろよ」

「ああ……って」

「グッドラック」

ユナは結界を解除するボタンを押しながら思いっきり板を蹴った。二人を乗せた板は勢いよくシリアテイルの甲板から飛び出て大空へ投げ出された。

☆

☆

☆

☆

☆

「ひでえな……おい」

「ドキドキしています」

「ああ俺も死ぬかと思ったぜ。今頃、笑ってんだろうな」

レオンは頭上を通過するシリアテイルを見上げてそう嘆いた。蹴られた板はシリアテイルの外へ出た瞬間に失速し、自ら安定行動を取り始めた。板の裏にある丸みを帯びた装置が赤く点滅したのがセーフティを意味する緑に変わったのに気付くと笑ってやがるユナの顔に見えてくる。

冷静になってフランのことを考えれば魔力が爆発することもあり出して今になって冷や汗が出たがフランは震えながらも少し笑顔でスリルを楽しんでいる様子だった。

「怖く無かったか？」

「レオンさんといれば平気です。何があっても守ってくださいますもんね」

「この高さだと……無理かな？ フランは高いのは大丈夫みたいだな」

「はい。ずっと塔から見えていましたから」

塔の高さは十メートルを越えている。そういえば時計台へ飛んだ時も何のためらいもなく飛んだ姿には驚いたものだ。

板は高度を徐々に下げていく。少し体重を右に寄せて森の方角へ板の頭を向けた。二つの山に挟まれた間にある霧がかかった森に近づくと空気が変わってくる。

肌に吸いつくような冷気があって腐敗した何かのニオイが漂ってくる。

「この森を抜けることを考えると板があって良かったぜ」

「森は危険なのですか？」

「ああ……風の通り道なはずの森に霧があるのが不気味だろう？あれは死人がさ迷う森だって言われているんだ」

「死人の森？」

「存在しない森。地図にも記載されていないくらい人の出入りがない。そのおかげでウェルスタンも平和だって言う説もある」

「物語にも登場しません」

「舞台は観光誘致の目的が多いからな。何もない場所は舞台にならないっていう事情もあるぜ」

板の扱いにも慣れてくると姿勢を崩して風を楽しむことが出来る。長い髪が風に流されて首筋の風通しが良い。

「――ッ」

山の間に入ると途端に急減速する板。風の力が弱まったことに気づいてレオンはグッと後方へ体重を移動させるとゆっくりと加速し始める板。それでもさきほどまでの速さの半分にも満たない。

「風があんまり無いな……仕方ないぜ」

「ウェルスタンにはどのくらいで着くのでしょうか？」

「俺はこっち側は全然行ったことないからな」

レオンは周囲を見渡してそれらしい街を探したが波打った山脈の間にはビッシリと森と霧が並んでいるばかりで街がある風景には見えない。

「ウェルスタンだと物語では丘の古城が有名ですよね？」

「ああ確か真実の鏡と壁面の家族絵が有名だぜ」

「風の精霊は古城にあるんでしょうか？」

「観光したいのか？　もしも風の精霊が違うところにいるとしても街を観光する時間はあるぜ？　合流には時間がかかるだろうしな」

「……はい」

何か言おうとしたフランは途中で辞めたのがわかる間があった。

レオンは気になったが突っ込むことはせずに風が気持ちいいって話に変えた。

フランの表情が曇ると不安になる。徐々に高度を下げる板よりもフランのことばかりが気になった。

「あれでしようかッ？！」

「ああ……すげえ風車の数だぜ」

森の奥に背の高い壁があってその縁にはずらりと風車が並んでいた。角にある白い風車の羽根の部分が割れているのも鮮明に見えるほど近づくともモリーストーンが目的地を知らせるベルの音を鳴らした。

設定しておいた、と言ったユナの言葉もあってそこがウェルスタンだということがわかり風車の隙間を抜けて街の中へと高度を下げ

ていった。

☆

☆

☆

☆

☆

街の中の半分は畑だった。板は設定どおりに進んでいる様子である民家へ向かって進んでいるのがわかる。

「レオンさんッ」

「どうかしたか？」

「子供が手を振って……振ってます!!」

「ああ……あ、そうか」

板に向かって手を振る子供が足元で走って追いかけている。外部から人が来るのが珍しいのか、民家の中にいた人も農作業中の人も手を止めて板に乗る二人を見上げていた。

安定走行を続けている板は高度を下げるために段階を分けて減速を続けている。一番大きな建物の敷地には少ないが兵士の姿も見えている。

「あの……」

「手を振ればいいんだよ。ほらっ」

背後からフランの手をとって小さく持ち上げるレオンがフランの手を左右に振る。手を広げて自分の力で振れるようになった時、フランは優しくほほ笑んだ。

子供も手を振りかえしてくれた喜びに両手で答えると共に追いかけるのを辞めて立ち止まった。フランは少し寂しそうにもう片方の手で自分の手を胸の方へ抱きよせる。褒めるように手の甲を擦った。

「良く出来た。たったこれだけでいいんだよ」

「……はい。でもドキドキしています」

「ハハハ。すぐに慣れるぜ」

そう言ったレオンは複雑な心境だった。水の都市で手を振ることが出来ていればクーパーを受け入れることも出来たのではないか、と思った感情を頭の中から消す為に頭を振った。

もしも、を考えてしまうレオンは無意識にそっとフランから離れて距離をとる。

「しかし、畑が多いな。無理もねえぜ。こんなところに運搬するのが難しいから自給自足になるよな」

「難しいんですか？」

「あああのルートも小型船を通るのも難しい。板は楽に通れるが板でアイテムや食材を運ぶとしたら何度も往復しなけりゃならないからな」

「往復するのは大変ですね」

「風が逆向きだから一度反対側へ流れて山へ登って大周りのルートを辿らないと元の位置へ戻れない」

「そうなんですね。だったら帰りはシーアテイルで帰るんですよね？ 帰れますよね？」

真剣な顔で訊ねてくるフランは心に何かを引っかかっているのだろう。昨日のことも知っていて知らないふりをしていても考えられることが不安だったが、レオンは知らないふりをした。

「ああ心配しなくとも帰るさ。もうあんな怖い真似はごめんだぜ。それにこの板も返さないとどやされるぜ」

「ユナさんの大切なものですね」

「そう。あ、そうだ。心配ならメモリーストーンを持っているか？
絶対に返さなきゃならないからこれを持っていれば絶対に帰れる
だろう？」

「いいえッそんなそんな大切なものをッ！！ 私がッ」

「ハハハ。いいんだよ。俺が持っていると忘れそうで怖いんだ」

「……はい。じゃあ……絶対に返します」

「そう。フランの手で返してやってくれよな」

レオンはそう言って約束するとフランは大きくうなずいた。

板は地表すれすれの低空を減速し、兵士が多くいる民家の前でち
ようど着地した。フランを降ろしてレオンもおりと同時に板をひ
っくり返してメモリーストーンを抜いてフランに手渡した。

ファミルと精霊

「シーアテイルから来た」

「やはり……ではこちらの方が？」

「ああ。そんなことよりも風の精霊ってのは何処にいるんだ？」

レオンは板を脇に挟んで訊ねる背後でフランはメモリーストーンを嬉しそうに眺めていた。兵士の視線はレオンよりもそちらへと向きがちになっている。

咳払いをしてこちらに意識を戻すとハッと緊張する顔になって敬礼をする兵士。しっかりしてくれ、と思いながら頬をかいて何気なく民家の方角を見るとそこにいる老齢の男がフランをジッと睨んでいる姿が見えた。

「それで精霊の場所は知っているのか？ 先に来るように言われて急いだんだすぐに出発するんだろう？」

「いいえッ！！そのようなことは……？ ここは人の出入りが少なくて穏やかな街なので最後に来られると思っておりまし

た」

「何か？ 何かありましたか？」

「いや何でもないぜ。だがフランにはその場所へ行く道が封鎖されているとか何とか言ってくれよな」

「……？」

「頼むぜ。それと場所を知りたい。現地に詳しい人と話がしたい。出来れば精霊の場所を知っている人、案内してくれる人っていうのかな？」

「でしたらこちらへどうぞ」

兵士はたどたどしい口調で案内する。人の出入りが少ないというのでかなり緊張しているのだろう。兵士はちらちらと辺りを見て誰を紹介すればいいのかを困り果てた様子だった。

「民家の前にいるあの老齢の男は？ 事情を知っているのかな？」
「ええ。あの方は王族に仕えていた大臣様です。今ではこの街の長をやっております。と言っても相談役のような役回りです。特に何かをされるような特別な人ではありません。はい……」

いちいち顔色をうかがう兵士にレオンは不満だったが、何も言わずにその男の元へ連れて行ってくれと頼んだ。フランのことを凝視しているということは事情を知る人物だろうとふんでいた。

他の集まった人々はすっかり慣れたのか、それぞれの作業へと戻り始めていた。

「あの……それに民家ではなく、これがウェルスタンの城のようなものでして。都会の方から見れば民家かもしれませんが一応、そう呼ぶのはちょっと……はい」

「ああすまない」

「いえいえそんなッ」

レオンが素直に謝ると慄く兵士がコミカルだった。ひどくうろたえた姿に大丈夫だろうか、と心配してしまうレオンが元大臣の前に通される。

元大臣は凜々しい顔をしていて老齢なのに鋭い眼光があった。兵士も引き締まった表情になり、元大臣がご苦労と言うと敬礼してすぐさま逃げていく。

ようやく追いついたフランとすれ違うと大げさに驚いてヘルメツトがずれたまま走り去った。

「何ぶん、平和な街でして」

「いいや。頼りない兵士だが悪いやつでは無さそうだ。それにこんな場所に攻め込もうっていう物好きはいないんじゃないかねえの？」

「もう王族も去り、何もない街ですから心配はしておりません。ただ静かに暮らせればいい」

「それがいいと思うぜ。俺らも風の精霊に会ってすぐに帰るようにするぜ。それで場所を知りたいんだ」

「そう焦らないでください。まずは小さいですが我が家でくつろぎ下さいませ」

元大臣はそう言って民家の中を案内する。レオンは困ったがフランに無理をさせるのも良くないと思って元大臣の後について民家中へと向かった。

吹き抜けの建物で玄関からは全ての部屋の扉を見ることが出来る。一人には広すぎる建物です、と感傷的に呟いた元大臣は右手に見える暖炉があるリビングへと二人を通した。

「すぐに戻ります。ここは自分の家だと思ってごゆっくりおくつろぎください」

元大臣は深く礼をして玄関の外へと出て行った。

残された二人は持てあます時間に悩まされる。妙に居心地の悪い広さにレオンは戸惑っているとフランの表情が強張っていく。

「何か……？ 具合でも悪いのか？」

「いいえッそんな。ただ……」

「ただ……？」

「見覚えがあります。この絵に」

暖炉の上にあった一枚の絵を指差して表情を曇らせるフラン。人

の絵だ。優しい瞳に金色の髪が似合っている若い男の肖像画。

「有名な絵なのかもな。それか俳優とか。舞台が好きだって言っただろう？」

「違います。俳優さんや女優さんの名前は全て暗記しています。それに本にあった絵ではなく、実際お会いしたことがあるような気がします」

「ずっと塔にいたんだろう？」

「……はい。物心がついた時から塔にいました」

「もしも会ったとしたらその前か、それとも気のせいかな。何の絵か戻ってきたら聞いてみようか？　だがここはノアール領だからエレンの人を飾るとは思えないけどな」

「そうですね。私の勘違いです。きっと」

やけにあっさりと引き下がるフランにレオンも黙ってしまった。元々ノアールの人間ならば王族に知り合いがいてもおかしくない。赤ん坊の時の記憶でも憶えていることもある。レオンが母親の顔をハッキリと憶えているように近い人間の顔は忘れない。

さらわれた子か、とレオンも考え込むと室内は無言になった。フランは変わらず絵ばかりを見上げているし、レオンは怖くて話をすることが出来なかった。

元大臣が戻ってきたのはそれからしばらくしてからだった。

「この絵は誰の絵でしょうか？」

フランは元大臣の顔を見て飛び付くように訊ねた。元大臣は視線をレオンへ送ってからフランの方を見直す。緊張するレオンも息を飲む。

「ウェルスタンの城主　コットンウェザーミルファミル様です。私

が仕えた方ですのもう数十年も前の写真です」

「エレンへと来られたことはありますか？」

「エレンへ……？　いいえ。この界限から出ることは決して無かった人です。小さな頃から森へとよく一緒に遊んだものです」

「そう……そうですか。ありがとうございます」

フランは諦めて視線を下げると精霊が現れた。レオンの頭を蹴ってフランへと飛んで慰めるようにフランへ鳴いた。

その光景を表情のない瞳で見つめる元大臣はレオンの前へと座り、声を落として話した。

「やはりあの方はファミル様の娘ですな」

「――ッ」

「わかっております。事情も知っております。ですが、目の前にしても未だに信じられません」

「……本当なのか？　さらわれた子って言っていたが、その話は真実なのか？」

「はい。私も精霊を見たことがあります。森であのようにファミル様を囲む精霊の姿を見たのを今でも忘れられません」

元大臣はフランを偽物だと疑っていたことも正直に話した。あの睨む瞳はそういう意味もあったことを深くお詫びをした。

「先にお越しいただいたのは私のわがままからです。どうしてもこの瞳で確認したかった」

「それで本人だという確信が出来たのか？　絵に懐かしさを感じたからか？　偶然かもしれないぜ」

フランは精霊と話をはじめて、やはり肖像画が気になるのか、そちらばかりを見上げてこちらの話を気にする様子もない。

「私はそう信じたいのかもしれませんが」

「さらわれたのも赤ん坊の頃だ。何があったのかは知らないが負い目があるんだろう？　だから生きていて欲しいとか思っているんじゃないのかな？」

「そうかもしれませんが。さらわれたのは赤ん坊の頃で精霊の仕業と言われておりました。何しろ突然、城から消えたので」

「なるほど。精霊の仕業だと思われていたから搜索もされなかった」「搜索はしました。ファミル様の言いつけどおりに森をくまなく調べましたが……ファミル様は病気で若くして亡くなり、女王様はすぐに搜索を断念しました」

「……それですぐに都へ行った。もしかすると女王が加担しているのかもな」

「真相はわかりません。ですが我々は女王様の命令に従うしか出来ません。最も、今でも森の研究と言って森へは探していたのですが」

元大臣は深くため息を吐いた。

「あんたは事情を深く知ってそうだな。聞きたいことはたくさんある。時間があるなら出発を遅らせて話をしたい」

「私も同意見です。リイザ様には別の事情を伝えて待ってもらいましょう」

「リイザ様……？」

「申し訳ございません。今はフラン様と呼ばれているのでしたね」

「ああ。フランはフランだ。そうフラン……フランだ」

噛み締める言葉を何度も繰り返した。

その後、フランを近くに呼んで話をした。精霊を呼ぶ条件が揃わないとダメだと言って今夜はここで泊まるようにお願いされるとフランはレオンの顔を見る。

レオンはクイツと眉尻をあげて、仕方ねえんじゃねえの？　と言
うとフランは少し間を置いてコクン、とうなずいた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

オレンジ色の提灯が軒先に並んでいる。

これは歓迎の気持ちです、と元大臣は言ってささやかな祭りをさ
せてもらいたいとフランを街の若い女性達に案内させた。

レオンは元大臣と精霊についての話し合いがあると行ってここへ
残った。一瞬、不安げな表情を浮かべたがすぐにパツと笑顔を見せ
て迎えにきた女性達と並んで街の喧騒に消えていった。

「何処から話せばいいのでしょうか……やはり父のファミル様のお
話からした方がよろしいでしょう」

「ああ」

「あの方の父、ファミル様はイタズラ好きで活発な坊ちゃんでした。
私は年齢も近いこともあり付き人として幼少期を過ごしました」

何もかも懐かしい、と言うように柔らかく笑ってしわだらけの顔
に憧憬が映ったように思える。外を走る子供の声が聞こえたからそ
う見えただけとも思えるほどふいに老齡のしわがれた男に戻ってし
っかりとした口調で続きを話した。

「精霊に関係する話からにしてくれ。フランが戻る前に聞いておき
たい」

「……はい。精霊と出会ったのはいつものように森へ入った時でし
た。あの日は霧が濃くて五歩前を歩くファミル様の背中も見失いそ
うでした。ただ見失ってはならないという気持ちだけで追いかけて

いたので何処にいるかすらわかりませんでした。ファミル様には位置も把握出来ていたようです」

「位置を精霊が教えてくれていたとか？」

「いいえ。それはわかりませんが……おそらく妙な自信をお持ちの方でしたから」

妙な自信とはじめての舞台でフランが口にしたようなことだろうか。そうだとすればファミル自身も不安を感じていたに違いない。それを悟られないための強がりだとレオンは思った。

「そのファミル様が急に立ち止まり、何かを見つけたと大変興奮した様子でおっしゃりましたが情けない話ですが私はもうヘトヘトで「霧があつたんだよな？ だったらファミルの位置しか見えなかったとも考えられるぜ」

「氣遣ってくれてありがとうございます」

「いいや……そんなじゃねえけど、それで続きを話してくれ」

「ほらついてこいって、と私の手を引いて何かの元へと走っていききました。すると深い霧が発光している姿が見えたのです」

「それが精霊だった？」

「都合のいい話に聞こえるかもしれませんが、精霊だと思います」

「だと思う？」

「ファミル様は光に手を伸ばして触れて会話をしていたりましたが、私にはファミル様の声しか聞こえませんでした」

フランも精霊と話が出来る。その目で光景を見たという話をすれば、やはりリイザ様だと確信するのだろうか、とぼんやり考えて続きを待った。

「ややあって発光する光は弱まりやがて消えてしまいました。手を伸ばしたまま動かないファミル様へと話を聞くと約束をしたって言

うのです」

「約束？」

「家に帰られるように俺が何とかしてやる、と。無責任に聞こえるでしょうがファミル様はそういう優しい方でした。困っている人には手を差し伸ばすのは当たり前だと口癖のように言っておりそして実行していました」

「精霊の血を引くって……そういう話を精霊からされた。てっきり精霊との子供がフランだと思っていた」

「精霊の血を引く……もしかするとあの時にファミル様の身体へ入ったと解釈をすれば、おそらくは」

「理解出来るってことか。こじつけにも見える話を信じているのか？」

「残念ながら私には見たままをお伝えするしかありません」

元大臣はうやうやしく頭を下げて力添え出来ませんで、と謝るのに困り果てるレオン。

「だったら他の話を聞きたい。たとえば、何か特別な体質を持っているとか」

これでも確信を持ってない。赤ん坊に多い体質だとも言える魔法を自然に発する体質。

「それから結婚したのは五年後。リイザ様が産まれたのはさらに後。その時には大臣の職について多忙な身でしたので詳しくは何ともお答えできません」

「……だが、子供だって直感的に思った」

「はい」

「何か他にはないのか？ 子供だって確信出来れば、出来れば――」

思わず口走りそうになった言葉を引っ込めてレオンはうつむいた。全てが終わった後に帰れる場所がある。それだけでずいぶんと救われるだろう。

「確かめる方法ではございませんが、昔住んでいた古城が残っておりますので何かを思い出すかもしれません」

「……思い出せたとしてどうすりゃいいのか。フランはエレンにさらわれてエレンの子だとして育てられた。それがいきなりノアールの産まれでさらわれて幽閉されていたって知ったら混乱するぜ」

「あの絵をご覧になったリイザ様の顔を憶えておりますか？」

元大臣はフランが見ていた絵を指差して訊ねた。コクン、とうなずいたが正直あまり憶えていない。フランが遠くに行ってしまうようで見れなかった。

「きっとリイザ様は今困惑しておられる。それを黙っているのと正直にお話するのではどちらの方がリイザ様のためになるのか、おわかりになりますね？」

「……ああ。だが話していないことがある。フランには魔法を自然に発する体質があつて不安定な心になるとどうなるかわからない。もしも魔力が暴走すればこの街なんて――」

「心得ております。魔法を自然に発するのは精霊が己の場所を仲間知らせる合図。その波長同士があつて互いの居場所を確認し合うことと聞いております」

「聞いた？ 誰から」

「ファミル様からでございます。魔法を自然に発する赤ん坊が産まれた時に魔力を拘束しようとしたことがあります、そのままにしておいてくれと命じられたことがあります」

「さらわれた子だつて言うのか？」

「はい。さらわれた時に同時にファミル様も殺されたので搜索が遅

れたと共に結婚されていた奥さまが女王様になり、主人のことを忘れたいと何もかもを捨てて忘れたいと都へ行かれました」

「うやむやのままに探せなくなったのか……ッ」

レオンは顔を歪めて怒りをあらわにする。これは誤解していた自分への怒りと共にエレンへの怒りでもある。誰かが一つを奪うだけで全てを壊していったのが許せなかった。

「犯人は誰だかわかっているのか？」

「いいえ。ですがかなりの大男だった、と聞いております」

「大男……巨人族ってやつか？」

「おそらく。ノアールの鎧を着ていたので誰も気に留めなかったようです」

思い当たる人物がいる。どうしてこの国へ来なかったのかもわかった。おそらく近くで合流すると伝令を送ってくるに違いない。

親方だ。

怒りは戸惑いに変わり、やがて無へと消えた。

「古城へ行くよ。だが条件がある。城へ行くのは俺達だけだ」

「はい。それでは近くまで案内させていただきます。風の精霊がいる住処もその城の近くにございます」

「ああ……話せて良かったぜ。もしもその子供じゃないとしてもフランが気に入ったらここで住んでいいか？」

「何もない街ではございますが……それでよろしければ二人で住む家を用意いたしましょう」

元大臣に礼を言ってレオンも歓迎祭へと向かうことにした。

外は肌寒い夜。オレンジの暖かな光に包まれた静かな街は誰もが仲良くて、その輪にいるフランも今までに見せたことのない笑顔を

見せていた。

ここで暮らすのも悪くないかな、とレオンは思いながら踊り続ける人々の輪へと加わったのであった。

真実の鏡

その次の日、踊りつかれた余韻に浸って布団の中の温もりにまどろむ朝を変えたのは一通の伝令だった。

合流地点の変更の旨、港の街 【シャガール】 に変更。とだけ書かれた紙を丁寧に畳んでポケットの奥へと押し込んだ。

「何か……ございましたか？」

「いや。ただ補給に手間取っているみたいだからこっちから板で港へ戻って来いだってさ」

「……」

「たまにあるんだよ。まったく港で遊びたいからって」

「遊び？」

「そうだよ。シャガールってのは貿易の拠点になるから面白いものや珍しいものまで集まってくるし、ギルド協会の中央もそこにあるんだぜ」

「行ってみたいです」

「ハハハ。だったら早く精霊を連れて戻ろうぜ」

枕元へ手紙を置いた元大臣のメイドの女性は足早に部屋を後にして、薄く開けたままの扉の隙間からこちらを待っていた。

レオンは立ち上がり、大きな窓際にあるソファアの上で精霊に囲まれているフランに言って先に部屋を出る。扉の脇にいるメイドは目を伏せて二人の退出を無表情で見送り、中に誰もいなくなるとすぐさま中へと身を押しこんでベッドメイキングを始めた。

二階の右手にある大部屋。フランに用意された部屋は隣の部屋だが、先に起きてレオンの起床を待っていたのだろう。

こんなにも広々とした部屋にゆっくりと眠れる環境に面倒な片付

けはメイドがやってくれる贅沢な朝なのにレオンの表情は浮かかなかった。

「疲れたな。そりゃあんだだけ踊れば疲れるよな」

背後で視線を感じて背筋を伸ばしてそう言ったレオンへフランもそうですよ、と笑った。特別気にしている様子も無かったがレオンの猜疑心が焦らせる。

十段の階段の下、玄関には数人の兵士がいてレオンを見るなり敬礼をする。その背後にいたフランが視界に入ると先頭にいる老齢の兵士だけが顔をしかめた。

「こんなにも兵士がいるなんて遠くなのか？」

「いいえ。念のため、リイザ様に何かあつては――」

「……まあ多い方が心強いぜ」

兵士はレオンの放つ眼光に言葉を詰まらせるがレオンは呼吸を一つ置いて何も聞かないふりをした。精霊がまた喧嘩をしているのに助けられたのもあり、兵士はヘルメットを深くかぶりなおして先導致しますと言って外へ出た。

レオンとフランが老齢の男の背後を歩き、その背後を若い兵士が囲む陣形で畑の脇道をひたすら歩く。

「街の外へ出るのか？」

「いいえ。外壁のせいであまり大きくないように見えますが、畑の裏側の風が来ない位置にまでは長い距離があります」

「低い位置に城を作るのか」

「はい。昔は今のように入音が無かったもので風車の音が静かになる場所は風の通らない道しかありませんので」

「なるほど。静かに眠りたいってことか」

「攻められるようなことも無いので……暮らしが一番に設計された城です。太陽の明かりも入って中はとっても暖かいのもう少し御辛抱ください」

畑の裏側へ回ると山と風車が立つ壁のせいで全体がすっぽりと影に隠されてしまっている。フランが両手で自分の腕を擦っているのを横目に老齢の兵士はそう労った。

フランはコクリ、とうなずくだけで感動して泣きだしそうに表情を歪める兵士。

「何処へ向かっているんでしょうか……？」

「古城だぜ。移動した後の新しい方だが」

「そこに風の精霊がいますか？」

「いいや古城に行くのは——そうだな……えっと……」

レオンは唐突の質問で返事を用意していなかった。頭を掻いて困っていると老齢の兵士が救い舟を出してくる。

「城へ向かわれるのは真実の鏡というものがあまして、それはそれは巨大なレンズでして天窓から差し込む光を吸収して魔力へ返還していたこともあるそうな」

「舞台でも出てきます。嵐が来たのを鏡の力で跳ね返したっていうのもありますよね？」

「はい。あれは民の街を思う心が鏡に反射して嵐を押し返したと言われてあります。事実はわかりませんが、そう信じるだけのお姿をしておられますよ。鏡には幾万のウェルスタンの心が宿っております」

「すごい……それが精霊と会うのに必要なのですね？」

「何があるのかわかりませんゆえにお祈りを捧げてから、と元大臣様がおっしゃるもので回り道になることをお許しく下さい」

「いいえッ。いいえッ。そんなとんでもありませんッ。わ、私は鏡も見たかったのです」

「それは良かった。して、鏡は見たことありませんか？ お嬢様は」

「いいえ？」

「さようですか。それならば……さぞ、感動なさるかと思います」

老齡の兵士は何かを期待したように訊ねたがフランは首を振った。寂しそうに前を振り返る思わせぶりな兵士にフランはレオンの顔を覗く。

もしもここがフランの故郷でその城がフランが産まれた城ならばこのくらい少しずつフラン自身におわせる方がいいのかもしれない、と思っただけに無言でほほ笑みかけるだけにしておいた。

一本道で迷う必要も獣に襲われる心配もないのに兵士に囲まれた異様な光景に目をつぶればのどかな街だった。畑から果実のニオイがあつて防音から少し漏れて聞こえる風車の音も丹田に響いて眠気を誘ってくる。

「つきました」

老齡の兵士は立ち止まる。

錆びた銅の門扉に城壁の欠片が伸びっぱなしの雑草の上に落ちている。平らに長い城で中央に長細い筒がある。その筒に日の光が吸い込まれたふもとに鏡がある、と老齡の兵士は言っただけでフランの顔を覗いた。

比較的新しい建物だが廃墟特有の空気が充満しているせいでやけに寂しく見えた。周りに建物がないというのも寂しさを助長しているんだな、とレオンは周囲に目を配った。

「中へ入るのは私とお二人様だけです。ここを見張っていてくれ」

「わかりました」「わかりました」
「うむ」

老齡の兵士は若い兵士にそう言って門扉を押し開いた。簡単に開く門扉の端を持ってフランとレオンを待つ。二人が通り抜けると手を離して門扉がゆっくりと閉まった。

丸い円柱が多くあるだけの殺風景な通路。カーペットもカーテンも無く、生き物の気配もまるでない。

「右手に行くと王族の部屋があります。左手へ行けば奥にメイドや執事が使う部屋やゲストルームに厨房や食堂があります」

「真っ直ぐに見える中庭……」

「さようでございます。この目の前に見える階段の裏に行けば中庭がございまして中央にテラスがあり、上の部屋から差し込んでくる光が漏れて大変過ごしやすい空間だと幼きお姫様や王子様には人気でした。駆け回る姿も憶えております」

「……」

フランはそれっきり黙って目を細める。やはり何かを思い出したのだろうか、とレオンは訊ねようと思ったがフランの表情を見ると声にならないで黙ってしまった。

「今は手入れもしておりませんので雑草ばかりですのでお見せ出来ません。では上へ案内いたします」

老齡の兵士は事務的に案内をしているのだが、やはりちらちらとフランの顔色を覗いて反応を窺っているのがレオンには気になった。三人は無言で階段を登り始める。手すりの途中には平べったい物置があってそこにはオブジェが置かれていたと推測出来る。フランにはそれが見えているのか、平べったい物置に視線を向けて何かを

眩いていた。

「人が出払ってからは全てを引きあげましたが、間取りは変わっておりません。二階は鏡とそれに関係する魔術書庫がありました。研究者も多く居て城とは思えない光景が広がっております」

「ここは入れない……たとえ王族でも入室許可はおりなかった」

「さようでございます。私の目を盗んで二歳のお姫様がよく遊びにこられておりました。やはり……リイザ様でしょうか？」

「……リイザ？」

「勘違いならば失礼をいたしました。そのお嬢様のお名前です」

老齡の兵士は深く頭を垂れてそう言うとなフランは口内でリイザ、とその語感をなぞった。

「レオンさん……私……おかしいです」

「どうかしたのか？」

「来たことがないはずなのに、ここを知っています。おかしいです」

「舞台や本で見たんじゃないのか？」

「違います。違ふと……思います」

フランも困った顔でレオンを覗いた。

レオンはただフランの手を握った。

「嫌ならさ……出てもいいんだぜ。祈りなんて俺がやっておくからさ」

「嫌じゃありません。それよりももっと知りたい。もっとここへいたい」

「……」

その言葉を背中で受ける老齡の兵士はしばらく間を置いてから歩

き始めた。その背中へついていこうとレオンが動く。フランも無言で掴んだ手を握りかえた。

おそらくフランはリイザというお姫様でさらわれた子というのは本当の話。だとすれば、やはりさらったのは親方なのだろうか。親方の態度がおかしいとかノアールとの関係だとか巨人族であると言ったこと、全てが思考を悪い方へと迷いこませる。それを知ればフランは何て言うのだろうか。

「レオンさん……どうしてここへ来たのでしょうか？」

「……それは、何て言えば伝わるかわからない」

「待っています。私はレオンさんのことを信じていますから」

その手から伝わってくるものは焦りだった。フランはこの街へ置いて行かれると考えているようだ。船にいと迷惑がかけられると思っているに違いない。そして、これもレオンの勘でしかないことをレオンは知っている。

大広間に入ったその中央に光が収束しているのが見える。筒状に伸びる天井には大きな窓があつて眩しいくらいの太陽の光が室内にはあつた。

「昔はあの鏡一点へと光を集める装置で埋まっていた部屋もご覧のとおりです」

老齡の兵士は殺風景な部屋を紹介した。

中央にある鏡もくすんだ銀に見える。鏡は楕円形でほんの少し傾いて天井を見上げていた。それを支える土台の側面には多くの装置が接続されていた痕跡があり、床には大量に張つてあつたチューブの跡が残っていた。

太陽の光にうつすらと舞う埃が幻想的で思わず息が止まるレオンは視線を少しずつあげて天窓を見上げた。

「すげえな……何か歴史を感じるぜ」

「この鏡があったのは数百年も前からです。精霊が落とした涙が結晶となってこの形になったとも言われております」

「今はどうしてここへ？ 何かに使わないのか？」

「はい。鏡はある事件に亀裂が入ってしまったので使えなくなってしまったのです。廃棄するのも忍びなくて今では祈りを捧げるためだけにあります」

「ある事件……？」

「はい。それは誘拐事件でございます」

老齡は眉に皺を寄せて後悔の念を隠すことなくそう答えた。

「誘拐……？」

「そう、リイザ様が誘拐されたあの日、巨人族の男は……陛下を……ファミル様を殺してリイザ様を誘拐してその街から逃げました」

「その誘拐された子は何処へ……」

フランの問いに何処まで答えていいのかわからずに老齡の男はレオンの顔色をうかがう。レオンは大きくうなずいた。

「少し前にエレン領で見つかった、と聞いております」

「エレン領で見つかった？ そんな話は……」

「はい。聞いていないはずでしょう。それはあなただからです。リイザ様」

「……私が？ そんな……私が……」

「私を憶えておりませんか？ ヒースでございます。いつもリイザ様の警護をさせていただいております」

「憶えてませんッ」

強く反発するフランの声が広い室内に響いた。

「フラン。真実はまだわからないからここへ来たんだ。混乱させたことを謝るぜ」

「レオンさん……私はどうしたらいいでしょうか？」

「それはフランが決めることだ。俺はフランの傍にずっといる。これだけは変わらないぜ」

「ずっと……？」

「ああ。何があろうと俺は傍にいる。だから受け入れられなくても何もかもが嫌になってもいいんだ。ただ真実を知った方がいいだろう？」

「……」

「あー……なんて言えばいいのかわからねえぜ。とにかく何も変わらないんだ。過去がどうあってもつてのは無理か……」

困惑するレオンにフランはただすがるような視線を向けている。

「何もわからないでいるより、知った方がいいと思ったからここへ連れてきたんだ。エレンを怨めとか、ノアールにしようとかそんなんじゃないくてさ」

「……」

「困らせるつもりは無かったんだ。それは知っておいて欲しい。フランのために思ってそうした方がいいと思った。うまく言えなくてごめん」

「……レオンさん、私は」

「ゆっくり考えよう。受け入れられないならそれでもいいんだ。この話は忘れよう」

「無理です」

「強引だったな……ごめん」

「謝らないでください」

「そうだった。俺が言っただったな」

「……はい」

少しずつだが、口数も増えて会話もするようになってくるフラン。拒絶の意思も和らいで見た時、ポケットからメモリーストーンがこぼれた。

「これも返さないとダメだし、急いで精霊のところへ行こうか？
もう考えるのは辞めよう」

レオンが拾い上げようと手を伸ばした。

メモリーストーンがチチチ、と何かを呼びだす音が聞こえた。落ちた衝撃でボタンを押してしまったのか、と思って拾い上げて操作しようとする。

「お前のせいでッ！！ テッドは殺されたんだッ」

響く声。

メモリーストーンの表面からフォログラフが扇状に拡散して映像を見せる。レオンの頭上辺りに展開される光景にフランは目を疑った。

「私……私がいる？」

寝ぼけたフランはすぐに眠ってしまい、スウィニーがヤーガスを追いだす医務室から場面はパッと通路へ変わる。

騒ぎをおさめるロニーにレオンがやってくる。船室での出来事を野次馬の後方からとった映像だ。

姿はあまり見えないが、声はハッキリと聞こえてくる。

「何ですか……これは……」

「フランツ。これは――」

「テッドさんは私のせいで死んだ？ 別行動だって……」

「……」

メモリーストーンはまた場面を変えた。

パッパッと映像は何度かわわって見たこともない図式になり、風の進行制御をどうかという音声が流れて少ししてメモリーストーンのフォログラフは消えた。

「嘘をついていたんですか？ テッドさんは私のせいで」

「違う。俺のせいだ。俺が助けられなかった」

「違いますッ！！ 私が受け入れられなかったから……死んだ。そうおっしゃっているじゃないですか……どうしてまた嘘を言うんですか……」

フランはレオンから目を背けて繋いでいた手もすうーと離れた。

「私の強い魔力から仲間を守るためですか……？ 私は邪魔ですか……？ 私は……」

「……」

「守ってくれるって言ったのも嘘ですかッ！！ 何が本当で何が嘘なんだろうかッ？！ ここにいるのも何かの嘘……本当はここへ捨てるために仕組んだんですかッ！！」

「違う」

「目を見て言ってください！！」

その言葉で目を背けていたのは自分だったことに気がついたレオンだが、視線は埃だらけの廊下に吸い込まれていた。

どうしてすぐに答えられなかったのだろうか。守りたい、傍にい

たいてって言葉は本当の気持ちだとレオンは確信しているが、色々迷いがあった。負い目があった。そしてテッドの死を受け止められていない心がフランのせいにしていたのを知った。

「舞台に出ていられる方ですものね。嘘だって慣れたものでしょう……すっかり騙されてしまいました」

「……俺は」

「私だけが喜んで私だけが楽しんでバカみたい。そんな姿を見て何て思っていましたか？ 『ああこれで仲間を守るんだから我慢しよう』 って思いましたか？」

「違う」

「けどもう耐えきれなくてここへ捨てるつもりだったんでしょッ？！」

「違う」

「だったら……だったらどうして助けてくれたんですか……ッ」

フランは涙声でそう叫んだ。

何も言い返せないレオンは黙ったまま、ゆっくりと振り返る。目を見て答えよう。ありのままの気持ちを言おうと決めた時、鏡が眩い光を放った。

「フラン様。お迎えにあがりました」

光が落ち着いて、目を開けると鏡の前で黒いスーツの男が跪いた。男は丁寧な口調でフランにそう言った。

「お前は——ッ」

「ダリア様が心配なされております」

「タイミングが良すぎるッ。お前の仕業かッ」

黒いスーツの男へと攻撃を仕掛けようと剣を抜いて飛びかかるレオンだったが、男が宙に手を払っただけでレオンの身体がねじれて床へ伏せた。

「……」

「さあフラン様。私と共に帰りましょう」

「わかりました」

フランはハッキリとした口調でそう返事して男へと歩いた。倒れるレオンは立ち上がろうとしたが、指先さえ動かさなかった。

「待ってッ待ってくれ」

レオンは声の限り叫んだ。

身体が動かない。それでも動け、と動いてくれ、と身体へ鞭を打つように叫んだ。

「待ってどうしますか？ また嘘を言って慰めてくれますか？」

「フランどうしたんだ……？ フランッ」

「その声で優しいふりをしますか？ その腕で強く守ってくれますか？ その笑顔で幸せにしてくれますか？」

「……」

フランは疑問符をたくさん乱雑に並べても歩みを止めることは無かった。全てを聞くだけのレオンはやがて支配する力に負けて言葉も失った。

「失礼いたします」

「ええ。風の精霊を回収してから帰りましょう」

「はい。仰せのままに」

黒いスーツの男の前で反転し倒れたレオンを見つめたフラン。男は立ち上がり、手をかざすとフランと共に闇に包まれてあつと言う間に消えた。

同時に動けるようになったレオンに老齡の兵士が近づいてくる。

「アポリの陣宮か……」

「それは何ですか？」

「バッハシヨートルとリグルベントレの脚本ではラストが違うが、有名な物語だ」

「……」

「フランの言った台詞がその物語の有名なシーン。親友の死を奥さんに隠していた兵士がその未亡人と恋に落ちる」

「それがどうかしましたか？」

「途中で部隊長が謝罪に来て死んだことがバレた時に未亡人が主人公へ言った台詞」

「……」

老齡の兵士は気が狂ったのか、と言わんばかりに首をひねってレオンに手を貸した。

「主人公はもう一度、戦地へ行かなければなくなるんだ。その時に言った言葉がさっきの台詞」

「それが何の意味があるのですか？ 私には見当もつかない」

「もう一度、チャンスをくれるってことだ。最後の風の精霊へ行くと言言したのもそこで答えを聞くなってことさ」

二人にしかわからない秘密みたいで今はそういう場合じゃないが、嬉しかったと素直に思えたレオンはかすかに笑った。

「バッハは戦地へ行かずに二人で逃避行をさせた。リグルは戦地へ行って必ず帰ると約束したが、ついに死んでしまった」

「だとすればバッハと答えるべきです」

「そうすれば精霊も何もかもを捨てるんだぜ？ ノアールの兵士がそんなことを言っているのか？」

「構いません。私は一国の兵士である前に一人の人間です」

「……この街は、フラン達を愛してくれていたんだな。それなのに俺は見捨てたとばかり思っていたぜ」

「私は今も何も出来なかった。見捨てたのも同じことです。あの日も怖くて動けなかった。巨人族の血まみれの男が怖くて私は隠れたのです」

「……すまない。思い出させたか」

「いいえ。追いまししょう。その言葉が本当ならばリイザ様はあなたが来てくれるのを待っておられます」

「そうだといいいんだが」

そう不安をにごして言ったレオンは伸ばされた手を掴んで立ち上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7863x/>

その名も嘘つき勇者様

2011年12月5日13時54分発行